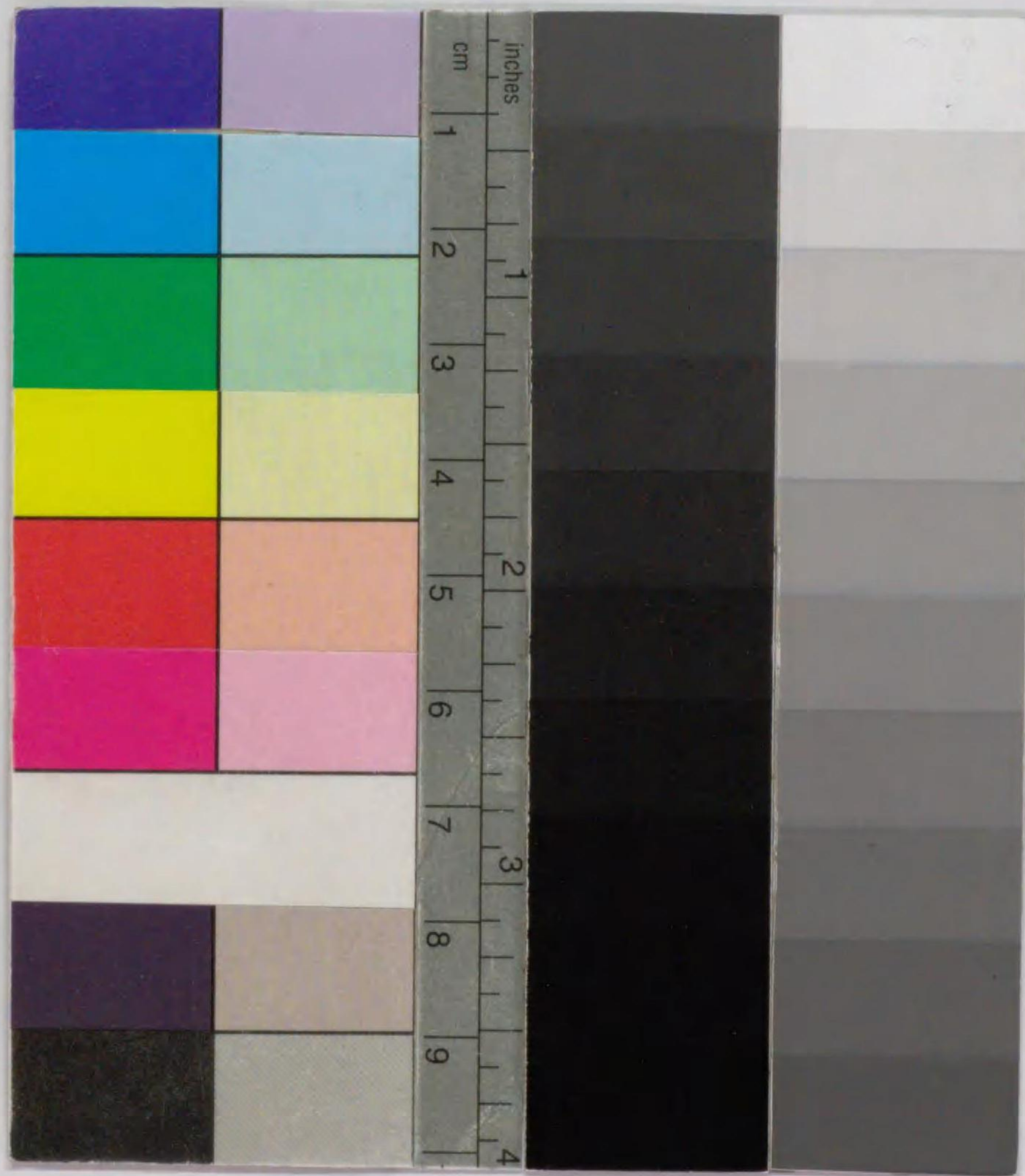
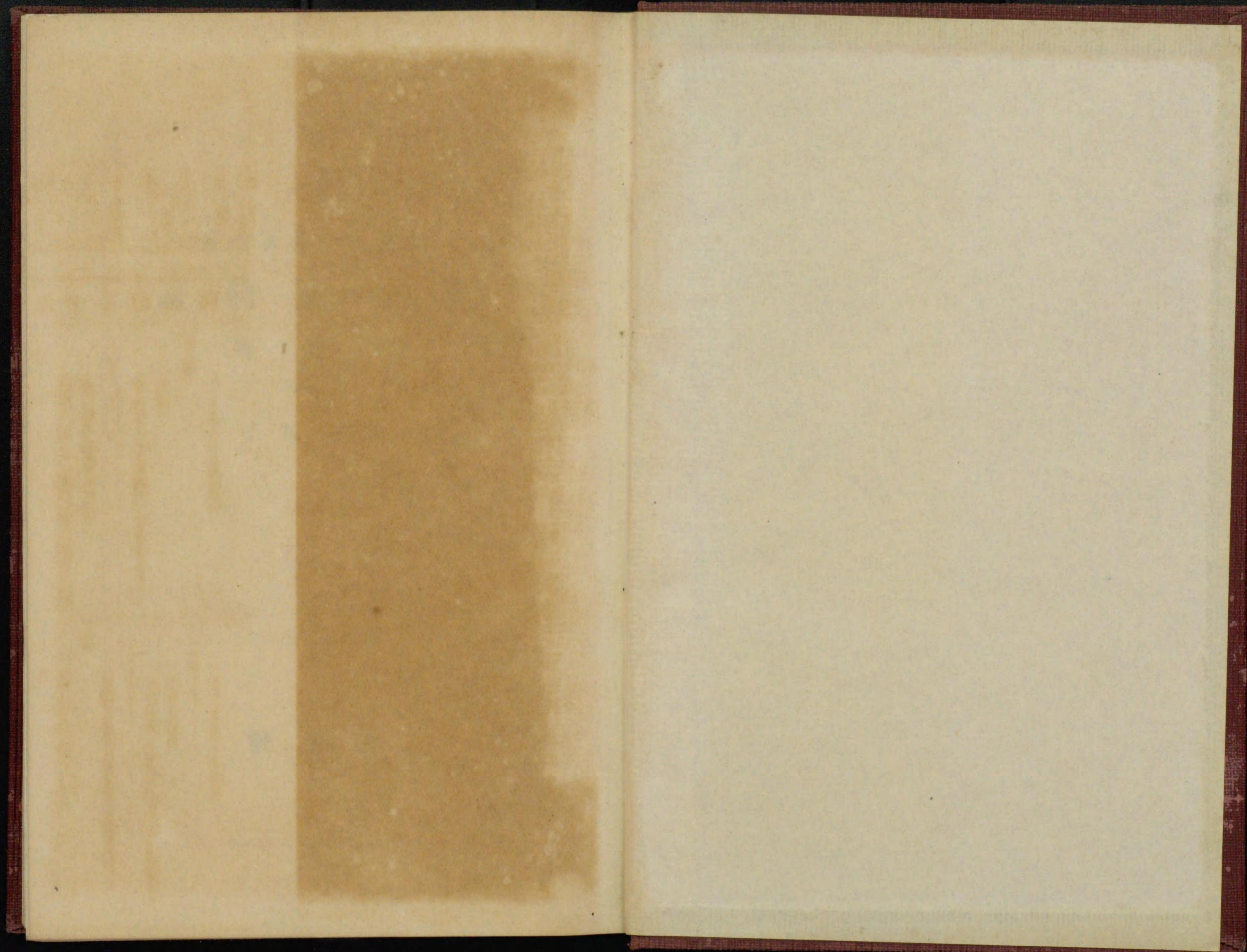


569-61



1200501546375

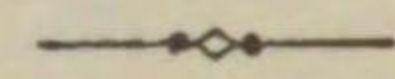




世界大衆文學全集

千一夜物語

(戀愛篇)



森田草平



改造社



うやるすもでひ言としよのいなはところが怖かな靈魔、いやしつらいてり降
(照參頁三一)。たしを似真手に王の人二、に

569

61



I 種

W



1200501546375

譯者の序



譯者

その昔平田禿木先生が英吉利から歸られた時、あちらでは何んな田舎の百姓を片手間のやうな旅籠に泊つても、その爐棚には「聖書」と「千一夜物語」と、それからドイツケンスの作のどれか一冊位は屹度乗つかつてゐたと言はれた。つまり圖書室などの設けのない百姓家でも、この三冊だけは具へてゐると言ふのだ。これは勿論ドイツケンスの小説の本國でいかにポピュラリテイを得てゐるかを説かれたものだが、この言葉は同時に「千一夜物語」が「聖書」と同じやうに汎く讀まれてゐることを、いや、それがもう取立て、語る必要すらない公認の事實であることを證明するものであらなければならぬ。

それだけに又この書が汎く歐洲一般の文學にどれだけ大きな影響を與へたか、それも事

事しくこゝに述べるまでもあるまい。あまりに好く知れ互つた事實である。今回この「千一夜物語」の中から戀の物語だけを引抜いて、世界大衆文學全集の一卷として出版することになつた。この書の中には、戀愛を主としたものの外に、冒険の話もある、魔法の話もある。従來子供の讀み物として世間に流布する所謂「アラビヤ夜話」なるものは、皆それ等冒険譚魔法譚を集めたものに外ならない。本書はその逆を行つたもので

ある。つまり子供には見せられない、大人の「千一夜物語」と言つても差支へない。南國の烈日の下に棲息するアラビヤ人の戀愛のいかに熱烈凄愴を極めるかは、教王ウエジードが二人の奴隸の侍女に對する愛にうつゝ、を脱かして、政治を顧みず、日夜後宮に籠つて飲みつ歌ひつ踊りつしてゐたが、その最も愛する奴隸のハバーベエが柘榴を食べて、その粒が咽喉に痞へて頓死してしまつた。ウエジードの悲歎は見る目も痛ましい程で、その亡骸の傍を離れ兼ね、接吻したり撫で廻したりしてゐる間に、たうとう死骸は腐敗し始めた。臣下の諫めで一旦は埋葬したが、五日程経つと、どうしても今一目愛妾の顔が見たくて堪らなくなつて、強ひてその墓を發掘させた。死骸はぞつととして目も當てられぬ程酸鼻を極めてゐたが、教王はなほその死骸に取縋つて號泣して止まず、弟メスレメエの切諫によつて、再び地下に納めたものゝ、十七日間悶えに悶えた擧句、たうとう彼自らもこの世を去つたといふ。これは歴史上の事實である。その他壁に印した女の手の痕に戀して、その女が得られなさに焦れ死にをした男の話もあれば、或女の美しさを歌つた唄を聞いて、見ぬ戀に失戀して命を捨てた男の傳説もある。かうした多情多恨の種族の間に生れた戀物語がどんなものであるかは想像するに難くならう。譯者は本文に讓つてこゝに筆を擱く。

一九三〇年十一月九日

森田草平識す

目次

發端 六

第一の王族托鉢僧の話 一三

狂へる戀の奴隸アイユーブの子息なるガーニムの物語 一四

ター・ジェル・ムルークとゾーニヤ夫人の物語 一七〇

アジーズとアジゼエの物語 一八

ター・ジェル・ムルークとゾーニヤ姫の物語のつゞき 一四三

カマル・エズ・ゼマーン王子とブゾア王女の物語 一七

ネアメーとノアムの物語 三三

アリー・シエーアとヅムルツドの話 三五

ウン・ゼル・ウジュードとエル・ワード・ファイ・ラクマームの話 四八

エル・バ斯拉アのハサンの話 五三

註釋 五六

千一夜物語 (戀愛篇)

千一夜物語 (戀愛篇)

千一夜物語 (戀愛篇)

發端

憐み深く、恵み深くまします

神の御名において。

柱なくして天を高め、寢床のやうに地を擡げた、恩澤洽き王にして、宇宙の創造者たる神に譽れあれ。使徒達の主にして、我等の主でもあれば長でもあるモハマッドと彼の家族の上に祝福と平和あれ。審判の日に到るまで、悠久にして絶えざる祝福と平和あれ。

では、始める——昔の人々の傳記は子孫に取つて一つの教訓である。他人の身に起つた大事件を見て、我身の誠めにすることも出来る。過ぎし代の人々の歴史や、彼等の一生に起つた萬の事を考へて、我身を制止することも出来る。斯うして前の世の歴史を後から續くもの教訓に定めて置いた神の十全は褒められてあれ、浪漫的な物語や寓話に富んだ「千一夜物語」とは、實に斯くの如きものである。

全知全能は神のみにましますと雖も、往昔印度、支那の邦々を領して、數多の軍隊と、近衛兵と、

召使と、臣下とを有つてゐた一人の國王があつたと言ふことである。其國王には二人の王子があつた。一人は最う立派な壯年で、一人は未だ青年であつた。二人とも勇敢な騎手であつたが、特に長の方が優れてゐた。此人は父の王國を受け嗣いで、正義の下に臣民を支配したから、其國の住民を始めとして、全帝國の者們から愛されてゐた。シャーリヤール王と稱はれた。弟はシャー・ゼマーンと言つて、サマルカンドの國王であつた。彼等の政府の施政は誠實に行はれて、二人とも正義を以て臣民を治めながら、二十年間と言ふもの此上ない幸福と享樂とに日を送つた。此時期が濟んだ後、兄の王は頻りに弟に會ひたいと思ひ出した。で、宰相に向つて、弟の許へ行つて一緒に連れて來いと命じた。

此問題に關する宰相の忠言に聽いて、彼は直様黄金や珠玉で飾り立てた馬だの、扈從だの、美しい處女だの、高價な織物だのと言ふやうな、立派な贈物を用意するやうに吩咐けた。それから弟に宛てた手紙を書いて、是非會ひたいと言ふ切なる希望を述べた。それから手紙に封をして、前に擧げた贈物と一緒に宰相に渡した。彼は宰相に向つて、あらん限りの精力を出して、着物の裾を擡げながら、出来るだけ早く歸つて來るやうに命じた。宰相は猶豫なく「畏承りました」と答へた。そして、直様旅の用意に取りかゝつた。行李の装ひをした、責務を他に移した、三日の間にあらゆる旅の支度を整へた。四日目にシャーリヤール國王に暇乞ひをして、荒れ果てた沙漠の方へ向つて出發した。彼

は夜を日に繼いで進んだ。其道筋に宮居を構へた、シヤールリヤール國王が配下の王達は、各自高價な贈物や金銀の進物を携へて出迎へながら、三日の間彼を饗應した。其後四日目に、一日だけ宰相と伴れ立つて旅をしてから、やつと別れを告げた。斯うして旅を續けてゐる間に、やう／＼サマルカンドの都に近い。其時、彼は使者を送つてシヤール・ゼマーン王に自分の來着を知らせた。使者は都へ入つて、宮城への道を訊ねた。そして、國王に謁しながら、彼の前の地に接吻した。そして、兄の王の宰相が來着したことを申し上げた。それを聞いて、シヤール・ゼマーンは宮廷の主立つた役人や、王國內の貴族どもに、一日の旅程だけ彼を出迎へに行くやうに命令を下した。皆々それに違つた。そして彼等が彼に出會つた時、歓迎の辭を述べて、相手の鎧の傍を歩きながら一同都へ引上げた。宰相はそれからシヤール・ゼマーン王に謁見して、國王のために神の冥助が下るやうに祈禱しながら、彼の前の大地に接吻した。そして、兄の王が彼に會ひたがつて被坐せられる由を申し上げた。其後で例の手紙を手渡した。國王はそれを取上げて、一わたり眼を通した。そして、其内容を了解した。それから自分が直ぐにも兄の仰せに遵ふべき旨を返答した。「併し」と、彼は宰相に向つて言つた。「俺もお前を三日の間饗應してからでなければ出發したくないよ。」そこで、彼は相手の位階に應じた宮殿に彼を宿泊させた。彼の軍隊は天幕の中に野營させて、それ／＼飲料とか食物とか言つたやうな必需品を支給した。斯うして彼等は三日間其處に滞留した。四日目に國王は自ら旅の装ひをして、行李の用意をさ

せた。そして、兄の威嚴に應しいやうな、高價な贈物を蒐集した。

用意萬端出來上つた所で、彼は先づ天幕や、駱駝や、騾馬や、召使や、近衛兵どもを出して遣つた。宰相には留守の間國政を司るべき旨を命じた。そして、兄の領國に向つて出發した。が、夜半になつて、彼は如何うしても自分と一緒に持つて來なければ成らなかつた品物を宮中に遺れて來たことを想ひ出した。で、それを取りに宮殿へ引返して見ると、彼の妻が黒奴の男の奴隸に侍かれながら、彼の寢床に竝んで熟睡してゐるのが眼に留つた。それを見ると、彼は眼の前に世界が暗く成つたやうな氣がした。そして、心の中で言つた。「俺が未だ此町から離れないうちに斯うだとしたら、兄の許に逗留して居る間には、此女は何んな事を仕出來すか知れたものでない。」そこで彼は劍を抜いて、二人ながら寢床の中で斬り殺した。それから彼は直様歸つて來て、出發の命令を下した。そして、兄の都を指して旅程に上つた。

シヤールリヤールは彼が來着したと言ふ報道に悦喜しながら、途中まで出迎へて挨拶した。そして、極度の喜びを以て彼を歓迎した。彼はそれから祝意を表するために町中に裝飾を施せと命令した。そして、對座しながら愉快な會話で、弟を饗さうとした。が、シヤール・ゼマーン王は妻の行爲を考へては心が亂れるばかりであつた。過度の悲しみに身も心も捕はれた。彼の顔は土色に成つた。身體もげつそり細つた。兄は弟の常ならぬ容子に氣が附いた。そして、これは本國を離れてゐる所爲だと推

量して、わざ／＼煩さがらせたり、無理に其所因を訊いたりすることは控へるやうにした。が、數月間経つた後で、到頭彼は弟に向つて言ひ出した。「あ、弟や、お前は何うやら身體も瘠せて來たし、顔の色も好くないやうだね。」弟は答へた。「私は心に痛傷を負うて居るんですよ。」斯う言つたまま、彼は自分の目撃した妻の行爲を告げようとはしなかつた。すると、シャーリヤールが言つた。「私はお前を連れて狩獵に出懸けたいと思ふんだがね、一緒に行く氣はないかね。左様したら、お前の氣も紛れるだらうよ。」が、弟は辭退した。で、シャーリヤールは一人で狩に出懸けて行つた。

所で、王の宮殿には庭園を一目に瞰下すやうな窓が幾つもあつた。そして、弟の王が其一つから眺めてゐる間に、宮殿の戸が開いて、其中から二十人の女と二十人の男の黒奴とが出て來た。容色の美しさと嬌やかさに優れた王の后も、彼等と一緒に噴井の側まで行つた。其處で、彼等は皆衣を脱ぎ捨て、一緒に坐つた。それから后は「あ、メスードや。」と喚んだ。直ぐに一人の黒奴が彼女の傍へ來て、彼女を抱擁した。彼女も同じやうにした。で、他の奴隷や女どもも亦同じやうにした。斯うして彼等は皆日の暮れるまで一緒に歡を盡したものだ。シャー・ゼマーンは此光景を目にした時、一人心中に呟いた。「上帝の御名に懸けて！ 私の苦しみもこれに較べては未だ軽い！」彼の惱みと悲しみとは一時に輕減された。最早足るだけの飲物や食物にまで顔を背向けるやうなことはなく成つた。

兄の王が狩獵から歸つて來て、二人は互に挨拶を交したが、シャーリヤール王は弟のシャー・ゼマーンの色澤が恢復して、顔の色も生き／＼して來たばかりか、最近までは手さへ附けないで居た癖に、喰べる物も旨味さうに食べるのを見て、すつかり驚いてしまつた。そして訊いた。「あ、弟や、此前お前に會つた時は、お前の顔は土色をして居た。今はそれが元々通りに好い色澤をして居る。何卒其所因を聞せてお呉れではないか。」「え、私の生來の色澤がなくなつた譯なら、」と、シャー・ゼマーンは答へた。「それはお話しも致しませう。併し元々通りの顔色に成つた所因をお話することだけは、何卒御免下さい。」「先づ」と、シャーリヤールは言つた。「お前が生來の色澤を失くした所因から、そんなに衰へた所因から話して呉れい。何卒聞せてお呉れよ。」「では、お話し致しますがね、阿兄さん。」と、彼は答へた。「貴方から會ひに來いと言つて宰相を使に寄越して頂いた時、私は急いで旅の用意をしました。そして、町から出發した時、不圖貴方に差上げようと思つた珠玉を遺れて來たことを想ひ出したのです。で、私は直様宮殿へ取つて返しましたが、其處で妻が男の黒奴と一緒に私の寢床で寝てゐるのを見附けたのですよ。私は二人ながら殺して置いて、貴方の許へ遣つて來ました。が、何うしても此事件が私の心から離れない。私の顔色が失く成つたり、身體が衰へたりしたのは、まあ斯んな次第ですよ。所で、私の色澤が恢復した所因は、前にも申上

げた通り、何卒お話をすることを御免下さい。——が、兄の王はそれを聞いた時言つた。「私はアラに懸けてお願ひするから、何卒お前の色澤の好く成つた所因を聞せてお呉れでないか。」——そこで彼は見た通りを逐一繰り返した。「私は眼の當りそれを見たいものだ。」と、シャーリヤールは言つた。——「それぢや」と、シャー・ゼマンが言つた。「最う一遍狩に行く」と布令をお出しなさい。そして、此處に私と一緒に隠れてゐなさるが可い。左様すりや貴方も後の行爲を目撃して、眼の當り證據を握ることが出来ませうよ。」

シャーリヤールは、此處に於てか、直ぐに最一度狩獵の旅に出ようとしてゐる旨を布告した。兵隊は天幕を持つて町から出て行つた。王も其後から従つた。そして、少時陣營の中で休んだ後で、彼は召使どもに吩咐けた。「何人も私の許へ通しては可けないよ。——そして、彼は變装して、宮殿の弟の許へ歸つた。そして、庭を瞰下す窓の後に隠れて腰掛けてゐた。ほんの少時左様してゐると、女どもや其女主人は黒奴と一緒に庭園へ這入つて來た。そして、弟が話したやうにして午後の祈禱の間まで續けて居た。

シャーリヤール王は此有様を見て、すつかり顛倒してしまつた。そして、弟のシャー・ゼマンに言つた。「さあ立て！ 王位などは捨て、置いて、何處でも所好な處へ二人で旅行しようぢやないか。斯んな不幸が他の人にも私達同然降りかゝつて來るものか見極めるまで行くんだよ。左様でない

とすりや、死んだ方が生きてゐるより餘程好いからね。」弟は兄の言葉に同意した。そして、二人は宮殿の裏門からこつそり遁れ出して、日となく夜となく、絶えず旅行を續けた。たうとう二人は海岸に近い泉の傍の、牧場の真中にある一本の樹の下に到着した。二人は泉の水を飲んで、腰掛けて休んでゐた。日が少し傾いた時、目の前の海が暴れて來た。そして、其中から雲突くばかりの黒い柱が立ち昇つて、のそく牧場の方へ近づいて來た。それを見ると怖ろしく成つて、二人は傍の高い樹へ攀ぢ登つた。そして、其處から一體何者だらうかと思つて見詰めてゐた。で、見よ、それは肩幅が廣くどつしりとした、巨人のやうな身丈の火靈で、頭の上に一つの櫃を載せてゐるのだ。彼は陸へ上つて、二人の王が攀ぢ上つてゐる樹の傍へ遣つて來て、其下に座を占めながら、櫃を開けて、其中から最一つの箱を取り出した。彼は又それを開けた。そして、其中から輝く太陽のやうに色白で美しい、一人の若い女が現れた。火靈は彼女を一目見遣りながら言つた。「あゝ、私が婚禮の場から攫つて來た、尊い血統の姫よ、私は少し眠りたいのだがね。——そして、彼は女の膝の上に頭を載せたまゝ、眠つた。乙女は其時樹の方へ頭を擡げた。そして、其處に二人の王がゐるのを見た。そこで彼女は火靈の頭を膝から下ろした。そして、それを地面の上に置きながら、樹の下に立つた。そして、「降りていらつしやい、此魔靈を怖がることはないのよ。」と言ひでもするやうに、二人の王に手眞似をした。二人は彼女に言つた。「アラの御名に懸けてお願ひするから、何卒其事だけは御免下さい。」が、彼

女は言つた。「私も同じ神の御名に懸けてお願ひしますから、何卒降りていらつしやい。若し降りていらつしやらなければ、私は此魔靈の眼を覺ませますよ。左様したら、彼は貴方を酷い目に遭はせて殺しませうよ。」そこで怖ろしさに、二人は女の側へ降りて来た。そして、彼女が最う可いと言ふまで一緒に止まつて居た。が、其後で彼女は衣囊から一つの錢入を取出した。そして、九十八個の印章指環を繋いだ一本の糸を引出した。彼女は二人に向つて、「これ何だか御存じですか。」と言つた。二人は、「知らない。」と答へた。——「此指環の主はね、」と、彼女は言つた。「悉皆貴方と同じやうに、此馬鹿な魔靈の知らない間に、私と言葉を交した者はかりですよ。ですから、貴方も御兄弟で二つの指環を下さいな。」そこで二人は各自自分の指環を抜いて渡した。それから彼女は二人に向つて言つた。「此魔靈は婚禮の晩に私を攫つて来て、箱に入れて、其箱を櫃の中に入れてのよ。そして、櫃には七つの錠が懸けてあるんです。斯うして私を牢に入れたまゝ、波立ち騒ぐ海の底に移して置くんですよ——女が斯うしたいと思へば、何れだけ嚴重にして置いても駄目だと言ふことを知らないで。」これと同じ事を、或詩人が言つてゐる。——

決して女を信するな、彼等の誓ひを眞にするな。
彼等の快と不快とは只情慾にあるものを。

彼等の愛情は伴りぞ、二心を衣の下に隠すが故に。
ユースフの話にも警められて、女の計に乗せられな。
女故にこそイブリー達もアダムを追放したとは思はずや。

又他の詩人も言つてゐる。——

努めて他人を非難すな、非難は相手を強くして、烈しい情慾の願ひを増す故に。
我さる情慾に苦しむとせば、我が場合も亦過去の多くの人々のそれと同じからむ。
女の巧計から安全に免れし男は、げに異とせらるべきものなるが故に。

二人の王はそれ等の言葉を彼女の肩から聞いた時、二人とも心の底から惘れ反つてしまつた。そして、互に顔を見合せながら言つた。「これが魔靈であつて、而も私どもに降りかゝつたよりも最つと大きな不幸に遭つてゐるとすれば、確に私どもを慰むるに足る事件である。」——そして、其儘出發して、都へ歸つた。

二人が宮殿に入るや否や、シャーリヤール王は直ぐに後の首を刎ねた。同じやうに女どもや黒奴ど

もの頭も刎ねた。それからと言ふもの、彼は處女に寝間の伽をさせた後では、其都度夜の白々明けに其女を殺すのを癖とするやうに成つた。斯うして彼は三年の間續けたものだ。人民は王に對して不服の叫びを擧げた。娘のある者は娘を伴つて遁げ出した。そして、年頃の娘は都の中に一人も残つて居なかつた。さういふ際に、王は例に依つて乙女を一人連れて來いと宰相に命じた。宰相は出て行つて探し廻つたが、一人も見當らなかつた。そして、いら／＼氣を揉みながら、王の逆鱗に觸れるのを心配しい／＼自宅へ戻つた。

所で、宰相には二人の娘があつた。上の娘はシャーザードと言ひ、下の娘はズニヤードと言つた。前者はいろんな歴史の本を讀んで、昔の王様の傳記だの、過去の時代の物語だのを澤山心得て居た。彼女は實に昔の王様や時代に關する一千卷の歴史の本と、詩人の集の幾卷とを集めて居たと云ふことである。で、此際彼女は父に向つて言つた。「如何してそんなにお顔の色が悪いのでせう、何かお心に懸かる悲しいことがあるんですね？ 或詩人の言つた言葉に、

憂ひに糞れし人に告げよ、其憂ひも長くは續かじ、
幸ひの過ぎ行くやうに、憂ひも過ぎ行くものぞ。

とありますよ。宰相はそれ等の言葉を娘から聞いた時、王の一件から我が身の上にと起つたことを逐一物語つた。それを聞いて、彼女は言つた。「アラーに懸けて父上よ、何卒私を王様に差上げて下さいます。私は殺されるかも知れないが、さうすりや回々教徒の娘の一人の身代りに立つたので御座います。若し又幸ひに生き残ることが出來たとすりや、私は王の手から娘達を救ふ救主に成るので御座いますよ。」「アラーに懸けて、俺はお前に頼むよ。」と、彼は叫んだ。「何卒そんな危険にお前の身を曝してくれるな。」「が、彼女は飽くまで言ひ張つた。「何うしてもさうしなければ可けませんよ。」「其時彼は言つた。「俺は驢馬と牡牛と百姓との話のやうな事柄がお前の身にも起るのを恐れるんだよ。」「それは如何したんですか、阿父さま。」と、彼女は訊いた。

「ねえ、娘や」と、宰相は言つた。「昔金もあれば家畜もある一人の商人があつて、妻と子供達を持つてゐた。神様は——あ、此方の名は褒められてあれ——又此男に鳥や獸の言葉を解する力を與へて下さつたんだよ。此商人の住居は田舎にあつた。そして、家に驢馬と牡牛とを飼つてゐた。牡牛が驢馬の繫がれてゐる所へ來て見ると、清瀧に掃除して、水が撒いてある。秣槽の中には篩にかけた大麥と篩にかけて切つた藁とが入れてある。驢馬はと言ふと、其側に樂々と寝てゐるんだよ。主人は時時用事が起つた際に乗つて出る許りで、それも直ぐに歸つて來るんだからね。で、或日其商人は牡牛が驢馬に言つてゐるのを偷聴きした。「お主の喰物はお主のために成るよ。所で、お主はさうして樂々

と寝そべつてゐるのに、俺やア疲勞れて倒れる位だよ。お主は篩にかけた大麥を喰べる、人間がお前の世話をして呉れる。主人がお主に乗つて出懸けるのはほんの時偶のことで、それも直ぐに歸つて來るんだ。それなのに俺は始終圃の鋤き返しや粉礮臼の廻し方に追ひ使はれて、休む暇もないんだよ。』

— 驢馬はそれに答へて言つた。『お主が圃へ曳き出されて、頸に轆を懸けられた時、其處へ打倒れた儘、幾許打たれても叩かれても起き上らないが可いよ。若し起き上つたら、又打倒れるが可いよ。そして、お前が連れ歸られて、目の前に蠶豆を突き附けられても、病氣のやうな風をして、それには口を着けないが可いね。斯うして一日、二日、三日位飲まず喰はずに我慢してゐるんだよ。さうすりやアお主も辛い勞働から休むことが出來やうぢやないか。』— 斯う言ふ譯で、馱者が芻草を牡牛に持つて來て遣つた時も、牡牛は殆どそれを口にしなければならなかつた。そして、明くる日馱者が再び圃の上へ引き出しに來た時、牡牛は宛然病氣に罹つたやうに見えた。そこで商人は言つた。『驢馬を引張り出して、一日牡牛の代りに犂を曳かせて遣るが可い。』馱者は其通りにした。そして、驢馬が日の暮れに歸つて來た時、牡牛は相手が其日自分の難儀を助ける爲に盡して呉れた厚意に對して驢馬に謝した。が、驢馬はそれに返辭をしなかつた。彼は心の中で非常に後悔してゐたからだ。次の日も、又農夫が遣つて來て、驢馬を曳き出して、日暮れまで彼に圃を鋤かせた。驢馬は輒に頸の皮を剥がれて、へとくになつて歸つて來た。牡牛はそれを眺め遣つた。そして、お禮を言つて褒めそやした。驢馬は口惜し

さうに叫喚いた。『俺は樂々と暮して居たものを、餘計な世話を焼いたばかりで、斯んな事になつてしまつたんだ!』それから彼は牡牛に言つた。『俺がお主に好い事を教へて遣るものだてえことは、お前も知つてるだらう。所で、俺は主人が斯う言つてるのを聞いたよ。牡牛の奴が何うしても起き上らないと言ふんなら、屠牛者に渡して殺させた上、皮を剥いで革卓を作らせるが可いと。それだから俺もお主のために心配して居るんだよ。何うだ、好い助言をして遣つたらう。ぢやア何事もなく暮さつしやい!』— 牡牛は驢馬の言葉を聞いて、相手に謝した。そして、『明日は俺も元氣よく出懸けるつもりだよ。』— そこで彼は芻草を皆喰べてしまつて、秣槽を舐めさへした。— 其間、主人は二人の會話に耳を欬てゐた。

次の朝商人と其妻とは牡牛の小舎へ行つて、其處に腰掛けてゐた。馱者が來て牡牛を曳き出した。牡牛は主人の顔を見ると、頻に尻尾を揮つた。そして、聲と行爲とに元氣を見せながら、四邊を跳ね廻つた。商人はそれを見ると、耐らなく成つて、背後へ反つくり覆る程笑つた。細君は吃驚して彼に訊いた。『何を貴方はそんなに笑ふのよ?』彼は答へた。『俺が見たり聞いたりをさ。だが、それを話す譯には行かないよ。話したら、俺は死ななくちや成らんからね。』彼女が言つた。『貴方は死んでも可いから、笑つた所因を話して下さらなきや可くないわよ。』— 『だつて、話す譯には行かないよ。』と、彼は答へた。『俺も死ぬのは不厭だからね。』— 『え、貴方は私のことを笑つてるん

だ、それに違ひない。」と、彼女は言つた。そして、飽くまで所天に強請んで止まなかつた。たうとう彼は言ひ負かされて頭が茫然してしまつた。そこで彼は子供達を一緒に集めて、裁判所と證人とを招びに遣つた。詰り遺書を作つて置いて、彼女に祕密を打明けて、それから死んで行かうと言ふのだ。實際彼は彼女が父方の叔父の娘で、子供達の母親で、百二十歳まで一緒に住んで来たと言ふところから、非常に細君を可愛がつてゐた。で、一家の者と隣人とを集めて、彼は仔細を話した。そして、其祕密を打明けるや否や自分は死ななくちや成らないと告げた。それを聞いて、座に列なつた者は皆彼女に向つて言つた。「アラ―に懸けて、私ども一同貴方にお願ひしますがね、何卒そんな事は思ひ止まつて、貴方の所天を、子供衆の父親を殺さないやうにして下さいませんか。」が、彼女は、「縦令それがためにあの人が死んでも、私は打明けられるまで罷めない。」と言つた。で、彼等も其上彼女に頼むことを罷めた。そして、商人は一同の側を去つて、沐浴をしに厩舎へ降りて行つた。それから歸つて来て、一同に其祕密を話して、死なうと言ふのだね。

所で、彼は其下に五十羽の牝鶏を従へてゐる牝鶏を持つてゐた。又一疋の犬を持つてゐた。彼は其犬が牝鶏を喚びかけて、「お前は主人が死なうとしてゐるのに、何を嬉しうにしてゐるんだ？」と言ひながら、相手を咎めてゐるのを聞いた。「そりや如何したんだ？」と、牝鶏が訊いた。――犬は其仔細を話した。それを聞いて、牝鶏は叫んだ。「アラ―に懸けて、宅の主人も智慧がないね。私は五十

羽の妻を持つてゐる。それでも私は此奴を喜ばせたり、彼奴を怒らせたり、勝手にしてゐる。あの人は唯一人の妻君しか持つてゐないのに、恁んな事位旨く處分することが出来ないのか。何故あの人は桑の木の枝を持つて、あの女の部屋へ這入つて行つて、あの女が死ぬか後悔するまで、打つてく打ち据ゑないのだ？ あの女も、其後は、何事に關しても餘計な口は利かなく成るだらうよ。」――商人は牝鶏が犬に話してゐる言葉を聞いて、初めて眼が覺めたやうに思つた。そして、妻君を打つことに決心したさうな。所で、「と、宰相は娘のシャーラザードに向つて言つた。「俺も其商人が細君に對してしたやうなことをお前に對してもし兼ねないのだよ。」で、其商人は如何しました？」と、彼女が訊いた。彼は答へた、「商人は桑の木の枝を折り取つた後で、細君の部屋へ這入つて行つて、それを其處に隠して置いた。それから細君に言つた。「部屋へ這入つておいで、俺は何人も見てゐない處で、あの祕密をお前に打明けて置いて、それから死んで行くつもりだからね。」――そして、細君が這入つて来た時、いきなり部屋の錠を卸して、彼女が殆ど覺えなしに成つて、「私が悪う御座いました。」と言ふまで殴り据ゑたんだよ。彼女は所天の手や足に接吻した。心から後悔もした。そして、所天一緒に出て行つた。其座に集まつてゐた者は、家内の者を始めとして、一同大いに喜んだ。そして、二人は死ぬまで幸福に仲好く暮したと言ふことだよ。」

宰相の娘は父親の言葉を聞いてしまつた時、父に向つて、「矢張私のお願ひした通りにして頂く外

ありません。」と言つた。そこで彼は彼女に身装をさせて、シャーリヤール王の御前へ連れて行つた。彼女は又其前に、妹に向つて次のやうに言ひながら、いろ／＼手筈を定めた。「私が王様のお側へ上つたら、お前にも来て貰ふやうに使を出すからね。そして、お前が御殿へ上つたら、好い潮時を見計らつて、『あ、お姉様、斯うして眼を覺ましてゐる間の退屈を紛らすために、何か珍しい話をして頂戴な。』と言つて呉れるんだよ。すると、私は、それが神様の思召であつたら、命の助かる手蔓にも成るやうな話をお前にして上げるからね。」

父の宰相は王のお側へ彼女を連れて行つた。王は宰相を見て喜びながら、「何うだ、俺の頼んだものを連れて来て呉れたか。」と言つた。「はい。」と、彼は答へた。斯うして王が女と二人限りに成つた時彼女はさめ／＼と泣いた。王は彼女に「何がそんなに悲しいのか。」と訊いた。彼女は答へた。「ああ陛下、私には一人の妹が御座います、私は其者に別れが告げたう御座います。」そこで王は彼女に使を遣つた。彼女は姉の側へ遣つて来た。そして、彼女を抱き緊めた。それから寢臺の足許に坐つてゐた。そして、適當な機會を待つた後で、彼女は言つた。「アラ！に懸けて！ あ、お姉様、斯うして夜眼を覺ましてゐる間の退屈を紛らすために、何か私どもに話をして下さいませんか。」「あ、してあげますとも。」と、シャーラザードは答へた。「王様のお允許さへ出たら、幾許でもして上げますよ。」王は其言葉を聞いて、むしろくしやしてゐた際とて、そんな話を聴くのも面白からうと思つた。

斯うして、千一夜の最初の夜に、シャーラザードは話しを始めたのである。

第一の王族托鉢僧の話

第十一夜の半ばに始まつて第十二夜の半ばに終る

あ、わが姫よ、私が願鬚を剃つて、隻眼を失つた理由はかうで御座います——私の父は國王でした。彼には一人の弟がありました、其人も矢張王で、他の都に住んでゐました。私の母は私の叔父の子が生れたと同じ日に私を生み落しました。そして、年月の経つうちに、私どもはだん／＼大人に成りました。所で、私は数年の間毎年叔父を訪問して、數箇月の間彼の家に滞在するのが習慣に成つてゐました。かうした訪問の際、私の従弟は私のために大きな酒宴をして呉れました。私のために羊を屠りました。葡萄酒も濾しました。私どもは座に着いて飲み始めました。だん／＼酒が廻つて来た時、彼は私に言ひました。「あ、叔父の子よ、私は自分の身に大關係のある事件について貴方の幫助を得たいのですがね、私のお願ひすることは何事に據らず反對なさらぬやうに豫めお願ひ致しますよ。』何事でもお役に立つことなら致しますよ。」と、私は答へました。彼は大きな宣誓に依つてそれを私に誓はせました。で、直様立ち上つて、少時座を外しましたが、馳てさま／＼な装飾を施して、薫香を濎はせ、高價な衣裳を身に纏うた一人の女を連れて戻つて来ました。彼は女を背後に立

たせたま、私の方を見ながら申しました。「此女を連れて、私より先にかういふ墓地へ行つてゐて下さい。」——彼はそれを詳細に私に教へました。私もそれを覚えしました。彼はそれから墓地へ這入つて、「其處で私を待つてゐて下さい。」と附け加へました。

曩に誓つた宣誓のために、私は彼に反對することも、彼の要求を拒むことも出来ませんでした。私は其女を連れて一緒に墓地へ行きました。そして、少時其處で待つてゐる間に、従弟が水と鉢と、漆喰を入れた袋と、小さな手斧とを持つて遣つて來ました。墓地の眞中所にある墓の傍へ行つて、彼は手斧で墓石を一つづつ、取外しに懸りました。そして、それを片側へ退けました。それから手斧で土を掘り下げて、小さな扉位の大きな平たい石に掘り當てました。其下から圓天井に成つた階段が現はれました。かうしてから彼は女に合圖をしました。そして、「お前の所好なやうにしたが可いよ。」と言ひました。そこで、彼女は階段を降りて行きました。彼はそれから私の方へ向いて言ひました。「あ、叔父の子よ、何卒これだけの事だから貴方の親切を全うして下さい。私が此中へ降りて行つたら、此上蓋を元の通りにして、元のやうに上から土を被せて下さいな。それから袋の中にある漆喰と鉢の水とを一緒に捏ねて、元あつた通りに墓石を継ぎ合せて下さいな。つまり誰もそんな事があつたとは知らないで、此墓は近頃開かれたんだが、中味は舊いんだよと言ふやうにして頂きたいんですね。全一年と言ふもの、私は此爲に準備をして來た。そして、神様の他には何人も知らない。

私が貴方にお願ひしたいと言ふのはこれですよ。」彼はそれから私に言ひました。「あ、叔父の子よ、決して私どもを打捨つて遁げたりなぞして下さいますな！」——これ等の言葉を發した後で、彼は其儘階段を降りて行きました。

彼が目の前から消え去つた時、私は上蓋を元の通りにしました。そして、彼が言つて置いた通りにしようとして、一生懸命に骨を折りました。たうとう墓は最初あつた通りの状態に復しました。それから私は叔父の宮殿へ歸りました。其時叔父は狩獵の旅へ出て不在で御座いました。私は其晩眠りました。そして、朝が來た時、私と従弟との間に起つた事柄を振返つて考へました。そして後悔が役に立たなく成つた時、私は甚く彼のためにしたことを後悔しました。私はそれから再び墓地へ行つて、昨宵の墓を捜して見ました。が、それを發見することが出来ませんでした。私は日が暮れるまで搜索を止めませんでした。そして、其處へ行く道を見出すことが出来ないうちに、再び宮殿へ歸りました。私は食ひも飲みもしなく成りました。従弟の身が如何成つたかを知らないために、私の心は亂れに亂れました。私は過度の悲しみに陥りました。私は悲哀に沈みながら其夜を明かしました。明るる朝、再び墓地へ行つて見ました——従弟の仕業を繰り返し考へながら、又彼の要求に應じたことを今更のやうに後悔しながら行つて見ました。そして、私は墓場と言ふ墓場を捜し廻りました。が、如何しても目指すものを發見することが出来ませんでした。かうして私は七日間と言ふもの何の得る所

もない搜索を續けました。

私の困惑は日にく増すばかりで、殆ど気が狂ひさうに成りました。そして私は出發して父の許へ歸る外に、何の慰安を見出すことが出来ませんでした。が、都へ到着すると、城門の背後から一隊の兵卒が飛び出して来て、私を縛つてしまひました。私は自分が此都の皇帝の子で、それ等の者どもは私の父と私との臣下であることに思ひ及ぶと、眞個仰天してしまひました。彼等に對する過度の恐怖が私を壓倒しました。そして、私は心の中で考へました。「一體、父上の身に何んな事が起つたんだらう？」と。で、私は自分を縛つた者どもに、こんな事をする理由を訊ねました。が、彼等は返辭をしませんでした。少時してから、私の臣下であつた一人の男が私に向つて言ひました。「運命はお前の父を裏切つた、軍隊は彼に叛いた。宰相は彼を殺してしまつた。で、私達はお前を捕へるとて、此處に待伏せをしてゐたんだよ。」——彼等は私を引立て、行きました。私は父に關する此報道を聞いた時から、宛然死んだやうに成つてゐました。そして、私は父を殺した宰相の前に罪人として立ちました。

所で、私と彼との間には舊い怨恨が介在してをりました。私は弩を射ることが所好で御座いました。或日、私が宮殿の屋根の上に立つてゐた時、宰相の邸の屋根の上に一羽の鳥が棲りました。恰度其時宰相も屋根の上に立つてゐました。私は其鳥を覗ひました。が、彈丸は外れて、宰相の眼に中り

ました。そして、命數の定まる所なれば是非もなや、それを彈き出してしまひました。詩人も次のやうに歌つてをります。——

われ等はわれ等のために定められたる階段を上る。われ等のために定められたる階段はわれ等上らざるを得じ。

或人若し或土地にて死すと命ぜられたりとせば、他の土地にて死ぬことあるまじ。

かうして私に眼の玉を彈き出されても、宰相は何にも言ふことが出来ませんでした。私の父が其都の王だからで御座います。それが私と彼との間に結ばれた怨恨の原因でした。で、私が手を背後に縛られながら、彼の前に立つた時、彼は私の首を刎ねるやうに命令を下しました。私は彼に向つて言ひました。「お前は罪なき者を殺すのか。」——「何んな罪でも、」と、彼は言ひました。「これより大きな罪はないよ。」——そして、彼は眼の玉の飛び出した跡を指示しました。「そりやア私もそんな意圖はなしにさうしたんだ。」と、私は言ひました。「お前がそんな意圖もなしにさうしたんなら、私はさうする意圖で同じ事を仕返して上げるよ。」と、彼は答へました。そして、直様言ひました。「其奴を此處へ連れて來い。」——で、私がさうされた時、彼は私の左の眼へ指を突込んで、それを抉り出しまし

た。かうして私は御覽の通り隻眼を失ひました。彼はそれから睨かり私を縛つて、葛籠の中へ入れました。そして、刑吏に命じました。「此奴を連れて行つて、劍を抜いて、都の外へ搬んで行け。それから死刑に處して、野獸の餌食にしちまへ。」

そこで彼は私を都の外へ連れて行きました。そして、私を葛籠の中から引出しながら、手足を縛つて、眼に眼隠しをして、將に私を殺さうとしました。それを見て、私は泣きながら叫びました——

『數多き兵士をわれは甲冑と思へり、げに然り、されどわが敵を衛るための甲冑よ。

われは彼等が鋭き鎗の如くならんことをおもへり、げに然り、されどわが胸を貫くための鎗よ。』

同じ役目を帯んで父の下に仕へてゐた刑吏は、私自身も嘗て恩を被せたことがあるところから、此歌を聞いて言ひました。「あゝ、わが君よ、私は命令の下に働く身ですから、如何することが出来ませう？」——が、間もなく彼は附加へて言ひました。「此處から手と身でお遁げなさい。二度と此國へ歸つていらつしやいますな——殺されるのが可厭でしたら、そして、貴方と一緒に私まで殺させるのが可厭でしたら。詩人も次のやうに歌つてゐますよ。——

壓迫が恐ろしくば、身を以て遁れよ。家は其儘残て置きて、建てたる人の運命を物語らせよ。

汝の捨てし土地の代りに、又他の土地を見出すことはあらむ。汝の魂の代りに成るべき魂を見出すことはなからむ。』

彼がかう言ふや否や、私は彼の手に接吻しました。そして、彼の目の前から遁れてしまふまでは、未だ自分の身の安全を信ずることが出来ませんでした。一目を失つたことなどは、死から遁れたことを思ふと、私には何でもないことのやうに思はれました。私は叔父の都へ急ぎました。そして、彼の前へ出ながら、父の身に振りかゝつた災禍と、私の片眼を失くした仔細とを語りました。それを聞いて、彼は烈しく泣きました。そして、言ひました。「お前は私の悲しみと煩ひとに又一つ加へて呉れました。此數日間と言ふもの、お前の従弟は行方が知れないのだよ。私はあれの身が如何成つたと言ふことを知らない。又何人もあれの身に關して私に知らせて呉れる者はないのだよ。」かう言つて彼は又泣きました。泣いてく、正體がなくなるまで泣きました。そして、漸とわれに還つた時、彼は言ひました。「あゝ、わが子よ、お前が隻眼を失くしたのは生命を失くしたより未だ優しだよ。」

それを見て、私は最早彼の子息に關して沈黙を守ることが出来ませんでした。で、私は従弟の身に

起つた一伍一什を語りました。此報道を聞いて、彼は非常に喜びました。そして、「直様墓場へ案内して呉れ。」と言ひました。「大神にかけて、あゝ叔父君よ。」と、私は答へました。「私はそれが何處にあるかを知らない。其後何度もそれを探しに行きました。けれど、私は其場所を発見することが出来ませんでしたものね。」が、私どもは兎に角墓場へ一緒に行つて見ました。そして、右に左に探し廻りながら、たうとう私はそれを発見しました。私も叔父も二人ながら非常に喜びました。私は直様彼と一緒に墓場の中へ這入りました。そして、土を掘つて、上蓋を持ち上げながら、二人は五十段ばかり降りて行きました。漸と階段の底へ着いた時、一團の煙が立ち昇つて、私どもの眼を眩ませました。それを見て、叔父はそれを唱ふる者の恐怖を吹き拂つて呉れるやうな文句を唱へました。「高く、大いなる神より外に、此世に力もなければ権力もない！」と言ふ言葉で御座います。其後で二人は奥へ進みました。そして、麥粉だの、穀物だの、其外様々な食料品を一杯填めた廣間の中へ這入りました。私どもは寢臺の上に帷幄が下つてゐるのを見ました。叔父は一目其上を見て、彼の息子と一緒に降りて行つた女とが竝んで横はりながら、火の窖へでも、投込まれたやうに、木炭のやうに眞黒に變つてゐるのを発見しました。彼は此光景を見た時、子息の顔に唾を吐き懸けて喚きました。「こんな目に遭ふのは當然だよ、此穀潰し奴！ 現世の罰はこれだけで済んだが、あの世の罰は未だ残つてゐるぞ。未だく、殿しい、何時までも止まない責苦に逢やアがるんだ！」——かう言つて、彼

は靴で子息の死骸を蹴りました。此仕業に憫れながら、又従弟とあの處女との變り果てた姿に悲しみを唆られながら、私は言ひました。「大神にかけて、あゝ叔父上よ、何卒心を鎮めて下さいまし。私は従弟の變つた姿を見て、如何して彼と此娘とがこんな風に眞黒に焦けてしまつたことかと思ふと、胸が張裂けるやうで御座いますものね。まア足蹴にまでなさらんでも、こんな有様に成つただけで十分だとはお考へに成りませんか。」

「あゝ、わが兄弟の子よ。」と、彼は答へました。「俺の兒はな、未だ若い時分から乳兄妹に當る娘に一生懸命戀をしてゐたんだよ。私は始終そんな不倫な思ひを抱いては成らぬと禁めくして來た。そして、心の中ぢや、今は未だ子供だから可いやうなもの、今に歳を取つたら何んな下劣な眞似を仕出すか知れたものでないと心配してゐた。實際、俺はそんな事を最う遣つてるとも聞いた。が、それを眞實にはしなかつた。眞實にはしない——が、殿しく詰責しては置いた。そして彼にかう言つた。「お前の前に何人も犯さなかつた、又お前の後に何人も犯さないやうな、恐ろしい罪を犯さないやうに氣を附けろよ。一日過失を犯したら、私達は死ぬまで汚名を蒙つて、王者の仲間外れにされるんだよ。そして、私達の話は隊商に伴れて世界中に廣まるんだ。お前の身からそんな振舞ひの生じないやうに用心したが可いぞ。そんな事があつたら、俺は憤激の餘り屹度お前を殺してしまふからね。」と。俺はそれからあれと其女との間を遠ざけた。が、あの下劣な女は又あれを滅茶苦茶に愛してるんだ

よ。二人とも悪鬼に憑かれたんだね。そして、私が二人の間を遠ざけた時、私の子息は内密で地面の下にこんな場所を拵へたんだよ。そして、今見るやうな食糧を此處へ搬んで置いてから、俺が狩獵に出た留守を利用して、此處へ遣つて来たんだね。が、眞理は——あ、彼の全能は稱められてあれ、彼の名は讀へられてあれ！——妬み深く二人の上を見張つてゐて、二人を業火に焼き殺してしまつて下さいました。そして、來世の罰はこれよりも厳しく、永久に絶えないんだよ。——かう言つて、彼は泣きました。私も彼と一緒に泣きました。すると、彼は私に言ひました。「お前はこれから彼奴の代りに私の子息に成るんだよ。」——私は少時の間、此世を、此世の榮枯盛衰を、宰相の手に罹つて私の父が殺されたことを、それから彼が王位を篡奪したことを、私が隻眼を失つたことを、又從弟の身に起つた不思議な出來事を思ひ廻しながら立つてゐました。そして、再び泣きました。

私どもはそれから又階段を上りました。そして、上蓋を元のやうにして、土を其上から被せ、すつかり元の形に墓場を復しながら、再び私どもの棲家へ戻つて來ました。が、未だ座に着くか着かない中に、私どもは太鼓や喇叭の音を耳にしました。軍卒どもが右往左往に駆け廻りました。空中は馬の蹕に揚げられた塵で暗くなりました。私どもは何事が起つたとも知らないのです、胸を轟かせながら、まご／＼してゐました。王は其理由を訊ねて、次のやうな返辭を得ました。「殿下の兄上の宰相が王と王の臣下と近衛兵とを殺した後で、軍勢を引連れて、不意に此處へ攻寄せて參りました。住民どもは

刃向ふことが出來ないから、敵に降伏してしまひました。——それを聞いて、私は心の中で考へました。「若し私が彼の手に落ちたら、屹度殺されるに違ひない。」——私は悲しみに壓倒されました。そして、父と母との身に起つた不幸を思遣りながら、今更爲す所を知りませんでした。それは若し私が外へ出たら、町の者どもは私を見覚えてゐるだらうし、私の父の軍勢は早速押寄せて來て、私を殺すだらうと言ふ恐れがあるからでした。私はそこで頤鬚を剃る外に遁れる道を知りませんでした。で、私はそれを剃りました。そして、服裝を變じながら、其町から遁れました。そして、何方かの傳手を得て、信者の中の信者で、全人類の王なる教王にお目に懸ることが出來たら、私の身上話をして、私の身に起つた一伍一什をお話したいものだと思ひながら、此處へ、此平和の棲家へ遣つて參りました。私は今宵初めて此處へ着きました。そして、何方へ足を向けて可いか解らないので、ぼんやりしながら立つてゐました時、私は此托鉢僧が遣つて來るのに會ひました。そして、彼に挨拶しました。そして「私は他國の者です。」と申しました。彼は答へました。「私も他國の者で御座います。——そして、私どもがかうして互に談話をしてゐる間に、私どもの仲間が、第三の托鉢僧が私どもの傍へ遣つて參りました。そして、私どもに挨拶をしながら、「私は他國の者です。」と言ひました。私どもは答へました。「私どもも矢張他國の者で御座います。」そこで私どもは一緒に歩き出しました。夜の闇に追ひ附かれました。そして、運命が私どもを貴方のお住家へ導いて呉れました。——これが私の願

鬚を剃つた、又隻眼を失つた次第で御座います。

狂へる戀の奴隸アイユーブの子息なるガーニムの物語

第三十六夜の一部を以て始まり第四十四夜の一部を以て終る

お、幸福なる王様よと、シャーラザードが言ひました。往時ダマスクスに或金持ちの商人が御座いました。其男に満月のやうに美しい、辯舌の流暢な、名をアイユーブの子息、狂へる戀の奴隸ガーニムと稱ふ子息が御座いました。又此子息には一人の妹が御座いまして、非常に綺麗な、可愛らしい所から、名をフィットネエと申しました。父親は二人に素晴らしい財産を遺して歿くなりましたが、その中に絹と金襴の百駄だの麝香の囊だのが御座いました。そして、此荷物には「バグダード行」と書いて御座いました。これは父親に生前バグダードへ旅行したい希望があつたからで御座います。

神様が（其名を稱ふべきかな）父親の魂をお召しになつてから暫くして、子息は此荷を携へて、バグダードへ向け旅立ちました——恰度其當時ハールーン・エル・ラシードの治世で御座いました。彼は出發に先立つて、母親や、親類の者どもや、町の人々に暇乞ひをして、何事も神様（其名は稱ふべきかな）の御庇護にお任せしながら出懸けました。そして、神様の思召によつて途中何事もなくバグダードへ到着いたしました。折よく同じバグダードへ行く商賈の一行と道連れになつて旅行したの

で御座いました。彼は早速に立派な家を借り入れて、敷物や座褥を備へ附けたり、窓掛を掛けたりいたしました。そして、携へて來た荷物を藏ふと共に、騾馬や駱駝も取り片附けながら、自分も旅の疲れの休まるまで、何處へも出懸けませんでした。其間に町の商賈や重立つた人々が彼の許へ挨拶に參りました。それから彼は高價な織物の十切れを一包みにして、正札を附けたまゝ、商賈どもの市場へ持つて參りました。商賈どもは彼を迎へて挨拶しながら、賓客として待遇しました。そして、市場の老爺の店舗に招じました。そこで彼は持參した織物を賣つて、黄金の一片に對して一片づつを儲けました。で、ガーニムは喜んで、それから少しづつ、品物を賣り／＼して、滿一年間もかうして續けました。

其翌年の元日のことでした。彼は毎もの市場へ遣つて參りました。すると、門がびたりと閉つて居たので、如何したかかと訊ねたところ、「商賈仲間の中に亡くなつた者があつて、自餘の者も残らず葬列に連なつて行つたのだ。」と話してくれました。で、其男は更に言葉を次いで、「貴方も衆皆と一緒に往らつしやいませんか、後生になりますぜ。」と申しました。彼は「左様ませう。」と答へました。そして、葬式の場所を訊ねました。すると、人々は彼をそこへ連れて行つてくれました。で、彼は身體を淨めて、他の商賈どもと一緒に葬列に加はつて歩いて行くと、間もなく祈禱所へ着きました。人々は其處で死者のために祈禱を捧げました。商賈どもはそれから又棺の先に立つて、一緒に

埋葬地へ向ひましたので、ガーニムもその後について行きました。墓で葬列は郊外の埋葬地へ着きました。そして、墓場の間をぐるぐると廻りながら、漸く此死骸を埋められる場所に来ました。見ると、遺族はもう墓の上に天幕を張つて、蠟燭や洋燈の用意もしてありました。で、死骸を埋めると、讀み人どもは墓の前に坐つて高らかに聖典を誦しました。商賈どもは家族と一緒に坐つて居りましたので、アイユーブの子息ガーニムも同じやうにいたしました。所が、彼は妙に極りが悪くつて、『衆皆が席を立つまでは、俺一人歸る譯には行かないんだな。』と、一人心中に呟いて居りました。彼等は目暮れまで聖典の誦讀を聴聞しながら坐つて居りました。其間に召使どもが衆皆の前に夕餐と菓子とを運んで参りましたので、各自それを腹一杯食べました。そして、手を洗つてから、再び元の席に就きました。

所で、ガーニムは家に藏つてある商品のことを想ひ出して、氣が、りで堪らなくなりました。若し泥坊にでも遣入られたらと、それが心配になり出しました。そして、腹の中で、『俺は此土地の人間ぢやないし、世間からは物持ちだと見られてゐるんだ。一晩でもこんなに遠く自分の住家を離れて明かしたら、屹度泥坊に金子も品物も持つて行かれてしまふに違ひない。』と案じて居りました。かうして財産のことを考へると、逆もぢつとして居られなくなつたので、つと立ち上つて、何うしても自分の處理しなければならぬ用事で中座すると斷りながら、一座を脱け出して來ました。そして、平坦な

道を辿つて、市の城門まで戻つて來ました。が、最早眞夜中で、門も堅く閉ざされてゐました。それに往き交ふ人ともなく、四邊は森として、たゞ聞えるものは犬の遠吠え、狼の吼り聲だけで御座いました。彼はがっかりして、『あ、神の外には力も權威もない!』と叫びました。『俺は自分の財産が心配になつて、此處までやつて來たのに、もう門が閉つて居る。かうなると、自分の生命の方が恐しくなつて來た!』で、後へ戻つて、朝まで眠られるやうな場所はないかと、あちこち探しました。そして、四方堀を周らして、その中に棕櫚の木が立つてゐる、誰かの私物の墓地を見附けました。見ると、入口の石の門が開け放しになつて居る。で、彼は其處から這入つて、一眠りしたいと思ひました。が、眼が冴えて中々寢附かれませんでした。

かうして墓場の間に寢て居ると、薄氣味が悪く、がたく、身體が顫へて、到底寢て居られませんでした。で、彼は起き上つて、門の扉を開けながら、外を見廻はしました。すると、市の城門の方角にあつて、向うの方に燈明がちらちら見えました。で、二歩三歩前へ進んで、よく見ると、燈明は今しも自分が宿りを求めてゐる此墓場を指して近づいて來るので御座います。それを見ると、ガーニムは我が身が恐ろしくなつて、慌て、扉を閉めて、棕櫚の樹に攀ち登りました。そして、茂つた枝の眞中に身を隠しました。燈火はだん／＼墓場の方へ近づいて、つい傍まで遣つて來ました。彼が枝の間から瞳を凝らして見てゐると、それは三人の黒人奴隸で、其中の二人は一つの箱を差し擔ひ、一

人は手に手斧と提灯を持って居るので御座いました。で、だんく近づいて来るうちに、箱を擔つた奴隷の一人が、『何うかしたのか、お、サーワープよ。』と訊ねました。すると、相手の方でも、『何うかしたのか、お、カーフルよ。』と返辭をいたしました。前者は直ぐに言葉を次いで、『俺達は日の暮方まで此處に居たんぢやないか。出る時には扉を開け放しにして置いた筈だがな。』と申しました。『うむさうだ。お前の言ふ通りだ。』と、相手がそれに答へました。『所が、見ねえな、扉は閉つて、門までささつて居るぜ。』と、初めのが申しました。すると、手に手斧と提灯を持ったバキートと言ふ三番目の男が、『お前達は本當に血の廻りの悪い奴等だなあ！これを知らねえのか、花園の持主達がバグダードを出懸けて、又こゝまで戻つて来てさ、日が暮れちまつたものだから、此處へ這入つて、内側から戸を閉めちまつたのだ。奴等俺達のやうな黒人が取つて煮て喰やしないかと可怖がつてるからよ。』と申しました。他の二人は、『うむ、大きにさうだ。だが、俺達の中ぢやあお前程氣の利かねえ奴はないんだぞ。』と負けずに申しました。『成程！』と、三番目の男は答へました。『お前達は墓場に這入つて、現在それを見ないうちは俺の言ふことが眞實に出来ねえんだ。だが何だね、誰か其處に居て、燈火を見たとすりやあ、屹度棕櫚の樹の頂上に逃げたと思ふね。』

ガーニムはそれ等の言葉を聞いた時、『何て彼奴は伶俐な奴だらう。』と心の中で考へました。『大神よ、こんな惡意の深い黒人どもの上に天罰を加へ給へ！あゝ、高く大いなる神より外に力も權力もな

い。如何したら此急場から免れることが出来るだらう？』扉の外では、箱を擔つた二人が手斧を持つたのに、『おい、バキート、お前扉を乗り越えて扉を開けてくれ、俺達は箱を肩に擔いでるんで草臥れちまつたからね。扉を開けてくれりやあ、捕まへて来た奴等を一人お前に分けて遣らあな。そして、奴の脂肪を一滴も垂らさないやうに、旨く天麩羅に揚げて遣らあな。』と申しました。所が、彼はそれに答へました。『待てよ、俺は此氣の利かない頭で不圖想ひ附いたことがあるんだよ。扉の向うへ箱を抛り込まうぢやないか。これは俺達の共有物だからね。』二人は言ひました。『そんな事をしたら箱が碎れちまふぢやないか。』すると、彼は又それに答へました。『だつてね、俺は墓場の中に人を殺して物品を奪るやうな強盜が居やしないかと思つて、それが可怖いんだよ。日が暮れた時、奴等奪つて来た物品を分けに、此處へ這入つて来てゐるかも知れないんだぜ。』——『この馬鹿野郎奴、誰が此處へ這入つて來られるかい。』と他の二人は呶鳴り附けました。で、仕方がないから、二人は箱を下して、扉を乗り越えました。そして、扉を開けました。その間三番目の奴隷のバキートは提灯と漆喰を容れた籠とを持って、二人が扉を開けるのを待ちながら立つて居りました。それから又扉を閉めて、三人ともそこに坐りました。すると、其中の一人が、『おい兄弟、かうやつて歩いたり、荷物を擔いだり、卸したり、扉を開けたり、閉めたりして、俺達も大分草臥れちやつたぢやないか。それにもう眞夜中だ。この上墓を開發して箱を埋めるだけの精がないよ。どうだい、三時間ばかり此處にか

うして休んで、それから又仕事を仕上げることにしようぢやないか。其間に一つ皆で身の上話をしようよ。めいめいの身に起つたことを始めから終ひまで残らず話し會ふのさ。」と言ひ出しました。すると、『よし来た。』とばかり、提灯持ちをした男がすぐに自分の身の上を語り始めました。だが、それは此處ではどうも繰り返して申上げ兼ねるやうなお話で御座いました。

それから彼等は提灯を下に置いて、四基の墓の間に箱の入るだけの溝を掘り出しました。カーフルが掘ると、サワーブが籠の中に土を掬ひ入れました。そして、半尋も掘り下げた時、彼等は箱を穴へ埋めてその上から土を元のやうに被けました。それから圍ひの外へ出て、門を閉めた上、その儘アイユーブの子息なるガーニムの視界を去つて、何處ともなく行つてしまひました。

で、彼等がその場を引き上げてしまふと、ガーニムはやれ／＼獨りになつたと思つて、急に箱の中のものが氣にかゝり出しました。そして、『あの中には何が入つてゐたらう。』と獨言を言つて見ました。で、彼は夜が明けて光が射して來るのを待つて、棕櫚の樹から下りました。そして、半分土を掻き除けながら、箱を取り出して、石を拾つて、それで錠を叩き碎しました。そして、蓋を持ち上げながらその中を覗いて見ると、菲沃斯で魔睡を懸けられて眼を閉ぢた一人の乙女が横たはつて居りました。それは／＼美しい愛らしい女——金の裝飾と寶玉の首環とをして居りましたが、それは一つの王國にも値ひする程のもので、到底金子では見積られない程立派なもので御座いました。アイユーブの

子息なるガーニムは、彼女を見た時、これには何か陰謀が潜んで居るのだなと悟りました。さう確信したので、女の軀體を引き起しながら、箱の外へ出して、仰向けに寝かしてやりました。で、女は微吹く風に觸れると、忽ち空気が鼻の孔やら口から咽頭へ通つたと見えて、一つ噴嚏をしました。それから嬉せて、ごほん／＼と咳嗽をしました。それと一緒に菲沃斯の圓い塊が咽頭から外へ飛び出しました。その塊は、それを嗅いだら象でも一日一晩位は睡り通しさうな、それ程の魔力のあるもので御座いました。聽て彼女は眼を開いて、四邊を見廻しながら、なだらかな聲で、『禍なる哉。お風よ。』と申しました。『お前は渴いてる者を満足させてもやらなければ、酒に飽いた者をも愉快にしても遣らないんだもの。ザール・エル・ブスターンは何處に居るの?』が、誰も返辭を致しませんでした。それから又傍の方を向いて、『サビーハーや、シエジエレ・テット・ドルや、ヌーア・レル・フーダや! ネジメ・テス・スプや! 起きて居るのかえ? ヌジエーや、フルウエーや、ザリーフエや、誰か返辭してお呉れ。』と、聲を擧げて呼びました。が、誰も答へる者はありませんでした。で、彼女はたうとう四邊を見廻しながら、『あゝ大變だわ。私はお墓に連れて來られたんだよ。おゝ人々の胸の祕密を知り、復活の日に報はせ給ふ君よ。神よ、窓掛や帳の垂れた中から、誰が私を連れ出して、こんな四つの墓の中に捨て、置いたのでせう?』と聲を擧げて叫びました。

彼女がこんな事を言つて居る間、ガーニムはぢつと傍に立つて居りました。が、今や彼は彼女に向

つて言ひました。「お、我が夫人よ、此處には貴方にとつて帳もなければ、御殿もなく、なほ又お墓も御座いませぬ。かく申すは餘の人でも御座いませぬ、アイユーブの倅ガーニムと申す貴方の奴隷で、隠されたるものに就いても知らざる所なき主なる神様が、貴方を此災難からお救ひ申して、お望みのことは何なりとも出来得る限りお適へ申すために、遣はされた者で御座います。」かう言つたまふで、彼は少時黙つて様子を見て居りました。で、漸く事の真相が分つたと見えて、彼女は、「あ、神の外に神性はない、モハマッドは神の使徒である。私はそれを證言します！」と叫びました。それからガーニムの方を向いて、胸に手を當てながら、優しい聲で訊ねました。「お、仁慈深き青年よ、誰が此處へ私を連れて参つたのですか。私は今初めて正氣に返つたので御座いますよ。」——「お、我が夫人よ、三人の宦官が此箱を擔いで來たのですよ。」と、彼はそれに答へました。そして、日が暮れて、自分がかここに宿を求めたことから、そのために彼女の命を取り留めるやうになつたこと、さもなければ彼女は窒息して死んでしまふ所だつたと言ふことまでありし次第を逐一話して聞かせました。「お、青年よ。」と、彼女はそれに答へました。「貴方のやうな方の手に私をお委ね下された神様は褒められてあれよ。それでは何卒立ち上つて、私を箱の中へ入れて下さいませ。そして往來に出て、驢馬か何かを牽いてゐる者が御座いましたら、早速それを雇つて、此箱を搬ばせて下さいませ。そして、貴方のお家まで私を連れて行つて頂きたう御座います。お住居へ入つてしまひさへすれば、もう安全で御

座いませうからね。其時私の身の上や出來事も話してお聞かせ申しますよ。そして、貴方には私の手で好い御運が向いて來るでせうよ。」そこでガーニムは大層喜んで、人通のない街道へ出て見ました。夜は白み始めて、太陽がきらりと上つて來ました。そして、人々はそろそろ出懸けて参りました。ガーニムは驢馬を牽いた男を雇つて、墓場へ連れて來ました。それから乙女を箱の中に入れて後で、その箱を持ち上げて驢馬の背につけて遣りました。そして、乙女を戀ふる心に胸を打たれながら喜び勇んで、我が家の方へ歸つて参りました。何しろ其乙女は黄金の一萬片にも値ひするやうな女で素晴らしい高價の裝飾、衣裳を身に着けて居るのでしたからね。で、ガーニムは自宅へ着くか着かないに、その箱を下して、それを開けて、中から乙女を引き出して遣りました。乙女は四邊を見廻しながら、さまざまな敷物を敷き詰めた美しい住居であると知りました。それは又華かに色彩りや取り取りの裝飾があつて、又包んだ原料だの、商品の荷物だの、その他數々の品物が山のやうに積み重ねて御座いました。で、これは大きな商人で、お金持ちだと思ひました。それから彼女は顔の被ひを取つて、つくづく相手を見遣りながら、美しい若者だと思ひました。そして、彼に想ひを寄せました。それから、「何か食べる物を頂きたう御座いますね。」と、ガーニムに申しました。「君の命は我が頭の上に、眼の上にあれ。」と答へながら、彼は急いで市場に出懸けて行きました。そして、焼いた小羊一疋、糖菓一皿、乾果にながし、蠟燭、酒、それに香を焚くに必要な道具などを買ひ調へました。そ

れから家に歸つて、買つて来た品々を取り入れました。乙女はそれを見て、につこり笑ひました。そして、彼に接吻しました。抱擁しました、愛撫しました。それがために、彼の戀心は一層に募るばかりです。二人は互に戀し合つて居るので御座いました。年頃も同じやうですし、二人とも優り劣りなく綺麗で御座いました。で、夜になると、狂へる戀の奴隷なる、アイユーブの子息ガーニムは立つて、蠟燭や燈火を點火しましたので、部屋の中は輝きました。それから彼は酒の道具を取出して、食卓を据ゑながら、彼女と一緒に坐りました。ガーニムが乙女に盃を獻したり、注いだりすると、乙女もガーニムに獻したり、注いだりしました。かうして二人は互に相手を弄つたり、笑つたり、又は歌を歌つたりして居りました。で、だん／＼陽氣になるに伴つて、彼はすつかり互ひの愛に溺れてしまひました。心と心の結びの神の完全性は褒められてあれよ。二人はかうして明け方近くまでつゞけました。その間に睡くなつたので、朝までお互に別れ／＼に就寝しました。

アイユーブの子息なるガーニムは朝起きると、すぐに市場へ出懸けて、野菜だの、肉だの、酒だのと人用なものを買ひ調べて、持つて歸りました。それから又彼女と一緒に坐つて、思ふ存分食べました。その後で又酒を持ち出して、飲んで巫山戯々々々してゐる間に、二人とも頬が眞赤になつて、眼の玉がますます／＼黒くなつて來ました。そこでガーニムが言ひました。「お、我が夫人よ、貴方の愛に

囚はれた者に、貴方の眼に射殺された者に、何卒憐みを掛けてやつて下さいませ。私は貴方の外に、これまで決して心を動かしたことはないのですよ。」かう言つて、少時の間澹然と泣いて居りました。乙女はそれに答へました。「お、我が主人よ、我が眼の光よ。大神にかけて、私は貴方をお慕ひ申し、すつかり信賴して居ります。ですが、貴方と私とは連も一緒になることは出来ずまいよ。」で、それは何う言ふ故障があるのですか。」と、彼は訊ねました。「今晚私の身の上をお話し申し上げませう。すれば、貴方も私の言ふことを道理だと思つて下さいませうからね。」と、彼女はそれに答へました。が、かうして二人は全一箇月も過しました。その後で、或夜のこと、ガーニムが自分の戀ひ焦れてゐる胸の苦しさを訴へました時、乙女はたうとう彼に言ひました。「それでは私のことを申しませうね。私の身分柄がお分りになれば、自然、私の秘密も知れて、私がお宥しを願ふ譯も判然するでせうからね。」と、彼は答へました。で、彼女は締めてゐた帯を纏んで、彼に言ひました。「お、我が主人よ。この縁に書いてあることを讀んで下さいませ。」そこで彼はその縁を手にとつて見遣りました。その上には、金糸で縫ひ付けて、「我は汝の所有なり、汝は我の所有なり、お、教祖の伯父の後裔よ。」と書いて御座いました。ガーニムはそれを讀むと、思はず手を離しながら、「何卒貴方のお身の上を明かして下さいませ。」と頼みました。「え、お話しませう。」と言ひながら、彼女は次のやうに語りました。――

「好う御座いますか。私は教王様のお氣に入りの奴隷で、名をクー・テル・クループと申すもので御座いますよ。教王様は私を御殿でお育て下さいましたが、私が成人してからは、神様が授けて下さいました。私の美しいところだの、可愛らしいところだの、その他の藝能だのにお眼が留つて、非常に私を可愛がつて下さいました。で、別に一間を宛てがつて住まはせた上、十人の女奴隷まで召使として私に附けて下さいました。それから御覽の通りこんな装飾物を私に下さいましたのよ。その後教王様は或日近隣の州へ旅行にお出懸けになりました。所が、ズベイデエ夫人が私の使つてゐる女奴隷の一人の許へ被入して、『お前の奥様のクー・テル・クループが睡つたら、この菲沃斯の一片を奥様の鼻の孔と飲料の中へ入れてお呉れ。さうすれば、お前の満足する程お金子をお前に上げるからね。』と申されました。すると、その奴隷は、『え、宜しう御座いますとも。』と喜んで承知しました。そして、お金子を貰へる嬉しさに、夫人の手からその菲沃スを受取つたんですよ。此奴隷は元々ズベイデエ夫人の許に仕へて居たものですから、こんな用を吩咐けられもすれば、又請合ひもしたので御座いますね。それから何うにかして私にその菲沃スを飲ませたので御座いますよ。すると、私は頭をがつくりと垂れながら、床の上に倒れてしまひました。そして、黄泉へ旅立ちましたもの、やうに見えたので御座いませう。所が、他に好い考へが附かなかつたものと見えて、私をあの箱に入れて、こつそり黒人奴隷どもを喚び寄せました。そして、黒奴どもと門番とに鼻薬を與つて、ほら、貴方が棕櫚

の樹の頂邊で休んでいらした、あの晩に、黒奴どもに擔はせて、私を搬び出させたのですわ。それから後は、貴方が知つて被坐つしやる通りで、眞個貴方のお蔭で私は助かつたので御座いますよ。その上、此處へお連れ下さつて、それは、もう、御親切にお世話して下さいましたのね。私の身の上と言ふのはこれだけで御座いますよ。で、私の居ない間に、教王様は何うなされたことで御座いませう？ それも分らないのですよ。ねえ、これで私の身分柄がお分りでせう。そして、私のことは他へ漏らしては不可ませんよ。」

アイユーブの子息なるガーニムはクー・テル・クループの此物語を聞いて、此乙女が教王のお氣に入りだと知ると、教王に畏れをなして、急に身を退いて、部屋の片隅に一人しよんぼり坐りながら、我が身を責め、我が立場を振り返つて、何うでも一緒になることの出来ぬ女に焦れてゐる身の不幸に思ひ亂れて居りました。そして、戀心の烈しくなつては、胸のうちが燃えるやうな想ひに氣も狂はんばかりになつて、さめくと泣いたり、運命の自由にならぬことや、没義道なことをくどくどと啣つてゐました。裕かなる人の心に戀の悩みを求めしめ、賤しき者には一粒の重さに比ぶべき程のそれさへ授け給はぬ神の完全性は稱ふべきかな！ それを見て、クー・テル・クループは立つて来て、心に寄り添ひながら接吻しました。彼女の心は既に相手に對する戀にすっかり囚はれてゐたので、心の奥に秘めて置いた想ひのたけを打明けながら、ガーニムの頸に腕を捲き附けて、又もや彼に接吻し

ました。が、ガーニムは教王の恐ろしさに、女の腕からつと身を離しました。それから二人は互に想ひ想はれる戀の海に溺れながら、暫らく談話に耽つてゐました。で、明くる朝までさうしてゐましたが、總てガーニムは立ち上つて、平常の通り市場に出懸けました。そして、入用な物を買ひ調べました。で、家へ歸つて見ると、クー・テル・クループは泣いてゐるので御座います。が、ガーニムの歸つたのを見ると、直に涙を納めて、につこり微笑しながら、「貴方が留守なので淋しくつて堪りませんでした。お、我が戀人よ。大神にかけて、貴方が傍に居て下さらない間は、私には一年も経つたやうな氣が致しますよ。もう迎も貴方のお傍を離れては居られませんわ。ねえ、私はこれ程貴方のことを想つて戀ひ焦がれてゐるんですよ。さあ、もう何んなことにならうとも、そんなことは氣に懸けないで、こゝへ来て、何卒貴方の妻にして下さいませ。」と強請みました。けれども、彼は「いやいや私は大神のお傍に避難所を求めます！ それは何うしたつて出来ないことですよ。犬が獅子の座へ直ることが出来ませうか。我が主の所有に近寄ることは、私には禁じられてゐるんですよ。」と言ひながら、無理に彼女の手を振り千斷つて、遠く離れて坐りました。かやうに情なく跳ねつけられると、彼女の想ひは一層募りました。こんな風で、二人は三箇月の長い間を過したので御座います。乙女が男の方へ近寄るやうな素振を一寸でも見せようものなら、彼は毎もつと身を退けて、「奴隷が御主人様の所有に手を附けることは、奴隷には許されないのでですよ。」と言ひくしました。アイユーブの子

息なる狂へる戀の奴隷ガーニムの戀物語はこんな風で御座いました。

偕て、ズベイデエは、教王のお留守の間に、クー・テル・クループをこんな目に遭はせたので、「教王様がお歸りになつて、彼女のことをお訊ねになつたら、何と申し上げようかしら？ 何と御返辭をしようかしら？」と、獨語を言ひながら、しきりに思ひ亂れて居りました。それから彼女は自分の許にある一人のお媼さん呼び寄せて、自分の祕密を明かしながら、「クー・テル・クループが此世に居ない今となつては、如何したものだらう？」と相談いたしました。お媼さんは、話の筋を會得した時、「お、奥様よ、教王様の御歸りももう間近で御座いますよ。ですが、私は一つ大工を迎へて遣つて、木彫の死骸を拵へさせたいと存じますかね。そして、そのお墓を一つ掘らして置くんですよ。貴方はその周圍に蠟燭と洋燈を點火した上、御殿に居る者には誰も黒の喪服を着せさせてね、教王様の旅からお歸りが知れましたら、直ぐに玄關先へ出て、おいしく泣き聲を立てさせるんですよ。すると、教王様はお這入りになるなり『一體何うしたんだ？』と、お訊ねになります。さうしたら、衆皆が、『クー・テル・クループが亡くなりましたして御座います。何卒神様は、あの方が亡くなりました代りに、貴方様に充分お入れ合せをして下さいますやうに！ それから私どもの奥様は、御丁寧にとの思召から御自分の御殿へ埋葬なされたので御座います。』と、かう申し上げるんですね。教王様はこれを聞くと、お泣きになつて、随分落膽なされませう。そして、夜は誦人どもをお

墓の前に坐らせて、聖典の誦讀をおさせになりますよ。若しまた教王様お一人でお考へになつて、屹度これは伯父の娘が嫉妬心からクー・テル・クループを殺すやうに計つたんだな、とお思ひになるか、さもなくとも戀しさに夢中におなりなされるかすれば、墓から死骸を掘り出せ、と仰せ出されことも御座いませう。ですが、そんなことは御心配には及びませんよ。と言ふのは、人間の形體をしたその像まで掘り下げて、身に高價な經帷子を纏うたま、それを取り出した時、教王様がその經帷子を脱がせて見たいとまで仰せになるやうなことがあつたら、貴方はそれをお留めになるが可いんですよ。すれば、來世の酬いの恐しさに、教王様も屹度お止めになるでせうからね。貴方はその時かう仰有いませよ。『あの女の死骸を裸體にして御覽になるのは、掟に背きますよ。』とね。すると、教王様もそれであの女の死んだことをお信じになつて、その像は元の場所に埋めさせ、貴方のなされたことに感謝なされますよ。そして、貴方は、それが神様の思召であれば、此苦しい急場から免れることがお出来になりますよ。』と、長々しく應へました。ズベイデエ夫人はお媼さんの言ふことを聞いて、それを嘉納しました。そして、譽れの衣を賜はつた上、早速左様に取計ふやうにとて、幾許の金子を渡しました。お媼さんは直様仕事に取り懸りました。そして、前に言つたやうな像を拵へるやうに大工に申附けました。それが出来る時、彼女はそれをズベイデエ夫人の許へ持つて参りました。ズベイデエ夫人はそれを経帷子に包んで、蠟燭や洋燈を點火し列ねながら、墓の周圍に敷物を敷き詰

めて置きました。そして、自分も喪服を着け、女奴隷達にもさうするやうに申附けました。で、クー・テル・クループが死んだと言ふことは、忽ち殿中に擴がりました。それから間もなく、教王は旅から歸られました。そして、御殿にお這入りになりました。が、心はたゞもうクー・テル・クループのことで一杯になつてゐるので御座います。で、小姓どもや、宦官や、女奴隷どもが、一人残らず黒の喪服を着けてゐるのを御覽なされると、胸がどきりといたしました。それからズベイデエ夫人の御殿へおいでになると、矢張り夫人も喪服を着けてゐるので、その理由をお訊ねになりました。で、クー・テル・クループが亡くなつたことを申上げると、教王は氣を失つて倒れてしまはれました。そして、正氣に返つた時、お墓の在所をお訊ねになりました。するとズベイデエ夫人はそれに答へました。『お、教王様、出来るだけ鄭重にしたい私の心持から、私の宮殿に葬つて上げました。』そこで教王は旅行服のまま、御殿に這入つて、クー・テル・クループの墓を訪ねに奥へ通られました。見ると、毛氈を敷き詰めて、蠟燭や洋燈があか／＼と點火つて居りました。教王はそれを見て、夫人のして置いてくれたことに、感謝の意をお述べになりました。所が、教王はだん／＼氣が迷ひ出して、眞實か謊か、暫くの間決し兼ねてゐました。その間にだん／＼疑惑の心が高じて、到頭墓を發いて、彼女の死體を取り出すやうに命ぜられた。所が、死體を取り出して經帷子を見ると、それを剝いで見たくなりました。けれども一方には又神罰——あ、神の御名は褒め

られてあれよ——が、恐しいやうな気がして躊躇して居りますと、例のお媼さんが出て来て、『元の場所
所に埋めてお置き遊ばせ。』と申しました。で、教王は早速宗教と法律の教授どもをお召し寄せにな
つて、彼女の墓の前で聖典全部の誦讀をおさせになりました。そして、その間その傍に坐つたまゝ始
終泣いて居られました。が、餘り泣いて、到頭気が遠くなつておしまひなされた程で御座いました。
教王は、かうして一箇月の間度々その墓を訪れて居られました。その後或日のこと貴族や宰相達
が御前を退出してしまつてから、後宮へお成りなされました。そして、一寸の間横になつて、お就寢
みなされましたが、一人の女奴隷が枕頭に坐つてゐると、一人は裾の方にお付き申して居りました。
教王は、ぐつすり一寝入りした後で、眼を覺まされました。そして、眼を開くと、枕頭の女が足許
の女に話し掛けてゐるのが耳に入りました。『汝に禍あれ、お、ケイスラーンよ。』——『それは又何
うして、お、カディーブよ?』と、相手が聞き返しました。『わが君様はあの出来事を御存じないので
すものね。だから、毎晩お墓の前に坐つて被坐しやるけれど、あのお墓の中には大工の拵へた木彫の
像が這入つてただけぢやありませんか。』と、最初口を開いた方がそれに應へました。『ぢや、ター・
テル・クループ様は何うしておしまひなすつたのでせうね?』と、片一方が二たび訊ねました。す
ると、相手は又それに應へました。『それはね、私どもの奥様のズベイデエ様が、或女奴隷に菲沃斯
をお渡しになつたのさ。すると、その女がター・テル・クループ様を瞞して、それを吞ませたのです

よ。で、其薬が身體中に廻ると、相手を箱に入れて、サローブとカーフルの二人に擔ぎ出させて、
お墓の中に抛り込ませたんですとさ。』ケイスラーンはそれを聞くと吃驚して申しました。『汝に禍
あれ、お、カディーブよ。ター・テル・クループ様は亡くなつたのぢやないのですか。』——『あの女の
若さでそんな事があるものですか。』と、カディーブはそれに應へました。『何でもズベイデエ夫人の
仰有るには、ター・テル・クループはダマスキスのガーニムとか言ふ商人と、今日でもう四箇月も一
緒に居ると言ふ話ですよ。それなのに、我が君様は死骸も何も這入つてゐないお墓へお詣りして徹宵
泣いて許り被坐しやるんだものね。』——二人がこんな話しをしてゐるのを、教王は黙つて聞いて居
られました。が、二人が話しを罷めた時、あの墓は虚偽のもので、ター・テル・クループは四箇月の
間アイユーブの子息なるガーニムと一緒に居るのだと分ると、教王は非常に腹を立て、立ち上りま
した。そして、朝廷の貴族達を召し寄せました。宰相ジャーファル・エル・バルメキーが伺候して、
御前の土に接吻いたしました。すると、教王はぶん／＼怒りながら、『お、ジャーファルよ、兵士
の一隊を率ゐて、アイユーブの子息なるガーニムの家へ押し寄せ、彼奴を召し捕つてしまふが、い
よ。そして、私の奴隷のター・テル・クループと一緒に彼奴を我が面前へ連れて来い。俺は斷じて彼奴を
思ひ切り責め苛んでやるからね。』と仰せになりました。
ジャーファルは、『はい、畏承りました。』とお請けをしました。そして、手勢を引き連れ、又奉行

も隨伴に加へて、一同ガーニムの邸へ押寄せました。ガーニムは恰度その前に外出して、肉を一鉢買つて来て、クー・テル・クループと一緒にそれを食べようとして、將に手を延ばさうとした所で御座いました。で、彼女が不圖戶外を見ると、家の周圍はすっかり軍勢に取捲かれて、宰相を始めとして奉行だの、猛者だの、侍者だのが、各自に拔身を提げながら、恰度黒眼が瞳を取捲いてゐるやうに、家の周圍にぎつしり詰め掛けて居りました。それを見ると、彼女は自分の近狀が御主人教王のお耳に入つたのだと悟るとともに、これは正しく、我が身の破滅だと感じました。彼女の顔色は蒼白になつて、その美しさも見るとともに、變つてしまひました。そして、ガーニムの方を見遣りながら、「お、我が愛人よ、何卒遁げて下さいませ。」と、申しました。「何うしたら可いでせう？」と、彼は申しました。「何處へ遁げられませう？ 何しろ私の財産も生活の代も皆此家の中にあるんですからね。」が、彼女はそれに應へました。「愚圖々々してゐては駄目ですよ。貴方も殺された上に、財産まで失くしてしまひますよ。」

「お、我が夫人よ。我が眼の光りよ、あんなに家の周圍をぐるりと取り捲かれてゐて、何うして脱け出すことが出来ませう？」と、彼はそれに應へました。「御心配には及びませんよ。」と、彼女は又それに應へて申しました。そして、男の着物を脱がせて、擦り切れた襦袢々々の上衣を着せた上、肉を盛つた鉢を頭の上に載せさせ、それに麵麩を少し許りと肉の小皿とを入れて、「さあ、かう言ふ計略

で出て被入しやい。私のことは些とも心配しないで可いんですよ、教王様には何うすれば可いか、私はちやんと心得て居るんですからね。」と申し添へました。ガーニムはかうしてクー・テル・クループの言葉とその忠告とを聞いた時、鉢を頭に載せたまゝ、大勢取捲いてゐる真中を通つて出て行きました。そして、神様の御守護に依つて、目前身に迫つた係締や危険から難なく免れました。これも一重に神様が彼の心懸けの好いのを祝福して下さつたお蔭で御座いませう。

宰相ジャーフアルは此家に到着して、馬から降りて這入つて行きました。そして、クー・テル・クループを發見しました。彼女は身を着飾つて、金だの、裝飾物だの、寶石だの、其他、持てば軽いが値ひは莫大な、珍貴なものを其箱に一杯詰めて置きました。そして、ジャーフアルが自分の傍へ遣つて参りました時、彼女はつと立り上つて、彼の前の地に接吻しながら、「お、旦那様よ、神様の御命令はベンで書いて御座います。」と申しました。が、ジャーフアルは彼女の様子を熟視と見て、「大神にかけて、お、我が夫人よ、教王はたゞアイユープの子息なるガーニムを召捕つて來いと命ぜられただけで御座います。」と答へました。すると、彼女は申しました。「あの人は商賈の品を二三行李捆つて、それを持つたまゝ、ダマスクスへ行つてしまひました。それから先のこととは私も存じませぬ。で、此箱を貴方にお預け申しますから、何卒教王様の御殿へ運んで下さいませ。」そこでジャーフアルは「委細を承知しました。」と答へました。そして、其箱を受取りながら、クー・テル・クループと

一緒に、教王の宮殿へ搬んで行くやうに、又彼女のことは失禮のないやう鄭重に待遇するやうに命じました。尤もこれは軍勢がガーニムの家を散々に劫掠した後のことで御座いました。で、一同教王の許へ引き上げて、ジャーファルはありし次第を逐一言上いたしました。すると、教王はクー・テル・クループを暗い一室に押籠めたまゝ、一人のお媪さんを附人にして置かれました。これはガーニムが彼女に對して後暗いことをしたものとばかり想像しておいでだからで御座います。

それから教王はダマスタスの太守をしてある、スレイマーン・エズ・ジエイニーの子息なるモハマッド貴族に宛て、次のやうな文面の手紙を書かれました。「此書簡入手次第、アイユープの子息なるガーニムを召捕つた上、當方へ差送るべきもの也。」——此上諭を受け取つた時、モハマッドはそれに接吻して頭に戴きました。そして、市場の街中にお布令を出して、「誰でも分捕物にあり附きたい者は、アイユープの子息なるガーニムの家に出懸ける。」と告げさせました。人々がその家へ遣つて來ると、家にはガーニムの母親と妹とが彼のために造つて貰つた墓の前に坐りながら、二人とも、たゞ泣いてゐるので御座いました。そこへ人々は押し込んで、二人を引捕へた上、家中の家財を劫掠しました。母親も妹もその何故たるかを知りませんでした。そして二人を帝王の前に連れて來ました。帝王はアイユープの子息なるガーニムに就いて彼等を訊問しました。が、二人とも、「私どもは此一年間と言ふもの、何の消息も聞きませぬ。」と申上げました。そこで、二人は又その家に歸る

ことを許されました。

一方アイユープの子息なる狂へる戀の奴隸ガーニムは、すつかり財産を没收されて、途方に暮れながら、胸も張り裂けんばかりに泣き出しました。彼はとぼく歩きつづけて、日が暮れるまで少しも休みませんでした。そして、極度の饑餓と疲勞とに苦しみながら、たうとう或村に到着しました。彼は村の會堂へ這入つて、圓い眞蔭の上に坐りながら、建物の壁に凭れて居りました。が、餘りに饑餓と疲れが苛かつた爲に、そこに倒れてしまひました。明くる朝までさうして居りましたが、食物を食はない爲に、心臓がどきどきと動悸を打ちました。蟲がうよく身體中這ひ廻つて、呼吸も蒸れ臭くなりませんでした。そして、全然見る影もない姿になりました。その村の人達は朝の祈禱を上げようと會堂へ遣つて來て、彼が饑餓に病んで倒れてゐるのを見附けました。それでも彼の様子には、何處か元は裕かな生活をしてゐたらしい面影が残つてゐるので御座いました。で、村の人達は彼の傍に近づいて見て、相手が飢餓と寒さとに苦しんでゐるのだと知りました。そこで、ぼろくになつた袖の附いてある、古ぼけた上衣を着せて遣りながら、「お、他所國のお方よ。何處からおいでたのかね、一體何處がお悪いのだね？」と言葉を懸けました。すると、ガーニムは眼を開いて、人々を見廻しながら泣きました。が、何とも返辭を致しませんでした。それから一人の男が、相手のいかにも空腹に惱んでゐるらしいのを見て、自宅へ歸つて、一皿の蜂蜜と麵麩の二片とを持つて來て遣りました。彼は人々

に取巻かれたまゝ、それを食べて居りましたが、その間に太陽も上つたので、人々は各自その生計にいそむために、それごとく歸つて行つてしまひました。こんな風で、彼は一箇月の間村の人達の情で過しました。が、病氣と衰弱とはだん／＼重るばかりで御座いました。そこで人々は彼を不憫がつて何うしたものと一緒相談してから、兎に角バグダードの病院へ移すことに極めました。

所が、かうして人々が相談をしてゐる間に、見よ、二人の女乞食が彼の傍へ遣つて參りました。この二人は彼の母親と妹とで御座いました。彼は二人の者に氣が附いた時、頭の上にあつた麵麩を取つて與へました。二人は其晩彼の傍で就寝しました。が、彼も二人を眞逆自分の親兄弟とは氣が附きませんでした。次の日、村の人達は駱駝を備つて來て、その持主に言ひました。「此病人を載せて行つて下さい。そして、バグダードに着いたら病院の入口に下して遣つて下さい。そこで療治したら大抵癒るだらうと思ひますからね。お前さんはその報酬をお受けなさるだらうよ。」——「はい、畏承りました。」と、彼は答へました。そこで人々は、アイユーブの子息なるガーニムを會堂の中から連れ出して、彼が下に敷いてゐた圓莫莖も其儘駱駝の上に載せて遣りました。彼の母親や妹も人々の間に交つて、彼を見に出て參りました。けれども、二人とも彼をガーニムとは氣が付きませんでした。が、その間につく／＼彼を見遣りながら、「どうも家のガーニムに似てゐる！ だが、眞逆こんな病人の筈はないが、それとも何うかしら？」と、ひそ／＼語り合つて居りました。所で、ガーニムの方

は、駱駝の上に乗せられるまで眼を覺ましませんでした。それから彼は泣いたり呻いたりし始めました。村の人達は、彼の母親や妹が自分の子息とも兄とも知らないながら、彼に同情して泣いてゐるのを見ました。それから母娘の者はバグダードへと旅をつゞけて參りましたが、駱駝追ひも亦足を休めないでたうとう病院に到着しました。そして、其入口にガーニムを卸して置いたまゝ、駱駝を曳いて歸つてしまひました。

ガーニムは卸された儘、朝まで其處に横はつてゐました。朝になつて、人々が街の上を往來し始めた時、彼はその人々の眼に觸れました。彼はその姿が楊枝に似て來た程瘦せてしまつて居りました。で、人々は後から／＼遣つて來て、何時までも彼を見て居りましたが、其間に市場の老爺が遣つて來て、見物人を追つ拂ひながら、「一つ此氣の毒な人を助けて、天國に這入る支度をしませう。何しろ病院へ入れられたが最後、一日で殺されてしまふだらうからな。」と呟きました。それから下男どもに吩咐けて、彼を擔いで自分の家まで連れて來させました。そして、新しい寢床を延べて、新しい枕を宛てがつて遣りました。それから、妻に向つて、「大切に看護して上げろよ。」と申し渡しました。「頭の上——」と、妻は答へました。そして、兩袖をたくし上げながら、湯を沸かして、四肢や胴體を洗つて遣りました。そして、女奴隷の着る肌衣ですつかり彼を包んで遣りました。それからお酒を一杯飲ませて、薔薇水を振りかけて遣りました。そのお蔭で、彼は漸くわれに返りました。そし

て、戀しいクー・テル・クループのことを想ひ出しながら、一層其想ひに惱まされました。——これがガニームの其後の物語で御座います。

偕て、クー・テル・クループは何うなつたかと申しますに、教王は彼女に對するお腹立ちから、彼女を暗室に監禁されましたので、八十日間と言ふもの、彼女は毎日同じやうに悲しい日を送つて居りました。で、或日教王が其處を通りかゝられると、彼女の歌を唄つてゐるのが不圖お耳に入りました。彼女は歌を唄つてしまふと、「お、我が愛人よ、お、ガーニムよ。」と、一人で叫喚き始めました。「貴方は何といふ親切な方でせう、何と言ふお身持の正しい方でせう！ 貴方は自分に害を加へた者に親切にしてお遣りなされ、自分の體面を踏み附けた人の名譽を守つてお遣りなされた。そして、相手の閨人を保護してお遣りなされたのに、相手は貴方や貴方の家族を奴隸のやうに取扱ひました。ですが、貴方は屹度あの教王様と一緒に正しい裁判人の前にお立ちなされるんですよ。そして、神様が裁判人でおありなされ、天使がその證人におなりなされる其日には、相手に對して、屹度貴方の正義が認められることで御座いませう。」——で、教王はそれ等の言葉を聞いて、彼女の不平を了解した時、彼女が故なくして可哀想な目に遭はせられてゐるのだと知りました。そこで、御殿へ這入られて、宦官を彼女の許へ遣はされました。彼女は眼を泣き腫らして、悲しい胸を抱きながら、俯向きがちに、教王の前に出て參りました。教王は直ぐに言葉を懸けて、「お、クー・テル・クルー

プよ、お前は俺に虐待されてゐると呟いたり、俺が暴虐だと非難したりして俺に親切にしてくれた者を俺が酷い目に遇はせたと考へてゐるやうだね。ぢや、俺の體面を重んじてくれたと言ふのは、一體誰だね？ 俺がその人を酷い目に遣はせたと言ふのは、又俺の閨人を保護してくれたのに、俺がその人のそれを奴隸のやうに取扱つたと言ふのは、誰のことだね。」と、お訊ねになりました。彼女は私に對して、「それはアイユープの子息なるガーニムのことと御座います。と申すのは、あの人は私に對して、お、教王様よ、貴方様の御仁慈の御蔭を持ちまして、何の疼しいことも致さなかつたので御座いますからね。」と應へました。それを聞いて教王は、「あ、神の外には何の力も權威もない！」と嘆息を發せられました。そして、又それに附け加へて、「お、クー・テル・クループよ、お前のさうしたいと思ふことを俺に望むがい。何でも慍へて遣るぞよ。」と仰せられました。そこで、彼女は、「何卒私に私の愛するアイユープの子息なるガーニムを戴かして下さりませ。」と申しました。教王は點頭いて、「それが神の思召に適つたら、その男を此處へ招び寄せるやうに、しかも鄭重に迎へるやうに取計らつて遣はさう。」と仰せられました。「お、信仰篤き者どもの主よ。」と、彼女はつづいて訊ねました。「では、あの人をお召し寄せになつた時、私をあの人に遣つて下さいませのでせうか。——」うむ、此處へ連れて來させたら、俺はお前を贈物として其奴に呉れてやるぞ、遣ると言つた物は二度と再び引つ込ませるやうなことの無い寛裕な人の贈物だぞ。」と、教王は固くお約束を

なされました。そこで、彼女は二たび申しました。「お、信仰篤き者どもの主よ。何卒あの人の行方を私に捜させて下さいませ。多分神様が二人をお引合せ下さいませうと存じますからね。」すると、教王は、「お前の好きにせよ。」と、仰せられました。

彼女はお許しを得て、大層喜びました。そして、黄金の一千片を身に付けて出懸けました。それから老爺どもを見舞つて、ガーニムのために施物をいたしました。次の日彼女は商賈の市場へ行つて、市場の長に金子を若干渡しして、「他國人が来たなら、これを施して遣つてくれ。」と頼みました。それから又、次の週には黄金の一千片を持って出懸けながら、金細工や寶石商の市場に参りました。そして市場の長を喚び寄せながら、持つて来た一千片の黄金をそっくり渡しして、「他國人が来たなら、これを施しに遣つてくれ。」と頼みました。所で、その長と言ふのが前に出て来た市場の老爺で御座いました。彼は彼女をつくつく見ておりましたが、「私の宅に居ります若い他國人を見に、一緒においでになりませんか。それは品の好い、何處と言つて批點の打所のない、美しい男ですよ。若しかすると、それがアイユープの子息で、狂へる戀の奴隷なるガーニムかも知れませんからね。」と申しました。とは言もの、長はガーニムに就いては何にも知りませんので、多分財産を取り上げられて、借金で身動きの取れない貧乏人か、でなくば、戀人との仲を割かれた男位に想像して居りました。で、彼女は彼の言葉を聞くと、胸がどきどきして、男戀しさで一杯になりました。そして、「それでは誰方かに

お宅まで案内して頂きたく御座います。」と申しました。そこで、彼は一人の少年を彼女に随つて遣つて、その他國人の泊つてゐる自分の家まで案内させました。彼女は厚く禮を述べました。で、彼女が其家に這入つて行つて、長の妻に挨拶した時、妻は立ち上つて、彼女の前の地に接吻いたしました。妻は彼女が何人であるかを知つてゐたので御座います。其時クー・テル・クループは「お宅においての御病人は何處に寝ておいで、すか。」と訊ねました。すると、妻は泣いて答へました。「お、奥様、此處においで、御座いますよ。相當の家柄の方と見えまして、以前の裕かな面影が何處やら残つてゐるので御座いますものね。」それから、クー・テル・クループは病人の寝てゐる寢臺の方を見遣りながら、ガーニムのつもりでしげしげと見詰めて居りました。が、すっかり容子が變つて、齒楊枝のやうに瘦せ細つて居りました。又其後の彼の事情を少しも知りませんでしたので、クー・テル・クループにもこれが自分の尋ねてゐる人だとは見分けられませんでした。が、病人の氣の毒な様子に心動かされて、涙を瀉しながら、「本當にね。かうやつて他國に来ておいで、は、假令お國では貴族でも何でもお氣の毒なもので御座いますね。」と申しました。そして、病人の爲に藥や葡萄酒を取り寄せるやうに頼んで、暫らくの間其枕頭に坐つて居りました。が、驢馬に乗つて御殿へ歸りました。それからも彼女はガーニムを探ね出すつもりで、市場といふ市場へは残らず出懸けて行きました。其後間もなく、市場の長はガーニムの母親と妹のフイトネエとを連れて、一緒にクー・テル・ク

ループの許へ参りました。そして、『お、此上もなく慈悲深い奥様よ。今日母娘連れの女が此町へ這入つて参りました。元は相當の家柄のものと見えて、裕福だつたらしい面影が何處か知ら残つて居りますが、毛屑の襪履着物に包まつて、首に首陀囊を吊下げながら、眼を泣き腫らして、悲しげな容子をして居るので御座いますよ。そこで連れて参りましたから、何卒此方様にお留め置きを願ひまして、物乞ひするやうな恥づかしい真似をさせたくないと存じます。何しろ業つく張りの人間相手に施物を貰つて歩く柄の人達ぢや御座いませんからね。で、これが神様の思召しに慥つたら、私どももお蔭で天國に這入れますからな。』と申しました。それを聞いて、彼女は『大神にかけて、お、旦那よ。』と答へました。『早くその人達を連れて来て下さいませよ。何處に居りますの？ 此方へ這入るやうに申して下さいな。』そこでフィットネエとその母親とはクー・テル・クループの前へ遣つて参りました。見ると、二人とも水際立つて美しいので、クー・テル・クループは憐れを催しながら、大神にかけて、『此人達は屹度裕福な家柄の人達ですわ。何處か知らその面影が、容子に見えて居りますものね。』と申しました。『お、奥様。』と、市場の長はそれに應へました。『私どもは後の世で善い報いを得ようと思つて、貧しい人や難澁してゐる者に目を懸けて遣るので御座いますよ。恐らくこの二人も強奪者に壓迫されて、其財産を奪はれた擧句、斯様に零落したので御座いませうよ。』其時二人の女は烈しく泣き悲しみました。そして、アイユーブの子息なる狂へる戀の奴隷ガーニムのことを憶ひ出し

ながら、彼等の悲嘆は一層増すばかりで御座いました。クー・テル・クループも一緒になつて泣きました。すると、ガーニムの母親は聲を擧げて叫びました。『神様、何卒私どもの尋ねて居ります者と廻り合はせて下さいませ。其者は私の倅で、アイユーブと申す者で御座います。』と祈りを上げました。クー・テル・クループはそれ等の言葉を聞いた時、此女が自分の愛する男の母親で、もう一人の娘はその妹だと言ふことを知りました。そして、泣きに泣いて、到頭そこに氣を失つて倒れてしまひました。やがて正氣に返つた時、二人の傍近く寄り添ひながら、『最う何にも心配なさることはありませんよ。今日は貴方方の御運の開く初めの日で、災禍の最後の日で御座いますからね。ですから、もうお嘆きなさいませ。』と、二人を慰めました。それから市場の長に、二人を其家に連れて行つて妻の手で二人を浴場に案内させた上、綺麗な着物を纏はせて、好くお世話をするやうに、そして、出来るだけ鄭重に待遇するやうに命じながら、若干の金子を與へました。

其翌日クー・テル・クループは二たび驢馬に乗つて、市場の長の家を訪ねながら、其妻に會ひに行きました。妻は彼女を見ると、立ち上つて、彼女の前の地に接吻しました。そして、彼女の慈悲深いことを感謝しました。彼女は又其妻がガーニムの母親と妹とを浴場へ案内して、以前の汚い着物を脱がせた結果、生來の裕かな面影が一層明瞭して來たのを見て取りました。で、彼女は暫く衆皆と一緒に坐つて會話をして居りました。その後で病人は何んな具合かと市場の長の妻に訊ねました。『別

に變りは御座いませぬ。」と、彼女はそれに應へました。「では、一つお見舞ひ申したいから、立つて案内して下さい。」と、クー・テル・クループは申しました。そこで二人は立ち上つて、ガーニムの母親や妹と一緒に、病人の寢間へ通りました。そして、其枕邊に坐りました。アイユープの子息なる狂へる戀の奴隸ガーニムは、誰か「クー・テル・クループの名を口にしたらのを小耳に挾んだ時、身體や四肢は瘦せ細つてゐましたけれど、不圖魂われに還つて、枕から頭を擡げながら、「お、クー・テル・クループよ。」と叫びました。それを聞いて、彼女は彼を見遣りながら、漸くそれと覺りました。そして、「さうです、お、我が愛人よ。」と叫びました。「もつと傍へ来て下さい。」と、彼は言ひました。「貴方はアイユープの子息なる、狂へる戀の奴隸ガーニムですか。」と、彼女は訊ねました。「さうです、私がそれだよ。」と、彼は答へました。で、それを聞くと、彼女は氣を失つて倒れてしまひました。彼の妹や母親もそれ等の言葉を聞いて、「お、嬉しいこと！」と聲を擧げて叫びました。そして、同じやうに氣を失つて倒れてしまひました。で、一同正氣に還つた時、クー・テル・クループはガーニムに申しました。「私も貴方に、貴方の阿母様やお妹様に引合はせて下さいました神様は讃へられてあれよ。」それから、彼の傍近く寄り添ひながら、その後自分と教王との間に起つた一伍一什を語つて聞かせました。そして、それに附加へて申しました。「私は教王様に向つて、「私は眞實を申上げたので御座います。お、信仰篤き者どもの主よ。」と申上げたのですよ。すると、教王

様も、私の言葉を信じて、貴方のことをお褒めになりました。そして、今では貴方に會ひたいと思つて被坐せられるのですよ。」それから又彼女は申しました。「教王様は私を貴方に下さると仰有いましたよ。」それを聞いて、ガーニムは極度の喜びに充されました。そこでクー・テル・クループは一同に申しました。「何卒私が歸つて参りますまで、此處を離れないで下さいませな。」彼女はそれから直ぐに立ち上つて、御殿へ歸つて行きました。そして、ガーニムの家から持つて来てあつた箱を其處から搬ん來で來ました。そして、黄金幾片かをその中から取り出して、それを市場の長に渡しながら、「此黄金を受取つて、あの人達にめい／＼極上等の織物の着物を四襲ねづ、拵へて遣つて下さい。それから半巾を二十枚ね。その他あの人達の入用の物があつたら、何なりとも拵へて上げて下さい。」と申しました。其後で、彼女は自分で三人を浴場へ案内して、それ／＼洗つて上げるやうに吩咐けました。そして、三人が浴場から出て來て、それぞれ着物を着更へた後で、一同のために沸した肉だの、良薑の漬物だの、林檎水だのを用意して遣りました。三日間と言ふもの、彼女は三人の傍へ付き切りにして、鶏肉や沸した獸肉を食べさせたり、精良な砂糖の清涼水を飲ませたりして居りました。三日経つ間には、彼等もだん／＼元氣を恢復して來ました。それから又彼女は三人を浴場に連れて行つて、着物を着更へさせました。そして、彼等を市場の長の家に留めて置いたまゝ、自分は教王のお目通りへ出て、御前の土に接吻しながら、ありし次第を逐一申上げました。そして、自分の主人こと、アイ

ユーブの子息なる、狂へる戀の奴隸ガーンニムが歸つて来たこと、又其母親や妹も到着したことを申上げました。そこで教王はクー・テル・クループの言葉を聞かれた時、「宦官を喚んで、直ぐにガーンニムを此處へ連れて来い。」と仰せになりました。で、ジャーファルも彼等と一緒にガーンニムを召連れに出懸けました。所が、クー・テル・クループは他の人達よりも一步先に出懸けて、ガーンニムに會ひながら、「教王様が使者を以て貴方をお召寄せになりますよ。何卒よく氣を付けてね、言ふことに間誤つかず、貴方の辯舌の滑らかさと、心の確固してある所と、言葉遣ひの綺麗な所をお目に懸けるやうにして下さいました。」と注意しました。それから男に立派な着物を着更へさせて、黄金を澤山渡しながら、「教王様の許へいらつしやつたら、先づ召使どもに充分振り撒いてお遣んなさいませよ。」と申しました。で見よ、ジャーファルは驢馬に乗つて、彼の許へ遣つて參りました。ガーンニムはそれを出迎へて、地に接吻しながら、相手の長壽を祈る祈禱に依つて挨拶をいたしました。

ガーンニムの運勢が啓けて来て、彼を光榮に導く星が高く昇つたので御座います。ジャーファルは彼を伴なつて、信仰篤き者どもの主のお目通りに出ました。ガーンニムは教王の御前に進んで、坐並ぶ宰相や貴族連、侍従、士官の面々、其他の朝臣武士もどをすらりと見渡しました。態度確乎として言葉清しく、比喩面白く、流るゝやうな辯舌で、一々挨拶をしながら、頭を低く垂れました。それから教王の面を見上げながら、褒め讃への歌をいくさり誦しました。ガーンニムがそれを誦し終つた時、

教王はその人柄の優美なのと、辯舌がすらくとして、言葉の綺麗なのがすつかり氣に適つてしまひました。そして「もつと近くへ。」と申されました。で、彼が近くへ進みますと、教王は、「お前の物語を聞かせて呉れ、お前の身の上の眞實の所が知りたいものだ。」と仰せになりました。で、ガーンニムは下に坐つて、自分の身に起つたことを始めから終ひまで残らず申上げました。教王は彼が眞實を話してゐるのだと知つた時、譽れの衣一襲ねを賜はつて、お氣に入りの仲間に加へられました。そして、「俺の負うた責任は免じて呉れよ。」と仰せになりました。ガーンニムはその通りにいたしました。そして、「おゝ信仰篤き者どもの主よ、奴隸と奴隸の持つて居りますものは、悉く御主人様の所有で御座ります。」と申上げました。で、教王も此上なく悦ばれました。彼はそれからガーンニムに専有の御殿を宛てがつて、莫大の年金や扶持を下さるやうにお定めになりました。そして、その母や妹も彼の許へ移させられました。教王は又ガーンニムの妹のフィットネエが其名を示す通りに美人であり、誘惑であることを聞き召されて、自分の妻にしたいからと、彼に申出でられました。で、ガーンニムは、「彼女は貴方様の侍女で、私は侍者で御座ります。」と、早速申上げました。教王は厚く感謝されて、黄金一萬片を下し賜はりました。そして、司法官や證人どもをお召寄せになつて、結婚の契約をなされました。それから、教王もガーンニムも同じ日にそれく其妻を訪問されました。教王はフィットネエの許へ、アイユーブの子息なるガーンニムはクー・テル・クループの許へと言ふや

うに。明くる朝、教王はガニームの身に起つたことを始めから終ひまで書き留めて、記録の中に挿んで置くやうに命ぜられました。かうして彼の子孫が其記録を讀んで、神の攝理の計り知られず不思議なものであることを思ひ、何事も晝と夜の創造主にお委せするやうに悟らせようとの思召しで御座いました。

ター・ジェル・ムルークとツーニヤ夫人の物語

第七夜の半ばに始まりて第三十七夜の半ばに終る

昔イスバハーンの方々にエル・メデイーネエ・エル・カドラーと言ふ都が御座いました。そして、其處にはスレイマーンと言ふ國王が住んで居られました。この方は心裕く、仁義に富んで、正義を重んじ、それに聰明で、大様で、親切な方で御座いました。ですから、旅人が四方から彼の許へ遣つて來まして、その名聲はあらゆる國々に響き渡りました。彼は長年の間光榮と安全とで國內を治めて參りました。所が、彼には子供もなければ、妻もないので御座いました。

彼には、その心の裕いところを始めとして、生來の氣質が大層よく彼に似てゐる宰相が一人御座いました。で、或日彼はこの宰相の許へ使を遣はして、お目通りへ召し寄せました。そして、彼に申しました。「お、宰相よ、俺の胸は縮まつて、もう迎も辛抱がし切れなくなつた。力も脱けて來た。何し

る俺には一人の妻もなければ、一人の子供もないからの。これは諸侯や人民の上に立つて、一國を治める國王の取るべき道ぢやないよ。彼等は子供を澤山後に遣して、その子供達に依つて子孫が益々殖えて行くのを娛しんでゐる。豫言者も（神よ、彼を祝福し且つ救ひたまへ）「結婚せよ、子を生めよ。そして、多々益々子孫を殖せよ。われは蘇生の日に他の國民と汝等のために優劣を争はん」と仰つた。で、其方は何う思ふか、お、宰相よ。何ぞ好い思案があつたら教へてくれよ。——宰相はこの言葉を聞くと、涙を流して答へました。「お、當代の國王よ、大慈大悲の神の定めたまふべき事柄を口にするなぞ、勿體なうて私には出來ませぬ。貴方は私が全能の神の怒りに觸れて、地獄の火の中に墮ちることをお望みなされるので御座いますか。——」
「お、宰相よ」と國王はそれに答へました。「若し國王が家柄も血統も分らぬやうな女奴隷を買つたら、その素性の踐しいために彼女を遠ざければならぬか、それとも高貴の出で自分の伴侶として差支へないか、その見當が着くまい。で、そんな事をしたら、その結果恐らく偽善者で、暴君で、血を流す殘虐者になるやうな子供が生れよう。そして、その女奴隷は何も價値あるものを生み出さなければ、優れたものも生じない沼地のやうなものかも知れない。その生んだ子は、神の命じたまひしこともしなければ、神の禁じたまひしことも守らないで、動ともすれば神の怒りに觸れるやうな奴であるかも知れない。だから、俺はそんなことを仕出來さないやうに、女奴隷を買はないんだよ。俺は、その血統も判明してゐて、世間の評判になるほど

美しい國王の娘と結婚出来るやうに、其方に取り計らつて貰ひたいのぢや。回教の國王の娘の中から生れも宗教も好い娘を一人俺のために選り出してくれたら、俺はその娘を妻に貰ひ受けて、證人の前で結婚して、それに依つて人類の君主の思召しに適ふやうにする積りだよ。——宰相はそれに答へました。『さう云ふ事なら、神様はもう貴方のお望みを適へて貴方のお願ひを足らはせて下さいました。』——『それは又何うして?』と、國王は訊ねました。『お、國王よ。』と、宰相は二たびそれに應へました。『聞くところに據りますと、エル・アーデル・ベイターの君主なる國王ザール・シャールには、口にも筆にも現はしがたいやうな、又當世に比べるものゝないやうな、素晴らしく美しい姫君がおありなされます。眞個其方は一、二の打どころのない美しさと、姿形の對稱とを具へて、眼は黒く、髪は長く、腰は細く、臀部は大きいので御座いますからね。其方に近附いて來られると恍惚となり、背中を向けられると、死ぬ思ひをする。何しろ、見る人の心や眼を奪つてしまふのですからね。で、私の考へでは、お、國王よ、一つ其方の父君の許へ、物の分る、經驗に富んだ、氣の利いた使者をお立てになつて丁寧にお其方を申し請けたいとお頼みなされては如何かと心得ます。眞個其方はこの世界に於て、遠近を問はず、他に比べる者を持たないので御座いますからね。其愛らしい顔を御覽になつたら、貴方もさぞお喜びなさいませうよ。そして、光榮ある父の王も定めて貴方のなされ方を御満足に思召されませう。と申すのは、豫言者も(神よ、彼を祝福し且つ救ひたまへ) 回教國には僧院

生活といふものはないと仰しやつたと傳へられて御座いますからね。』これを聞いて、國王はすつかりお喜びになりました。胸は喜悅の情でひろがつて、心配や悲しみは遠く去つてしまひました。そして、宰相に向つて仰有いました。『お、宰相よ、この使者には智慧の勝れた、慇懃で鄭重な其方の外に行く者はないよ。で、早速家へ退がつて、必要の準備をして、明日の朝までに出發の支度を整へてくれ。そして、其乙女と結婚するやうに計らつて來てくれ。俺は其方のお蔭で其乙女戀しさに胸が一杯になつて居るのだよ。決して其乙女を連れずに歸つて來ては不可ないぞ。』宰相はそれに答へました。『はい、畏承りました。』——で、彼は自宅に歸りました。そして、國王への贈物として應はしい品物を調へるやうに吩咐けて、持つに軽く、價ひの高い寶石だの、珍寶だの、亞刺比亞馬だの、タヴィデの鎧だの、言葉に盡しがたい財寶の匣だのを蒐めました。これ等の品を騾馬や駝駱の背に着けて、宰相は百人の侍者と、百人の黒人の男奴隸と、百人の女奴隸とを従へて、旗や軍旗を頭上に高く懸へしながら出立いたしました。國王は用事が終へたら直様歸國するやうにくれぐれも命ぜられました。そして、宰相が出發してからは、胸は想ひに燃えて、日夜乙女を戀ふる心に我を忘れて居られました。その間宰相は日夜沙漠の荒野を横切つて旅行をつゞけながら、目指す都までは後一日で行き着ける處まで參りました。そして、そこで河岸に馬を駐めて、重立つた役人の一人を喚んで、國王ザール・シャールの許へ急いで行つて、自分が間もなく到着することを言上し

てくるやうに命じました。役人は、『はい、畏承りました。』と答へて、その都へ急いで参りました。彼が到着した時、恰度ザール・シャー王はその都の門の前にある娯樂場に坐つておいででしたが、その男が這入つて来るのを御覽になると、他邦人と見て、自分の前へ召し寄せられました。で、使者は彼の御前へ出て、エル・アーデル・カドラー及びイスバハーンの方の王なる、優れたる國王スレイマーン・シャーの宰相が間もなく此處へ到着する旨を申し上げました。すると、ザール・シャー王は大層お喜びになつて、その使者を歡待されました。それから宮中へ案内して、『其方は何處で宰相と別れて来たか。』とお訊ねになりました。彼は答へました。『私は今朝かやうくの河岸で宰相と別れて参りました。宰相は明日到着して殿下をお訊ね申し上げる筈で御座います。神様が貴方の上にその恩寵をつゞけて、貴方の御兩親にお恵みを垂れたまはむことを！』——そこで、ザール・シャー王は宰相の一人に命じて、重立つた役人や、侍従や、副官や、その他廷臣どもの大部分を率ゐて、スレイマーン・シャー王に敬意を表するために——何しろ、スレイマーン・シャー王の領國は全土に擴がつてゐるので御座いましたから——その宰相の出迎へをおさせになりました。

偕てスレイマーン・シャーの宰相はその儘眞夜中頃まで其處に足を駐めて居りましたが、それから都に向つて進んで参りました。夜が白んで、太陽が丘の上にも低地にも輝いて来た時、何時の間にかザール・シャー王の宰相や、侍従や、廷臣たちや、國中の重なる役人どもが近づいて来て、まだ都か

ら數哩離れたところで、彼の一行と一緒になつてしまひました。で、スレイマーン・シャー王の宰相はこれを見て、自分の用向きは確に成就すると心に覺りながら、彼を迎へてくれた人々に挨拶いたしました。それから彼等は王の宮殿まで彼の先に立つて案内をして、第七番目の玄關の入口まで参りました。こゝは何人も乗馬のまゝで這入られない處で御座いました。と言ふのは、國王の御座所近くで御座いましたから。で、宰相も馬から降りて、一段高い廣間へと徒歩で進みますと、上座には眞珠や寶石を鑲めて、象牙の四脚をつけた雪花石膏の玉座が据ゑてありました。その上には赤金で縫箔した緑色の縞子を表に張つた敷物が敷いてあつて、頭の上には眞珠や寶石を飾りつけた天蓋が翳してありました。そして、その玉座にはザール・シャー王がお着きになつて、左右には廷臣どもが坐流れて居りました。宰相は彼の前に進んで、その面前に立ち降りながら、まづ心を落ち着けて、辯舌を振ひにかゝりました。そして、宰相の雄辯術を發揮しながら、流暢な言葉と、懇懃な態度とを以て、國王に向つて挨拶の詩句を誦しました。それが終ると、國王は彼を傍近く進ませて、無上の敬意を拂ひながら、彼を優遇しました。そして、自分の側に坐らせながら、笑顔で以て優渥なる御返辭を賜はりました。それから召使どもはその廣間へ食卓を擴げました。で、一同は思ふ存分食事をいたしました。そして、召使どもが食卓を片附けた時、列席の人々は重なる役人を除くの外皆退出いたしました。宰相は一同が廣間を去つたのを見て、二たび立ち上つて、國王に御挨拶をしながら、彼の前の地に接吻

いたしました。そして、申しました。「お、大王よ、稜威高き君主よ、私は殿下の上に平和と繁榮と幸福とを齎すべき事柄のために、かく殿下をお訪ね申上げたので御座ります。それはかやうで御座ります。イスバハーンの花々及びエル・アーデル・カドラーの國王にして、生れつき聰明で、正義を重んじ、仁慈深き特性を備へたまふスレイマーン・シャー王は血統と家柄に於てお優れなされた殿下の姫君と御結婚なさりたい思召しで、私を使者として殿下の許へお遣はしなされたので御座ります。そして、スレイマーン王殿下と同盟を結ぶことをお望みになつて、幾多の贈物や珍寶を貴方様へお贈りになりました。貴方様も御同様に同盟を結ぶ思召しは御座りますか。」——彼は返辭を待ちながら、其儘黙つて立つて居りました。ザール・シャー王は宰相の言葉を聞き終ると、立ち上つて、身を遜つて地に接吻いたしました。並みある者どもは、國王が使者に對して、こんな謙遜な振舞ひをなされるのを見て吃驚しながら、たゞ呆れて居りました。それから國王は光榮と名譽との所有主なる神に讚美の辭を捧げながら、なほ立ちつゞけたま、申されました。「お、秀でたる宰相よ、其名芳はしき君よ、俺の言ふ所を聞いてくれよ。俺達はスレイマーン・シャー王にとつては、あの方の臣下なみの者どもであるが、今度更にあの方と縁を結べば、それだけ地位を高められるのぢや。俺達は是非この優遇に預かりたいものぢや。俺の娘はあの方の侍女の一人で結構ぢや。俺の最大の希望と申すのは、彼が俺の手頼りになつて下さることぢや。」——それから彼は裁判官や證人どもを召し寄せました。

た。彼等はスレイマーン・シャー王がその宰相を名代として結婚の交渉を果たし、又ザール・シャー王が、欣んでその娘のために結婚契約を取り結んだことに立ち會ひました。で、裁判官は結婚契約を認めてから、雙方の幸福と繁榮とを願つて祈禱を捧げました。それから、宰相は立ち上つて、そのために持つて来たさまざまの贈物や、珍寶を取り出して、それ等を全部ザール・シャー王に差し上げました。

それから國王は専ら娘の支度をしたり、宰相を歡待したりして日を過ぎました。彼はその饗宴に高き賤しきを問はず町中の男女を招いて御馳走しました。そして、二箇月の間祝祭を續けましたが、その中に心や眼を喜ばせるものは何一つ缺けて居りませんでした。それから花嫁の支度が十分調つた時、國王は天幕を搬び出すやうに命じました。で、天幕は都の外側に張られました。人々は數々の箱に品物を詰めました。そして、希臘人や土耳其人の女奴隷どもの用意も出来ました。それから國王は貴重な財寶や高價な寶石を花嫁のために調へたり、眞珠や寶玉を鑲めた赤金の昇床を拵へてやつたりして、旅行中驛馬十頭を彼女専用のものに定めました。昇床は小房のやうになつてゐて、其中に座を占めた姫は宛ら美しいフリーエのやうで、天蓋は恰度天の樂園の假屋に似て居りました。人々は金銀財寶を梱つて、驛馬や駱駝の背に載せました。ザール・シャー王は三里先まで一行を見送つて、そこで娘や宰相其他の隨徒の者と別れを告げながら、さも嬉し氣に満足して歸館されました。

宰相は王の姫君と一緒に日夜せつせと旅を續けて、山野を横切りながら、もう後三日で自分の故國に行き着く處まで参りました。そこで彼は使者を先き駆けさせて、スレイマーン・シャー王の花嫁の到着を知らせました。使者は途中を急いで、國王の御前に罷り出でながら、やがて花嫁の御到着になる由を申上げました。國王は大層お喜びになつて、使者に名譽の衣を賜はりました。そして、軍隊に命じて、行列を作つて、先頭に軍旗を翻しながら、出来るだけ華々しい武裝の下に、花嫁とその隨從の者とを鄭重に出迎へさせました。彼等はその命令の通りにいたしました。又、呼び觸れ人は市中を廻つて、女と言ふ女は、處女も、良人のあるものも、腰の屈つたお婆さんも、悉く出て、花嫁を迎ひに行けと布れて歩きました。で、彼等はわれもくと打ち揃うて彼女のお出迎へに出懸けました。そして、其重立つた者どもは、何か御用を努めようとして、皆花嫁のお隨從に加はりました。人々は彼女を夕方までに國王の宮殿に案内しようとして決いたしました。又重立つた廷臣どもは街をすつかり裝飾して、花嫁が父上から頂戴した衣裳を身に着けながら、宦官や女奴隷どもを前に立て、しづしづと街衢を練られる時、其處に立つてお迎へしようとして相談いたしました。で、彼女は前後左右を軍隊に護衛されながら、昇床に乗つて、だんく街の中に進んで来て、やがて、宮殿間近まで参りました。都中の者は、何人でも出てその行列を見ないものはありませんでした。太鼓は鳴り、槍の穂先はきらりと輝き、喇叭は響き、馥郁たる香りは四周に漂ひ、軍旗ははたくと翻り、馬は足並揃へ

て歩を進めると言ふ工合で、やがて宮殿の門に着きましたが、小姓達はその儘後宮の入口まで昇床を昇ぎ入れました。其立派なことは宮殿を輝かし、其裝飾物の光彩は四邊の壁に照り渡りました。其夜宦官どもは奥殿の入口を開いて、大玄關の前にずらりと並んで居りました。花嫁は轎から出て、女奴隷どもに取り圍まれながら、恰度數多の星の中の月のやうに、又は小粒の眞珠を繋いだ紐の中に一つ目の立つ大粒の眞珠があるやうに、しづくと進まれました。そして、宛てがはれた部屋の中に這入られました。そこには眞珠や寶石を鑲めた雪花石膏の臺座が彼女のために設へて御座いました。彼女はそれに座を占めました。其時國王は彼女を訪ねに出て來られました。神は彼の心を彼女に對する愛の焰で燃やして下さいましたので、彼はもうすつかり不安を取り除かれて、落ち着いた氣分になりました。

彼は約一箇月の間、彼女の傍を離れませんでした。それから漸く出て玉座に坐りながら、人民のために正しい裁斷を行ふやうになりました。かうして第九箇月目の終つた朝の夜明近く、彼の妻は見るからに神々しい眉目貌を備へた男の子を生みました。國王はそれを聞くと限りなく喜んで、この吉報を齎した者に多額の金子をお與へになりました。そして、嬉しさに生れた子供の許へ飛んで行かれましたが、其優れた美しさに驚嘆の眼を睜りながら、子どもの眼と眼との間に接吻されました。産婆は子供を抱き上げて、眼瞼の縁をコールで黒く染めました。そして、人々は、ター・ジェル・ムルト

グ・カーラーンと命名いたしました。彼は惑溺の胸に抱かれ、繁榮の膝に載せられて養育されました。月日は経つて七歳の年齢に達しました。其時スレイマーン・シャー王は學者、科學者を召し寄せ、自分の子息に、書き方や、科學や、雅文學やを、教授するやうに命ぜられました。で、その通りにして數年間續けた結果、彼は必要な事を凡て習得いたしました。國王は彼が自分の望み通りに凡て習ひ終へたと聞いた時、學者や先生方の許から彼を呼び寄せて、今度は騎馬術を習ふために一人の教師を雇つてやりました。で、その教師は彼が十四歳になるまで教へ續けました。で、この青年が何か用事があつて何處かへ出懸けますと、見る人毎に其美しさに見惚れ、中にはそれを讚美するために詩を作つた者もあつた程で御座いました。信心深い婦人ですら、彼が天から受けた、並外れた美しさを見ては、戀しさ慕はしさに夢中になる程で御座いました。で、彼が十八歳になつた時、紅い頬の上にある一つの黒白に白い椽毛が生え出しました。もう一つの黒子は龍涎香の小粒のやうに一層の愛嬌を其美しさに添へて、見る人の心や眼を惹き附けました。成人するに連れて、彼の麗しさは、いよく増して來ました。彼は友人や伴侶を澤山持つて居りましたが彼に接近する程の者は、誰も彼も、彼がお父さんの死後帝王の位に登つたら、自分は其の侍従の一人にして貰ひたいと、望まないものはありませんでした。

さて、ター・ジェル・ムルークは狩獵に耽けるやうになりました。そして、只の一時時間もそれを忘

れて居られませんでした。所が、父なる國王は彼のために荒野や野獸の危険を恐れて、常にそれを嚴禁して居りました。が、彼は其警めに従ひませんでした。そして、或日其従者どもに向つて、十日間の食料を用意せよと申し附けました。で、彼等は其吩咐通りいたしました。彼は隨従の者と一緒に狩獵に出懸けて、荒野を横切りながら、四日の間、只管進んで參りました。そして、到當草木の生えた地方へ出て來ましたが、そこには、野獸が、其方此方群をなして、樹々には熟した果物が生り、泉からは水が噴き出てあるので御座いました。で、彼は隨従の者に向つて、「此處に網を張れ、そして、出来るだけ廣く張り周してくれ。俺達は周圍の一方の端にある、かういふ言ふ所へ集まるやうにしよう。」と申しました。で、彼等は吩咐通り網を張つて、出来るだけ其周圍を擴げました。で、其中には種々様々な野獸や羚羊が澤山に取り込められ、野獸は人間を恐れて大聲に吼え立てながら、網から遁れようと、彼等の乗つて馬を目がけて飛びかゝりました。そこで彼は犬や山猫や鷹を喉けました。人々は又箭で射つたり、急所を刺したりして、一同圓周の外れにある命令の場所に集つた時には、野獸の打たれたものは非常の數で御座いました。殘餘のものは遁げ延びてしまひました。ター・ジェル・ムルークは或水際で馬から降りて、取つた獲物を悉く自分の前に持つて來させながらそれら分配いたしました。即ち最上の獸は父君スレイマーン・シャーに充てて、早速それを獻上するため使者を派しました。又朝廷の役人どもにも幾分を頒けて與りました。

其夜は其處に過しました。朝になると、黒奴や召使や商人どもを含む、大きな隊商が彼等の近くへ遣つて参りました。其隊商は草木の生えた水際の地に足を駐めました。ター・ジェル・ムルクは彼等に氣が着くと、その伴侶の一人に言ひました。「あの連中は何者であるか、又何故此處に足を駐めたか、一つ様子を調べて来てくれ。」で、使者は彼等の許へ行つて、「お前達は何者であるか、直様返答せよ。」と申しました。すると、彼等はそれに答へました。「私どもは商人で、少し休息したいと思つて此處に足を駐めたので御座います。この次の立場は遠う御座いますからね。私どもは、スレイマーン・シアール王と其御子息様の御保護の下にさへあれば安穩だと思つて、此處に足を駐めた次第で御座ります。と申すのは、あの方の御領地内に足を駐めたものは何人でも無事安穩であることを好く存じて居るからで御座いますよ。それに私どもは御子息様のター・ジェル・ムルク様のために高貴な品を持参して居りますよ。」で、使者は王の子息の許へ引き返して、商人から聞いた通りを其儘申し上げました。すると、王子は申しました。「あの連中が俺のために何か持参したと言ふなら、俺はあの連中の持つて来た物を自分の前で披げさせぬうちは、二たび都へも歸らなければ、又此處から動きもしない積りだよ。」——そこで彼は馬に乗つて、侍者どもを後へに従へながら、隊商の近くへ進んで行きました。すると、商賈どもは立上つて彼を迎へながら、彼のために、神の冥助と恩寵を求め、彼の光榮と優越との永久に續かんことを冀ふ祈禱で以て彼に挨拶をいたしました。そして、彼のた

めに眞珠と寶玉を縫箔した赤い繻子の天幕を張つて、絹布の敷物の上に、更に又其端に綠柱石を附けた國王の敷物を重ねました。ター・ジェル・ムルクがその上に坐ると、侍者どもは彼の側に侍立しました。それから彼は商賈どもに使者を送つて、携へて来た品物を悉く出して見せるやうに傳へました。で、商賈どもはそれ／＼商品を抱へて、彼の前に遣つて参りました。彼はそれを残らず自分の前に並べさせて、氣に入つた品は取り上げて、其代價を拂ひました。それから彼は馬に乗つて、此處を引き上げようといはしました。その時、不圖隊商の方を見遣りながら、一人の若者に眼を留めました。此男は小ざつぱりした服装をして、人柄も優雅な、輝く額と晴晴しい顔附きをした、綺麗な若者で御座いました。が、此若者は愛の對象から遠ざかつたために、其美しくしさには何となく影が射して、顔色は蒼白う御座いました。彼の悲嘆と呻吟とは非常なもので、眼から溢れ落つる涙と共に、次のやうな詩句を誦しました。——

われ等が別離の長引きて、不安と恐怖はなほ續く、涙はわが眼より、お、わが友よ、流れ
て已まず。
別れの日われはわが心にも、さらばと別れを告げれば、今やわれはたゞ一人あり、心も
持たず。望みも持たず。

お、わが友よ、少時待ちて、彼女にわかれを告げさせよ。彼女の聲は病も病弱も癒しくるれば。

かう言つて、彼は少時泣いて居りましたが、其儘氣を失つて倒れてしまひました。ター・ジェル・ムルークは何うした譯かと怪しみながら、其男を見詰めて居りました。やがて其男は正氣に返つて大膽な眼附きでちつと見返してゐましたが、二たびある詩句を誦しました。それは次のやうな句で始まつて居りました。――

あの女の眼に氣を付けよ、そはまどはしなるが故に、その眼を投げられたるもの、一人として遁るゝ能はず。

それから彼は大きな溜息を吐いて、又氣を失つてしまひました。ター・ジェル・ムルークはかうした相手の様子を見て、いよく思惑ひながら、彼の方へ近附いて行きました。彼は其發作から回復するや否や、國王の子息が自分の頭の上に立つてゐるのに氣が附きました。で、彼は立ち上つて、彼の前の地面に接吻いたしました。ター・ジェル・ムルークは彼に言ひました。「お前は一體何うして俺達に

品物を見せないのだ？」「お、わが君よ。」と、彼は答へました。「私の商品は逆も貴方様のお目に掛けるやうな品物では御座りませぬ。」が、王子は申しました。「でも、持つてゐる物は是非とも見せてくれなければ不可ないよ。そして、お前の事情を話して聞かせるがい。お前は眼を泣き腫らして、只管思ひ悩んでゐるやうだからね。何か苛い目に遇はされてゐるのなら、俺達が其苦しみを取り除いて上げよう。又借財に困つてゐるのなら、其片を附けて上げようぢやないか。俺はお前を一目見た時から、お前の様子が氣にかゝつて堪らなくなつたのだからね。」

それからター・ジェル・ムルークは椅子を持つて来るやうに吩咐けました。で、人々は金銀の網目細工の裝飾を施した象牙と烏木の椅子を彼のために其處へ据ゑました。又、其若者のためには絹の敷物を敷いてやりました。ター・ジェル・ムルークは自ら椅子の上に腰掛けて、若者には敷物の上に坐るやうに命じながら申しました。「お前の品物を私に披げて見せるが可い。」若者は答へました。「お、わが君よ、何卒左様に仰有らないで下さいませ、私の品物は逆も貴方方には相應しくないものばかりで御座いますから。」が、ター・ジェル・ムルークは彼に申しました。「いや、是非とも見せなければ不可ないよ。」そして、自分の小姓にそれを持つて来るやうに命じました。で、彼が辭退するものばかではないで、それを持つて來ました。若者はそれを見ると、涙を流して歎き、溜息を吐いて悲しみました。そして、呻き聲が咽喉から絞られるやうに出てまゐりました。そして、又何か詩句を繰り返し

た後で、商品を開いて、ター・ジェル・ムルークの前に、しかも、少しづつ、又、一品づつ、順々に、それを披げて見せました。そして、其品々の間から、黄金の二千片も値ひするやうな、金の織り込である縞子の衣物を取り出しました。彼がそれを披けると、中から一切れのリネンがばらりと落ちました。若者は手早くそれを攫み取つて、膝の下に入れました。彼の理性は亂れて、次のやうに叫びました。

何日の日、わが想ひに悩む胸は君によりて癒されむ。七曜の星座は君よりもわれにより近くあるものを！

ター・ジェル・ムルークはこの言葉を聞いて、其理由を知らないために、痛く驚き怪しみました。そして、若者があの一片のリネンを取つて膝の下に入れた時、彼に申しました。「そのリネンの布片は何うしたのだ？」彼は答へました。「お、わが君よ、貴方様にとつては、これは何でもない物で御座います。」が、王子は「兎に角俺にそれを見せてくれ。」と申しました。「お、わが君よ、」と、彼は答へました。「この布片さへなければ、私は自分の品物をお目に懸けることを躊躇はいたしませんのでした。これだけは何卒お目に懸けることをお免し下さいませ。」所が、ター・ジェル・ムルークは

「いや、見なければ承知しないよ。」と、きつぱり言ひました。そして、彼に迫りました。しまひには腹を立て、しまひました。で、若者は據なく膝の下からそれを取り出しました。そして、溜息を吐きながら、悲歎に暮れて居りました。所で、ター・ジェル・ムルークは彼に申しました。「どうもお前の行動は怪しいぞ。さ、そのリネンの布片を見て泣く理由を話して聞かせるが可い。」若者はリネンの布片と言はれたのを聞いて、二たび溜息を吐いて申しました。「お、わが君よ、私の物語と言ふのは不思議なもので御座います。このリネンとこれを所持してゐた女と、これ等の繪模様や象徴を工夫した女とに絡はつた私の話はいかにも奇怪なもので御座います。」それから彼はリネンの布片を披げました。すると、見よ、それには銀で染めて、赤金で縫箔した一疋の羚羊の形像が描いてありました。そして、それと相對してもう一疋の銀で色彩つた羚羊がありました。其頸には、赤金と三個の橄欖石の長圓形の珠の環が結び着けて御座いました。ター・ジェル・ムルークはこれを眼にした時、其細工の美しさをつくつく見遣りながら、叫びました。「人の知らざることを人間に教へたもうた神の完全性は讃へられてあれ。」そして、彼の心はこの若者の物語を聞きたい欲望で一杯になりました。で、彼は若者に言ひました。「では、お前の身の上や、この羚羊の持主であつた女のことを俺に物語つて聞かせてくれ。」そこで若者は次のやうに答へました。

アジーズとアジーズエの物語

お、わが君よ、私の父親は商賈で御座いました。で、私の外には一人も子供を恵まれませんでした。所が、私には一人の従妹（父方の伯父の娘）が御座いました。私はその娘と一緒に父の家で育てられたので御座います。と申すのは、彼女の父親が亡くなりましたからで、彼女の父親は、生前私の父と相談して、私と彼女を配合はせることに定めて置いたので御座います。で、私も一人前の男になり、又彼女も一人前の女になりました時、親達は私から彼女を引き離すことも、又彼女から私を引き離すこともいたしませんでした。で、私の父は私の母に話しをして、かう申しました。「今年は、アジーズとアジーズエの結婚契約を執り行はうよ。」そして、母親とこの相談をしてから、父はその時の饗宴のためにさまざまな食料の用意を始めました。

凡てこれ等の事は、私と従妹とがそんな事とも知らないで、お互に少しの遠慮もなく一緒に遊び暮らしてゐる間に取り極められたので御座います。そして、従妹は私よりも剛功で、気が利いて居りました。私の父は、その祝ひの支度萬端調へて、残餘はもう結婚契約を執行つて私と従妹とを配合せるばかりになりました時、初めて金曜日の祈禱が済んだらその誓約をしようと言ひ出しました。それから父は友達や、商賈仲間や、その他の人達の許へ行つて、その意圖を知らせました。母も

亦自分の友人や親類の者を招待しました。で、いよく金曜日になりますと、お客様に宛てた廣間の掃除をしました。そして大理石の床石を洗ひ出したり、家中に絨緞を敷詰めたり、又部屋の壁は金糸を織り込んだ布帛で裝飾したりして、いろいろ必要なものを備へ附けました。人々は金曜日の祈禱が済むと、私どもの家族へお祝ひの挨拶をしに来ることになつてゐました。父は砂糖漬の果物やその他甘味の物を用意させて置きました。で、すつかり支度が出来て、残餘はただ契約の式へ行へばいいことになりました。母は私を浴場へ遣はしました。そして、その後から素晴らしく立派な新しい衣裳を私の許へ届けて寄越しました。で、私は風呂から出て、香水を振り撒いたその美しい衣服を身に着けました。それを着ると、好い香りが發散して、途上に漂ひました。

私はこれからお寺へ出懸けようと思ひました。所が、不圖ある友達の事を想ひ出したので、契約の儀式には、彼にも参列して貰はうと思つて、その男を捜しに歸りました。そして、心の中に思ひました。「なに、祈禱の時間の近づくまでは、かうして奔走してゐても可いだらうよ。」それから私は今まで来たことのない横町へ這入りました。風呂から上つたばかりの所へ持つて来て、衣裳が新しいために、私は身體中だく／＼汗を掻きました。で、一休みしようと思つて、その町の突き當りに、持つて来た縫箔のした半帛を尻の下に敷いて腰を掛けました。もう熱くて／＼堪らなくなりました。そして、額の汗がぼた／＼頬を流れ落ちました。が、半帛を下に敷いてしまつたので汗を拭くことが

出来ませんでした。仕方がないから、フアラジーエの裾で拭かうと思つて、それを取り上げる途端に不意に上から眞白な半帛が私の前へ落ちて来たので御座いますよ。その半帛は微風よりもつと肌觸りが柔雅で、病人も本復しさうな程、見て氣持の好いもので御座いました。で、それを手に取つたまゝ、何處からそれが落ちて来たのかと、頭を擡げて見ると、この羚羊の持主なる婦人とぼつたり眼を見合はせました。で、見よ。彼女は眞鍮の窓格子から戸外を眺めてゐたので御座います。私はそれまでこれほど可愛らしい女を見たことが御座いませんでした。眞個、彼女の人を惹き附ける魅力は逆も言葉では言ひ盡せない位で御座いますよ。私とその女を見てゐることが分ると、彼女は口を指を當て、それから中指と人指指とを組んで自分の胸に押し當てました。そして、窓から首を引込めて、格子を閉めてしまひました。火が私の胸を貫いて、其焔はどん／＼燃え熾つて行きました。一目見た女の姿は百千度私の胸から溜息を吐かせました。私は何うして可いやら途方に暮れました。と申すのは、彼女は私に一語もものを言はず、その手眞似は何の意味やら分らなかつたからで御座います。私は又窓を見上げました。が、それはびたりと閉まつてゐました。私はその儘、日暮れまで待つて居りました。が、何の物音もしなければ、誰一人出て来ないのですよ。私はもう再び彼女を見ることは出来ないものと諦めて、腰掛けから立ち上つて、拾つた半帛を持つて歸ることにいたしました。で、それを開けて見ると、麝香の匂ひが馥郁として、樂園にでも迷ひ込んだやう

に、私は心から恍惚としてしまひました。それから眼の前にそれを披げて見ました。すると、その中から綺麗な紙片がひら／＼と落ちました。で、それを開けて見ると、非常に結構な香りを籠めて、次のやうな詩句が認めて御座いました。――

わが情熱の惱みを訴へんとて、われはこの玉章を送りぬ、
繊細き書き振りをもち、(世に書き方は數あれど)
わが戀人は問ひぬ、おん身の書き方はいかにしてかく繊細く、
小さきぞ。中々に讀み分け難き程に。
われは答へぬ、われは瘦せさらばへて、ほそ／＼と身も細ればなり、
戀人の書き方はかくあるべきやうに。

それから私は又改めて半帛の美しさをつく／＼見遣りながら、その兩端に、同じやうに一つ戀歌が縫ひ取つてあるのを見ました。
半帛の上のそれ等の詩句を見ると、私の胸は二たび火焰に射抜かれて、
遺瀨のない慾望が募ると共に、心はいよ／＼亂れに亂れました。私はその半帛と紙片とを持つたまゝ、
何うしたら自分の望

むものが手に入れられるのか、如何にしたら我が戀の道を都合よく進んで行かれるか、それさへ分らなくて、とぼくと自宅へ歸つて参りました。で、自宅へ着いた頃は、夜も大分更けておりました。そして、従妹は泣きながら私が歸るのを待つておりました。が、私を見ると、涙を拭つて、私の側へ來ながら、着てある外衣を脱がせました。そして、私の不在にした理由を訊ねました。彼女はまた貴族達や大官連や、商賈達や、その他大勢の人々が私どもの家に集まつた上に、司法官や證人も遣つて來て、一緒に御馳走を食べながら、結婚誓約式を執行ふために、随分長く私の歸宅を待つてゐられたが、何時まで待つても私が戻つて來ないので、それと歸つてしまはれたと話して聞かせました。「貴方の阿父さんは」と、彼女は申しました。「こんな事になつたのを大層御立腹になつて、もう來年まで私達の結婚誓約の式は斷じて擧げないと仰いましたよ。このお祝ひのために大したお金子をお費消ひなすつたさうですからね。」それから彼女は附け加へて申しました。「今時分までお歸りの遅くなるやうな、そして、貴方のお留守のためにこんな事が起るやうになるやうな、何んな事が今日あつたので御座いますか。」

私は、かくくの事が私の身に起つたのだと答へました。そして、半帛の事を持ち出して、一切の事柄を彼女に語つて聞かせました。彼女はその紙片と半帛とを取り上げて、その上に書いてある文句を読みました。そして、涙が頬から流れ傳はりました。それから、彼女は私に尋ねました。「そ

の女は貴方に何と申しました？　そして、何と思つて貴方にそんな手振りをしたので御座いませうね？」私は答へました。「その女は一語もものを言はないんだよ。だが、口に指を當て、それに中指を合せて胸に當てた。そして、地面を指したのだよ。それから頭を引つ込ませて、格子を閉めてしまつた。それつ切り私はその人を見ないんだ。彼女は私の心を奪つて行つた。で、私はもう一度格子の間から覗いてくればはしないかと、心待ちに待ちながら、日が暮れるまで腰掛けてゐたんだよ。だが、その女はもう覗かなかつた。で、私は二たび會ふことの出來ないのに失望しながら、漸く其處から立ち上つた。これが私の物語だよ。お願ひだから、何卒私の捲き込まれた惱みの中から私を助け出してほしい。」——それを聞くと、彼女は私の方へ頭を擡げて申しました。「お、わが伯父上の息子よ、貴方に私の眼がお入用なら、私は貴方のために、自分の眼瞼の下からそれを抜き出して差し上げますよ。私は是非とも貴方のお望みが適ふやうにお助け申しますわ。同様にその方もお助け申しますわ。その方は屹度貴方を戀して苦しんでいらつしやる人ですよ、恰度貴方がその方のため苦しんでいらつしやるのと同じやうに。」——「そして」と、私は申しました。「あの女の見せた手振りは何ういふ意味があるだらうね？」——「口へ指を當てたのは」と、彼女はこれに答へました。「その方が貴方のことを大切に思つていらつしやると言ふことなんですよ——恰度精神が肉體に取つて大切であるやうに！　そして、貴方と一緒にになりたいと言ふことなんですよ。それから半帛

は戀人が愛する者に對する挨拶の印で、紙片はその方が魂を貴方に囚虜にされてしまつたと言ふ意味です。最後に胸に指を當てたのは、二日経つたら来て下さい、私の苦しみは貴方のお顔を見れば消えてしまひますとでも言ひたいところで御座いませうよ。で、ねえ、わが伯父上の子息よ、その方は貴方を愛し、貴方に信頼していらつしやるのですよ。これが、その手振りに對する私の解釋で御座いますわ。私が隨意に外出が出来ますれば、直ぐにも貴方とその方と一緒にされるやうに計らつて、私の裾で貴方がたお二人を保護して上げるので御座いますかね。——私は彼女がかう言ふのを聞いて、その言葉に對して厚く禮を述べました。そして、心の中では、兎に角二日の間待つてゐようと獨語を言つてゐました。で、それから二日の間と言ふもの、私は何處へも行かず、食べも飲みもしないで、從妹の膝を枕にして寝てばかりゐました。從妹はいろんな會話をして私を元氣づけてくれました。で、私に申しました。「確りして、元氣を出していらつしやいよ。そして、着物を着換へて、約束の時間にはあの方の許へ行つていらつしやいな。」彼女は立ち上つて、私に着物を換へさせながら、その上から香水を振り撒けてくれました。

これから私は氣を引き立て、心を引き締めながら出掛けました。そして、だんく行つて、例の横町に這入りました。少時マスターバーの上に腰を掛けて居りますと、見よ、格子戸が開きました。私は乙女の方を見上げました。そして、彼女が眼に留まつた時、氣を失つて倒れてしまひました。

それから正氣に返つて、勇氣を奮ひ、氣を取り直して、更に彼女を見遣りました。が、私は又も氣が遠くなつてしまひました。そして、正氣に返つた時、彼女が鏡と紅色の半帛を手にしてゐるのを見掛けました。所で、彼女は私を見て、二の腕まで袖をたくし上げながら、五本の指を開いたまゝ、その手で自分の胸を叩きました。それから手を上げて、格子戸の間から鏡を高く差し出しながら、紅色の半帛を持つて、その儘引つ込みました。それから又戻つて来て、格子戸の間から上げたり下げたりしながら、三度それを街の上へ垂らししました。それから手に持つて、それを絞つたり、扭ぢつたりして、頭を下に曲げました。それから又それを格子戸の間から引つ込ませて、その格子戸を閉めて行つてしまひました。私は相手が一語も物言はないので、何を暗示してゐるのやら分らず、たゞ途方に暮れて居りました。私は日が暮れるまでそこにぢつとして居りました。そして眞夜半近くにやつと自宅へ歸りました。私は從妹が顔に手を當てて、眼瞼から涙を流してゐるのを見ました。で、いよく心配と苦勞とが募つて、部屋隅に泣き倒れてしまひました。すると、彼女は私の側へ飛んで来て、私を抱き起しながら、上衣を脱がせて、自分の袖で私の顔を拭いてくれました。そして、何うしたのかと

私に訊ねました。で、私はその乙女の上に起つた一伍一什を話しました。彼女は私に申しました。「お、わが伯父上の子息よ。その方の五本の指の手振りには、かう言ふ意味で御座いますよ。五日経つたら此處へいらつしやい。——又鏡のことは、又格子の間から頭を差し出したのは、（それと紅色の半帛を持つての身振りは）かう言ふので御座いますよ。私の使者が行くまで、染物屋の店に坐つて待つていらつしやい。」——私は彼女の言葉を聞くと、又もや胸の中に炎が燃え上りました。そして、彼女に答へました。「大神にかけて、お、伯父の娘よ、お前の解釋は當つてゐるよ。と言ふのは、あの横町で猶太人の染物屋を見ましたもの。」それから、私は泣きました。すると、従妹は申しました。「まあ睨りして、氣を確かに持つていらつしやい。だつて、他の者は戀のためには幾年もの長い間切ない情熱と戦つてゐるんですものね。貴方は唯一週間辛抱すれば可いのぢやありませんか。何うしてそれ位の辛抱が出来ないのです？」それから彼女は私に元氣を附けるためにいろいろ會話をしたり、食物を持つて來たりいたしました。が、私は飲んだり食べたりもいたしませんし、睡眠の楽しみも棄て、しまひましたので、顔色が蒼白なつて、私の相好は變り果て、しまひました。何しろ、私はそれまで戀をしたことがなく、その情熱の烈しさを味はつたこともないのでしたからね。私は病氣になりました。所が、従妹もそれを見て又病氣になつたので御座います。彼女は一生懸命私に元氣を附けようと思つて、昔からの戀人の惱みを數々物語つて聞かせてくれました。

で、私はそれを聞きながら眠つてしまひました。私は眼を覺ますたびに、毎も彼女が私を案じて一睡りもしないで、頬に涙を傳はらせてゐるのを見ました。かうして五日間経つと、彼女はお湯を沸かして、私に沐浴をさせた上、新しい着物を被せてくれました。そして、申しました。「あの方の許へ行つていらつしやい。大神は貴方のお望みを適へて、貴方が愛人に望んでいらつしやることをお許し下さいませうよ。」

そこで私は出懸けました。そして、例の横町の外れまで參りました。この日は十時目で御座いました。で、染物屋の店は閉まつて居りました。私は午後の祈禱の時間までそこに坐つて居りました。太陽は黄色くなりました。夕べの祈禱に喚ぶ歌が唄はれました。夜になりました。私は彼女の影も見なければ、聲も聞かない。勿論使者も受けませんでした。で、獨り淋しく坐りながら、何だか自分の身が怖しくなりました。で、立ち上つて、ふらふらと醉漢のやうに道を歩きながら家に歸りました。

自家へ這入つて見ると、従妹は壁に打ち込んだ折釘に片手を懸けたまゝ、片手は胸に當て、うん呻いたり、詩句を吟誦したりして居りました。そして、その吟誦を終ると、こちらを向いて、私を見ました。それから自分の涙を拂ひ、又私のも拭いてくれました。そして、私の顔を見てにつこと笑ひながら申しました。「お、わが伯父上の息子よ、大神はその與へたまうた楽しみを貴方

にお許し下さいました！ 今晚あの方にお遇ひなされたので御座いますか。——私は彼女の言葉を聞いた時、思はずその胸を足蹴にして遣りました。彼女は一段高くなつた床の上に倒れましたが、そこに出てゐた釘で額に負傷をいたしました。見ると、額に口が開いて、そこから血が流れて居りました。然も彼女は押黙つたまゝ、うんともすんとも申しませんでした。が、直様、起き上つて、襪の引火奴を焼いて、それで傷口を壓へ付けた上、ぐる／＼頭に繻帯を巻き付けました。そして、敷物の上に流れた血の始末をいたしました。で、そんな事件は起らなかつたやうに綺麗に片付けました。それから彼女は私の側へ遣つて来て、私の顔を見てにつこと笑ひながら、優しい聲で私に申しました。「大神にかけて、おゝ、わが伯父上の子息よ、先刻のやうに申しましたとて、私は何も貴方やあの方を冷嘲す積りでは御座いせんよ。只今は頭の痛みと出血の跡始末とで落ち着かないで居ましたが、もうその痛みも額の痛みも大分快くなりました。ですから、今日何んな事がありでしたか話して聞かせて下さいな。」——で、私はその日乙女のために自分の上に振り濯つて来たことを彼女に語つて聞かせました。そして、私は泣きました。所が、彼女は私に申しました。「お喜びなさいませ、貴方のお望みの適ふ吉報で御座いますよ。眞個それは承知したと言ふ記號で御座いますよ。と言ふのは、あの方は貴方を試して見たいので、わざと貴方を外してゐたのですからね——貴方が辛抱強い方か何うか、眞心からあの方を戀していらつしやるか何うか、それを知りたいばかりに！ 明日

あの方の許へいらつしやいな。そして、最初の場所へ行つて待つてゐて、何んな合圖をするか見ていらつしやいな。何しろ貴方の幸福は近づいて、悲しみは何處かへ消え去つてしまふので御座いませうからね。」——それから彼女はいろ／＼私を慰めてくれました。が、私の心配は増すばかりで、どうも悲しくてなりません。で、彼女は私の前に食物を持って来てくれましたが、私はそれを足蹴にしてしまひました。お皿に盛つた物は溢れて四邊に散らかりました。私は申しました。「誰だつて戀をしてゐる者は正氣ぢやないんだ。食物も欲しくなければ、睡眠を樂しまうとも思はないのだよ。」——「大神にかけて、おゝ、わが伯父上の子息よ。」と、従妹のアジーゼエは叫びました。「眞個それが戀の徴候で御座いますよ。」そして、涙を流しながら、溢れた物を拾つたり、汗を掛けられた足を拭いたりして、私の側に坐つて、何彼と饒舌つて居りました。その間、私はたゞ何卒早く朝にして下さいませと神に祈つて居りました。

で、朝になつて、太陽の光が四方に發散した時、私はその乙女の許へ出懸けました。そして、大急ぎで例の横町へ這入つて、前に言つた床几に腰掛けて居りました。すると、見よ、窓が開いて、彼女は笑ひながら首を突き出しました。それから又引つ込んで、鏡と囊と青々した植木の鉢とを持って戻つて参りました。その外になほ洋燈も持つてゐました。で、最初に彼女はこんな事をしたので御座います。即ち鏡を取つて囊に入れました。それから囊の口を閉めて部屋の中に抛り出しました。その

後で髪を解いて顔の上に垂らしながら、一寸の間、青々した植木の頂邊に洋燈を載せました。それからそれ等の物を悉皆一緒に持つて、格子戸を閉めて行つてしまひました。私の心は彼女の秘密の合圖と暗示によつて張り裂けるばかりで御座いました。と申すのは、彼女は私に一語も物を言はないので御座いますからね。私の情熱は彌が上に募つて、心はいよ／＼亂れるばかりで御座いました。私は泣き／＼悲しい胸を抱いて、元來た道を引返しました。そして家に着きました。すると、徒妹は壁の方を向いて坐つて居りました。彼女の胸は心配と悲嘆と嫉妬とに燃えてゐたので御座います。が、私の烈しい戀と亂心の様子を見ると、彼女は私を想ふ心から自分の感情は一切私に知らさないやうにしました。私は再び相手を見遣りながら、彼女が二つの繃帶をして居るのに眼を留めました。一つは前額に出來た傷のためで、一つは餘り苛く泣いて眼が疼むので、それで繃帶してゐるので御座いました。實際、彼女は可憐しい様子をして泣いて居りました。そして、次のやうな詩句を誦しました。――

君よ、何處にありとも、健やかにまませや、お、われより離れ行きし人よ、されどわが心に住める人よ。

何處に行くとも、願はくば神君の近くに在して、災禍より、不幸よりおん身を救ひたまは

むことを――

君は行けり、わが眼は君の在さぬために元氣を失ひ、わが涙は絶えず溢れ落つ――お、如何に夥しく溢れ落つるよ。

彼女はその誦讀を終ると、私の方を振り向いて、泣きながら私を見ました。そして、涙を拭つてから、私を出迎へました。が、烈しい戀に捕はれて、口が利けないのか、少時の間黙つて立つて居りました。それから私に向つて言ひました。「お、わが伯父上の子息よ、あの方のために、今度は何んな事を經驗していらつしやいませましたか、それを聞かして下さいませ。」で、私は自分の身に起つたことをすつかり彼女に話して聞かせました。すると、彼女は私に申しました。「まあ辛抱していらつしやい。貴方がたの御一緒になる時は近づいたのですよ。貴方はもう御自分の目的を達していらつしやると言つても可い位なんです。さうして鏡を持つたり、それを囊に入れたりして、貴方に見せた合圖は日が暮れるまで待てと言ふことなのです。髪を自分の顔の上に垂らしたのは、貴方にかう言ふ積りなのですよ、夜になつたら、その陰影が萬物を蔽ひ隠したら、もう一度此處へいらつしやいと。又植木鉢でした合圖は、かう言ふ意味なのです。いらしつたら、横町の裏側の花園にお這入りなさい。洋燈は、花園に這入つたら、洋燈の點いてゐる處までいらして、その下に坐つて私を

待つて、下さい。私は貴方が戀しくて死にさうですよ、かう言ふ積りなので御座いますよ。」私は従妹からそれ等の言葉を聞いた時、餘りに情熱の烈しさに大きな聲で嘯鳴りました。「お前は何度私に約束するんだい？ 何度あの女の許へ行つても、私はまだ自分の欲望も遂げなければ、お前の説明が眞實になつたことも知らないぢやないか。」これを聞くと、従妹は笑つて答へました。「今日一日だけ日が暮れるまで辛抱していらつしやれば可いのですよ。夜が來て、暗闇にさへなれば、貴方はあの方と一緒になつて、いよくお望みが適ふのですからね。私の申すことは微塵も偽りのない、眞實で御座いますよ。」それから私の身近く寄つて、言葉優しく慰めてくれました。が、又私に怒られてはと思つて、それが怖さに決して食物を持つて來ようとは致しませんでした。そして、私が何うか自分に優しくしてくれるやうにと、そればかり祈つてゐるので御座います。で、たゞ私の側へ來て、私の外衣を脱がせてくれました。そして、私に申しました。「お、わが伯父上の子息よ、日が暮れるまで貴方の氣散じにお話しをして上げますから、私の側に坐つていらつしやい。それが神様の思召しであるなら、今晚はもう貴方はその愛人と會はずに過すやうなことは御座いませんよ。」が、私は彼女のことなぞ少しも構ひ附けないで、只管夜になるのを待ち焦れながら、「お、大神よ、何卒早く夜にして下さいませ！」と言ひ續けて居りました。夜になると、従妹は烈しく泣きました。そして、純粹の麝香を一粒私に呉れて申しました。「お、わが伯父上の子息よ、この粒を口に入れ

ていらつしやい。そして、あの方にお遇ひになつて、あの方が貴方のお望み通りに承知なすつたら、この詩を唄つて聞かせてお上げなさい。——

お、おん身等戀人よ、大神にかけてわれに告げよ、その戀の烈しくなり増れる時、乙女はいかに振舞ふべきかを。

それから彼女は私に接吻して、私がこの乙女の側を離れるまでは、斷じてこの詩を口にして欲しくないと言ひました。私はその通りにしようと言へました。私は日暮れに出懸けて、花園まで參りました。その門は開いて居りました。そして、中に這入ると遙か向うに燈火の點火いてゐるのが見えました。で、そちらへ進んで參りますと、其處には廣いマカドが御座いまして、天井は象牙と烏木の球蓋になつて居りました。そして、洋燈がその球蓋の眞中に吊してありました。このマカドには金や銀で縫箔をした絹絨緞が敷き詰めてありました。そして、洋燈の下には黄金の燭臺に大きな蠟燭が點火つて居りました。部屋の眞中には、その裝飾にさまざまの工夫を凝らした噴泉が御座いました。噴泉の傍には食卓があつて、絹の食布を被けた食物が載せて御座いました。そして、酒が一杯入つてゐる大きな陶器に、鍍金で裝飾した水晶の洋盃が添へて

ありました。又その傍には大きな銀の盆があつて、その上から食布がかけて御座いました。私はその覆布を取り除けて見ました。盆の上には、苺や梨果や、葡萄や蜜柑、いろ／＼な種類のシトロンなど、さまざまな果物が、薔薇や、素馨や、桃金娘や、野薔薇や、水仙や、ありとある香氣の高い花物と一緒に盛つてありました。私はこの立派な場所を見て驚嘆しました。そして、限りない歡喜の情に打たれると共に、私の心配も悲しみも何處かへ飛んで行つてしまひました。が、私はこの家の中に神（あゝ神の御名は讀へられてあれ）の創造物なる人間を一人も見出しませんでした。男奴隷も見えなければ、女奴隷も見えない。そして、こんなにいる／＼の物が打捨り放しにしてあるので御座いました。で、私はその部屋に坐つて、心の中に愛する者の這入つて来るのを待つて居りました。そのうちに夜の一時間目が過ぎ、二時間目も、三時間目も経ちました。併し彼女は出て参りませんでした。私は烈しい空腹に苦しめられました。何しろ長い間、過度の情熱のために、何にも食はずに過してゐたのですから。尤も、私はこの部屋を見てから、なる程、わが愛人の合圖に對する従妹のあの解釋は正しかつたと思つて、安心はいたしました。しかも、依然として空腹には苦しめられてゐました。それに此處に這入つて来ると、それだけでなくとも食卓の上に竝んでゐる食物の美味しうな香りが食欲を唆るのだから堪りません。で、もう的きり自分の目的は達せられるものと安心が着くと、食べたさに夢中になつて、私は食卓に近づいて、その覆布を取り除けました。すると、その

真中には陶器の大皿に、薬味で味を附けた四羽の小鳥が料理して盛つてありました。又その周りには小皿が四枚あつて、その小皿には、それ／＼砂糖菓子だの、梨果の砂糖漬だの、饅頭菓子だのカターイフだのが載せてありました。そして、これ等は皆甘味と酸味とで口に合ふやうに旨く味が附けて御座いました。で、私は先づカターイフを取つて食べました。それから肉を一片、それから饅頭菓子に手を延べて、好い加減それを食べました。それから砂糖漬にかゝつて、一匙、二匙、三匙、四匙と食べ、更に又小鳥を少し許り食べて、だん／＼他の皿のも一口づゝ食べて行きました。これだけ食べると、胃の腑が一杯になつて、そろ／＼節々が緩んで來ました。そして、眼を開けてゐられないほど身體が倦くなりなりました。で、手を洗つて、座褥の上に頭を載せたまま、うと／＼と睡魔に襲はれて、その後は何うなつた事やら少しも知りませんでした。太陽が焼けつくやうになつて、初めて眼を覺ました。しました。（何しろ數日間些しも眠らなかつたのですから）で、眼が覺めて見ると、腹の上に鹽と炭とが少しばかり載せて御座いました。私は立ち上つて、衣服を拂ひながら、四邊を見廻しました。が、誰も居りません。氣が附いて見ると、私は大理石の鋪石の上に何にも敷かず直接に眠つてゐたので御座います。私は心中途方に暮れて、心から情なくなりなりました。涙は頬を傳はつて流れに流れました。

で、仕方がないから、私は家に歸りました。歸つて見ると、従妹は手で自分の胸を打ちながら、

雨雲のやうに散々涙を流して坐つて居りました。併し私を見ると、急いで立ち上つて、涙を拂ひながら言葉靜かに申しました。「お、わが叔父上の子息よ、神様は貴方の情熱に對してお惠深くいらつしやいますよ。貴方の愛しておいでの方は私を愛していらつしやいますものね。だのに私は、私を咎め立てなされる貴方とお別れ申してゐる悲しさに、かうして泣いて居ります。でも、そのために、神様が貴方に罰をお加へになりませんやうに！」そして、腹の立つた人間が無理に笑つたやうな顔付きをして、私の顔を見て微笑しながら、私を愛撫してくれました。それから私の外衣を脱がせて、それを擡げながら申しました。「大神にかけて、これは愛人と一緒にいらした方の匂ひぢや御座いせんね！ 何うなすつたので御座いますか、何卒聞かせて下さいませ、お、わが伯父上の子息よ。」それから私は自分の身に起つたことを残らず話しました。すると、彼女は又怒つたやうな顔に微笑を泛べて申しました。「本當に私の心は一杯で、苦しくてなりません。でも、貴方の心を苦しめるやうな人は生きてゐない方が好う御座いますわ！ この女は貴方に對して随分面倒にしてゐるのですね。大神にかけて、お、わが伯父上の子息よ、この女が何んなことを貴方に對してするか案じられますわ。鹽の意味は、あなたはすつかり寢入つてしまつて、味も素氣もないやうに見える。で、魂が貴方を嫌つても、胃の腑が貴方を排斥しないやうに、鹽漬にする必要があると言ふのですよ。言ひ換へれば、貴方は應揚な戀人のやうな振りをしていらつしやる。だが、睡眠は戀人にとつて

は禁物なのよ。だから貴方が戀してゐると言ふのは見せかけばかりの虚偽だと、かう言ふので御座いますよ。ですが、さう言ふのがあの女の見せかけなのですわ。だつて、貴方が眠つていらつしやるのを見た時、あの女は貴方を起さなかつたぢやありませんか。若し貴方を愛してゐることが眞實なら貴方を起す筈ですわ。それからこの炭はね、かう言ふ積りなのですよ、何卒神様が貴方の顔を黒くして下さいますやうに！ 貴方は戀をしてゐるやうな、好い加減な振りをして、食べたり、飲んだり、睡つたりする外には、一向なんとも思つてぢやないからと、これがあの方の合圖に對する私の解釋で御座いますかね。あ、大神（その名は讚へられてあれよ）があの女から貴方をお救ひ下さいますやうに！——私は彼女のこの言葉を聞いて、自分で自分の胸を打ちながら叫びました。「大神にかけて、それが本當に違ひない。私は、食べたり睡つたりする程、私にとつて有害なものが又とあらうか。あ、飛んだことをしてしまつた。何うしたら可、だらうな？」私はそれから散々泣きました。そして、従妹に申しました。「何うしたら可いか教へて下さい。そして、私を助けて下さい。さうすれば、神様がお前をお助け下さいますよ。でなければ、私は死んじまふだらうからね。」従妹は私を深く愛してゐましたので、これを聞くと、「私の頭と眼にかけて、出来るだけのことは致しますよ。」と答へました。「ですが、お、わが伯父上の子息よ、これまでも幾度かお話ししたやうに、私が自由に外出することが出来さへすれば、貴方をその方に配合せて、私の裾で貴方方お二人を庇護

つて上げることも出来るのですがね。そして、そんなことをしようと言ふのも、たゞ貴方のお氣に入りたい許りで御座いますよ。神様がお許し下さいますなら、私は出来るだけのことをして、貴方方を御一緒に上げてあげますよ。ですがまあ、私の申すことを聞いて私の言ふ通りになさいませぬ。で、毎もと同じ場所へ行つて、そこに坐つていらつしやい。そして、日が暮れたら、前にいらしたその場所に坐つて、何も食べないやうに氣を付けていらつしやいな。食べると思ふなりますからね。今度は何んな事があつても眠つてはいけませんよ。夜の四分の一が過ぎなければ、あの女は出て参りませんからね。で、何卒神様があの女の悪心から貴方を遁れさせて下さいませやうに！——私は彼女の言葉を聞いて、非常に嬉しく思ひました。そして、何うか早く夜にして下さいませと神に祈りました。夜になると私はすぐにも出懸けたいと思ひました。すると従妹は又私に申しました。「あなたにお會ひなすつたら、お歸りがけに、この間申上げた詩句を聞かして上げて下さいよ。」私は答へました。「頭と眼にかけて、屹度承知しましたよ。」

私はいよく家を出て、その花園に参りました。其處には前の時と寸分違はぬ用意がして御座いました。食物と言ひ、飲料と言ひ、乾いた果實と言ひ、香料と言ひ、その他、入用のものは一切取り揃へてありました。例の客間へ這入つて、その食物の匂ひを嗅ぐと、私は又それが欲しくて堪らなくなりました。幾度となく自ら制しては見たもの、たうとう耐へ切れなくなりました。で、立ち上

つて食卓の前に行きながら、そつとその覆布を取り除けて見ました。真中に鳥の料理の大皿盛りがあつて、その周りの小皿には四種の品が盛つて御座いました。私はそれを悉皆一口づゝ食べました。それから砂糖漬を好い程食べて、ザイデエを少し許り飲みました。飲んで見ると箸棒に美味しかったので、匙に一杯づゝ注いで飲みくして、たうとう胃の腑がはち切れる程飲んでしまひました。すると、眼瞼が自然と下つて來ました。で、一寸位横になつたとて睡らずにゐられるだらうと獨り言を言ひながら、枕を取り寄せて頭の下に支ひました。所が、眼を閉ぢると、そのまゝ睡つてしまつて、太陽に照りつけられるまで眼を覺ましませんでした。で、起きて見ると、腹の上に骰子とタープステイックと棗といなごまめの種子が載せてありました。そして、そこには調度品もなければ何もなく、前夜何事もなかつたやうにひつそりかんとして居ました。

私は立ち上つて、そんな物はみんな身から拂ひ落しました。そして、ぶん／＼腹を立てながら、自家に歸つて参りました。自家に着いて見ると、従妹がうん／＼呻つて居りました。私は彼女を嘔鳴りつけて、散々に罵りました。すると、彼女は泣きました。が、涙を拭いて、私の側に寄り添ひながら接吻しました。そして、自分の胸に犄と私を押し付けました。が、私は自分の身を責めながら、彼女から身を退きました。すると、彼女は私に申しました。「お、わが伯父上の子息よ、昨夜も又お眠みになつたやうで御座いますね。」私は答へました。「さうだ、起きたら、腹の上に骰子

とタープステイックと、棗といなごまめとが載つてゐたよ。あの女が何うしてこんなことをしたか、私には分らないね。」それから私は泣きながら、彼女の側に近づいて申しました。「あの女が何うしてこんなことをしたか説明して下さい。そして何うしたら可いのか教へて下さい。何卒こんなに困つてゐる私を助けておくれよ。」彼女は答へました。「頭と眼にかけて、あの女が貴方のお腹の上に載せて行つた骰子とタープステイックとはかうなので御座いますよ。貴方は折角おいでになつたが心は空です。戀と言ふのはそんなものぢやありません。ですから、貴方を戀人の部には入れて置かれませぬよ。又棗はかうなので御座います。萬一貴方が戀人であつたら、貴方の胸は情熱に燃えて、睡眠を食るところぢや御座いますまい。戀の甘味は棗のやうなもので、心の中に火を燃やすものですよ。又いなごまめの種子はかうなので御座いますよ。戀人の心は疲れてゐるものだ。で、ヨブの忍耐力で以て、われ等が別離の苦しみを忍べと、かう貴方に言ふ積りなのですよ。」——さう言ふ判釋を聞くと、私は胸に火を射込まれたやうな氣がして、私の悲しみは増すばかりで御座いました。私は大聲で叫びました。「私が不運の爲に、神は私に眠れと命じたまうたのだ！」又私は彼女に向つて、「おわが伯父上の娘よ、わが生命にかけてお前にお願ひするから、何卒もう一度あの女に會へるやうに策略を運らして下さい。」かう言つて私は泣きました。「お、アジーズよ、わが伯父上の子息よ。」と、彼女はそれに答へました。「眞個私の心はいろ／＼な思ひで一杯になつて居ります。が、お話し

することは出来ません。今晚も毎もの處へ行つてらつしやい。そして、眠らないやうに氣を付けていらつしやいな。さうすれば、貴方のお望みは叶ひますよ。私の申上げることはこれだけです。貴方の上に平和あれ！」——それが神の思召であるなら、私はもう眠りますまい。そして、お前の言ふ通りに致しませうよ。」——従妹は立ち上つて私に食物を持つて来てくれました。そして、申しました。「さあ思ふ存分召し上つて、後で欲しくないやうにしてお置きなさい。」で、私は腹存分それを食べました。で、その間に夜になると、従妹は一襲ねの立派な衣装を持つて来て、私に着せてくれました。そして、前に擧げたあの詩を、その乙女に聞かせてやるやうに、私に頼みました。そして、くれ／＼も睡つてしまはないやうに、私に氣を付けてくれました。で、私は彼女の傍へを立ち去りながら、例の花園へ行つて、マカードに這入りました。そして夜の更けて行くに伴つて、指で眼を開いたり、頭を振つたりしながら、ぢつと庭園を見詰めて居りました。が、だん／＼見勞れて、お腹も空いて來ました。そして、その空腹はいよく増すばかりで御座いました。で、私は食卓の前に行つて、覆布をはねのけて、ならんでゐる御馳走を片端から一口づつ、肉も一片づつ、食べました。それからお酒の瓶を取り上げて、「まあ一杯だけ飲まうよ。」と獨語を言ひながら、一杯飲みました。所が、二杯、三杯と重ねて、たうとう十杯まで飲みました。私はもう既に戀に悩まされ切つて居つたので、恰度殺された人のやうに床に打倒れました。かうして明くる

日まで知らずにゐましたが、起きて見ると、胃の腑の上に、大きな鋭い小刀と一ディルヘムの鐵片とが載せてありました。私は怖しさに顔へ上りました。そして、それ等の品を持つたまま、自家に歸りました。私は従妹が、『あゝ、私はこの家でこんなに惨めな悲しい思ひをしながら、泣くより外に何う仕様もない。』と言ひく、一人で呻いてゐるのを聞きました。で、私は家に這入ると、へたへたと其處に打ち倒れて、手に持った小刀と鐵片とを抛り出したまゝ、彼女に向つて言ひました。『ああ、私には迎も目的は達せられないよ。』そして、その儘氣絶してしまひました。目のあたり私に泣き悲しんで烈しい情熱に悶えてゐるのを見ると、彼女は自分もいよく悲しくなつて來たやうに見えました。そして、私に申しました。『あれ程氣を附けて上げたのですけれども、矢張り駄目で御座いましたのね。だつて、貴方は私の申上げた事を守つて下さらないのですもの。私の言葉は何の役にも立ちませんでしたのね。』が、私はそれに答へました。『大神にかけてお願ひするが、何うかその小刀と鐵片の意味を解いて聞かせておくれな。』すると、彼女は申しました。『鐵片はね、あの方の右の眼に喩へてあるので、かう言ふ意味なのです。萬物の主に依つて、又わが右の眼に依つて、若し貴方がもう一度來て睡つてしまへば、私は斷じてこの小刀で貴方を殺してしまひますぞと。おお、わが伯父上の子息よ、あの方の惡意の恐しさに、私は貴方のお身の上が案じられます。私は貴方のことを想うて悲しさに胸が一杯ですが、迎も口では申されませぬ。で、若しあの方の許へお

歸りになつても睡らないと言ふ自信が着いたら、もう一度お歸りになつて、今度こそ睡らないやうに氣を附けていらつしやい。さうすれば貴方のお望みは叶ひますよ。でも、又歸つて行つても、毎ものやうに睡つておしまひなさるやうでしたら、行つて睡つて、お殺されなさいませぬ。』—『では、一體何うしたら可いのか、お、わが伯父上の娘よ。』と、私は言ひました。『大神にかけて、この苦しみから何卒私を助けておくれな。』彼女は答へました。『わが頭と眼にかけて、私の言葉に従つて私の指圖をお用ひなさいませぬば、貴方のお望みは叶ひますよ。』私は申しました。『さうするよ、屹度さうするよ。』すると彼女は、『まあ、それはお出懸けの時が來たらお話しませうよ。』と申しました。それから彼女は自分の胸に袴と私を押し附けました。そして、寢床に私を寢かせた上、私がうとく寢つくまで、靜かに私の手足を摩擦してくれました。その間に私は睡つてしまひました。それから、彼女は扇子を取つて、私の枕頭に坐りながら、日が暮れるまで、私の顔を煽いで居りました。そして、日が暮れてから、私を起してくれました。眼が覺めて見ると、彼女は私の枕頭に扇子を持つて坐つて居りました。そして、涙で着物がびしょ濡れになるほど泣いて居りました。しかし、私の眼が覺めたのを見ると、涙を拭いて、私に食物を持つて來てくれました。私は最初それに手を附ける氣になりませんでした。が、彼女は私に申しました。『だから、私は私の指圖通りになさなくてはいけないと申したではありませんか。さあ、召し上れ。』—で、

私は食べました。それもたゞ彼女に背きたくないからで御座いました。で、彼女は私が口の中でもぐぐり嚙んであるうちに、後からぐぐりと喰物を私の口の傍まで差し付けました。私はたうとうお腹が一杯になりました。それから、彼女はジュジュベスの煎じ汁に砂糖を混ぜて、私に飲ませたり、私の手を洗つて拭いたり、薔薇水を私に振りかけたりしてくれました。かうした後で、私は氣も清々しくなつて、彼女と一緒に坐つて居りました。夜になると、彼女は私に着物を被せながら申しました。「お、わが伯父上の子息よ、何卒睡つてしまはぬやうに氣を付けていらつしやいよ。あの方は明け方近くでなくてはおいでなさいませんからね。それが神の思召しであるなら、今晚は屹度お會ひになることが出来ますよ。で、私のお願ひしたことを忘れないで下さいまし。」さう言つて、彼女は泣きました、あまり烈しく泣くので、私もお願ひしたことを忘れないで下さいまし。さう言つて、彼女は泣きました、あまり烈しく泣くので、私も胸が痛くなりました。で、私は彼女に申しました。「私に頼んだこととは何ですか。」彼女は答へました。「あの方とお別れ際に、前に申し上げたあの詩句をあの方に聞かして上げて下さいませ。」

それから私は嬉しさに夢中になつて、彼女の許を離れながら、例の花園へ行つて、喰物の澤山並んである例の客間に這入りました。兎に角その夜の四分の一は睡らずに過しましたが、何だか一夜が一年ぐらゐの長さに思はれました。で、眼を張り詰めたまゝ、その夜の三分の二を過した時、鶏が鳴きました。そして、起きてゐるために無性にお腹が空いて來ました。で、食卓の傍に寄つて、思ふ

存分食べました。すると、私の頭は重くなつて、又もや睡魔が襲つて來ました。が、その途端に、遠方で何か物音が聞えました。で、私は立ち上つて、手と口とを洗つて、はつきり眼を覺ました。すると、間もなく彼女は這入つて來ました。彼女は十人の女奴隷を隨從に連れて來ました。彼等に取り捲かれた彼女は、恰度數多の遊星の間に交つた満月のやうで御座いました。彼女は赤金で縫箱をした緑色の縞子の衣裳を身に纏うて居りました。で、私を見ると、笑つて申しました。「まあ好く眼を覺ましておいで、したね。今夜は睡くならなかつたのですかえ。かうして夜明しをなすつたからには貴方も戀する人だといふことが、今夜こそ私にも分りましたよ。だつて、相手を思ふ心からよく辛抱して、一晩中、寢ずに明すと言ふことは、戀人の特徴の中に數へられることですものね。」それから、彼女は女奴隷の方へ向つて合圖をいたしました。すると、彼等は一同引き下りました。で、彼女は私に近づいて、自分の胸に私を押し附けながら、接吻をいたしました。私達は朝まで一緒に語り明しました。朝になつて、私が立ち去らうとした時、彼女は私を引き留めながら、申しました。「一寸待つて下さい、今お目に懸けて、預つて頂きたいものが御座いますからね。」で、私は待つて居りました。すると、彼女は半帛を解いて、その中からこのリネンの布片を取り出しながら、私の前に披げました。見ると、只今貴方様が御覽の通りに、羚羊の繪模様を描いて御座います。私は一方ならずそれに感服しました。そして、それを受け取りました。その後で、それ

から毎晩この花園へ彼女を訪ねて来ると言ふ約束をいたしました。そして、嬉しさに夢中になつて、彼女の許を立ち去りました。が、嬉しさに夢中になつて、従妹から吩咐かつた例の詩句を彼女に言つて聞かせることをつい忘れてしまひました。その女はなほこの羚羊の模様のあるリネンの布片を私に呉れる時、私に申しました。「これは私の姉妹が拵へたのですよ。」で、私は申しました。「その方は何と言ふお名ですか。」彼女は答へました。「ヌーア・レル・フダーと申しますよ、そして、このリネンは大切にして下さいましな。」

そこで私は彼女に別れを告げて、喜びに満ち溢れながら、自家に歸つて、従妹の許へ行きました。見ると、彼女は横に倒れて居りました。が、私を見ると、涙を流しながら立ち上つて、私に近づいて来ました。そして、私の胸に接吻しながら、「私がお願ひしたやうに、あの方の前であの詩を誦して下さいましたか。」と申しました。「あ、忘れてしまつたよ。」と私は答へました。「この羚羊の繪を見たお蔭で、すっかり失念してしまつたんだ。」かう言つて、私は彼女の前にそのリネンを投げ出しました。彼女は立ち上りました。それから又坐つて、ちつと我慢して、涙を流しながら申しました。「お、わが伯父上の子息よ、このリネンの布片を私に下さいませ。」で、私はそれを彼女に與へました。彼女はそれを受け取つてそつと披げながら、その中に描いてあるものを見て居りました。それから又私が出懸ける時刻になると、彼女は申しました。「さあ行つていらつしやい、

何卒御機嫌よくお歸り遊ばすやうに！ ですが、お歸りがけには昨夜お忘れになつたあの詩を誦して聞かせて上げて下さいな。」「もう一度聞かせておくれな。」と、私は申しました。すると、彼女は私の通りに致しました。

それから私は花園に行つて、客間に這入りました。乙女は私を待つて居りました。そして、私を見ると立ち上つて、私に接吻しながら、そこに私を坐らせました。で、私どもは一緒に食べたりの飲んだりいたしました。朝になつて、私は彼女に例の詩句を誦して聞かせました。次のやうに――

お、おん身等戀人よ、大神にかけてわれに告げよ、その戀の烈しくなり増れる時、乙女はいかに振舞ふべきかを。

彼女はそれを聞くと、眼に一杯涙を溜めて、次のやうに答へました。――

乙女はその戀を秘して、飽くまで秘密を守るべし。いかなることにも堪へ忍びて、従順なれや。

私はこの句を記憶に留めて、従妹の望み通りに遣つたことを喜びながら、彼女の許へ歸つて参りました。そして、彼女が臥床に寝てゐて、枕頭には私の母が、その容體を氣遣ひながら泣いてゐるのを見ました。私が彼女の傍へ参りますと、母は私に向つて、『お前のやうなものは地獄へ陥ちてしまへ！ そんな従兄があるものか。伯父さんの娘が病氣だと言ふのに、お前は何うしてうつちや放しにして、見舞つても上げないんだね？』——が、従妹は私を見て、頭をもたげて起き上りながら、私に申しました。『お、アジーズよ、私が教へて上げたあの詩をあの方に聞かして上げて下さいましたか。』『あ、』と、私は答へました。『あの人はそれを聞くと、泣いて他の詩を私に誦してくれました。私は空で覺えて來ましたよ。』——『それを聞かして下さいな。』と、従妹は言ひました。そして、私がそれを聞かしてやると、彼女はおいしく泣いて、又、次のやうな詩を誦しました。——

われは我慢に我慢をしてはあれど、いかにせむ、胸はたゞ想ひに瘦るゝを。

その時彼女は申しました。『毎ものやうにあの方の許へおいでになつたら、今お聞きになつたこの詩をあの方に聞かして上げて下さいな。』私は答へました。『あ、左様しませうよ。』

そこで私は毎もの通り花園へ出懸けて、いざ歸らうと言ふ時に、その詩を乙女に誦して聞かせました。それを聞くと、彼女は涙を流して、次のやうに答へました。——

さらば、乙女にしてその秘密を押し包むべき忍耐を持たぬとならば、死より外になすべきことを知らず。

それを記憶に留めて、私は自家に歸つて参りました。そして、従妹の前へ出た時、彼女が氣を失つて倒れてゐるのを見ました。私の母は彼女の枕頭に坐つておりました。従妹は私の聲を聞き附けると、眼を開いて申しました。『お、アジーズよ、あの詩をあの方に聞かしてお上げになりましたか。』私は答へました。『あ、』そして、あの女はそれを聞くと、泣いて、このやうな詩を私に聞かしてくれましたよ。』かう言つて、私はそれを彼女に聞かしてやりました。彼女はそれを聞くと忽ち又氣を失つてしまひました。が、正氣に返ると、次のやうな詩を誦しました。——

仰せ畏み、われは死なむ。さらば、われ等の結合を妨げし人に、わが挨拶を傳へたまへ。

その日も夜が近づくと、私は又毎も通りに花園へ出懸けて行きました。乙女は私を待つてゐました。私どもは食べたり、飲んだりいたしました。で、朝になつて歸らうとした時、私は従妹の言つた通りを彼女に傳へました。すると、彼女は大きな聲を擧げて、興奮しながら叫びました。「大神にかけて、この詩を誦した方は死んでしまつたのですよ！」それから、彼女は泣いて私に申しました。「汝に禍あれ！この詩を誦した人は貴方の御親類ぢやなかつたのですか——。」私は答へました。「彼女は私の父方の伯父の娘ですよ。」——「貴方は好い加減のことを言つていらつしやる。」と、彼女は答へました。「大神にかけて、その方が貴方の伯父さんの娘御なら、貴方は、その方が貴方を愛していらしたと同じやうに、その方を愛しておいでですわ。その方を殺してしまつたのは貴方ですよ。それなら神様は又同じやうにして貴方を滅したまはむことを！大神にかけて、従妹がおりなされると前から伺つてゐれば、私は貴方とかうした關係を結ばうとは思はなかつたのですよ。」——「眞個、」と、私は申しました。「その女は私の従妹ですよ。貴方が私に見せたさまゝな合圖の説明をしてくれたのもその女ですよ。貴方とかう言ふ關係になれるやうに、私を導いてくれたのもその女ですよ。その女が旨く取計らつてくれなければ、私は貴方に接近することが出来なかつたのですよ。」——「では、あの方は私達のことを御存じだつたのですか。」と、彼女は訊ねました。私は答へました。「え、知つて居りましたよ。」——「あ、神様！」と、彼女は叫びました。「貴方があ

の方の若い盛りを苦しませなすつたやうに、大神が貴方の青春時代を惱ませられむことを！」それから彼女は私に申しました。「あの方に會つていらつしやい。」で、私は心に不安を覺えながら出懸けました。そして、自分の町内まで来ると、もう泣き聲を聞き附けました。その所因を訊ねると、アジーゼエが戸の蔭に倒れて死んでゐたと言ふことで御座いました。兎に角私は家に這入りました。母は私を見ると、大きな聲で叫びました。「あの娘を殺した罪はお前の首に懸つてゐるよ。神様がお前にあの娘の血を看したまはざらむことを！お前のやうな従兄は地獄へ落ちてしまへ！」その時私の父が這入つて參りました。で、私どもは埋葬の用意をして、葬儀を執り行つた上、彼女を葬りました。そして、その墓の前で聖典全部の誦讀をしながら、三日間そこで通夜をいたしました。私はそれが済むと、自家に歸つて、彼女のために泣いてばかり居りました。すると、母が私にかう申しました。「ねえ、お前は一體何うして、あの娘を失望させるやうなことをおしなのか、私に聞かしてお呉れでないか。私は始終あの娘に訊いてゐたんだよ。お、わが子息よ、その病氣の原因に就いてね。だが、あの娘は何うしても私にそれを打明けてくれなかつたのだよ。でね、大神にかけて何卒お願ひだから、あの娘に對してお前は一體何んな事をしたれば、あゝしてあの娘が命を縮めるやうな事になつたのか、それを私に聞かせてお呉れでないか。」——私は答へました。「私は別に何にもしませんよ。」が、彼女は尙も申しました。「あ、神様が

お前の上にあの娘の復讐を遂げたまはむことを！ だつてね、あの娘は私に何にも言はないで、死ぬまで眞實の事を隠してゐたが、お前に對する愛情は少しも變らずに持つてゐたんだよ。で、死ぬ時、私がああ娘の傍にゐたら、眼を開いて、私にかう言つたんだよ。「お、わが伯父上の妻よ、貴方の息が私の血から罰を蒙らないやうに、神様よ、御保護を垂れたまはむことを！ 又あの方が私になされたことに對して、あの方を罰したまはざらむことを！ で、今こそ神様は假の世から永遠の世界に私をお移し下さるので御座います。」と。そこで私はかう答へたんだよ。「お、わが娘よ、何卒神様がお前を生き永らへさせて、何時までもお前の若さを保護したまはむことを！」と。それから私は又あの娘に病氣の原因を訊ねたんだよ。でも、返辭をしないでね。たゞにつこり笑つてゐるんだよ。そして、かう言ふのさ。「お、わが伯父上の妻よ、貴方の息がこの頃始終出入りしてゐる處へ又行きたいと仰つたら、歸り際には、この二つの句を唱へて来るやうに傳へて下さいませ——貞節は善なり、叛逆は悪なりと。私は生きてゐる間も、又死んだ後でも、あの方に私の心が見せて上げたいから、かうしてお願いするんですよ。」つてね。それからお前に與つてくれと言つて、何やら渡したが、それはお前がああ娘のために泣いて悲しむのを見ないうちは、決して渡してくれないかと、かたがた私に誓はせたよ。私はその品を持つてゐるが、お前がああ娘の言つたやうな氣持におなりだつたら、その時お前にそれを渡して上げるよ。」——私は彼女に申しました。「何卒それを見せて下さい

な。」が、彼女は見せてくれませんでした。それから私に自分の快樂にばかり思ひ耽つて、従妹の死んだことなど、てんで考へませんでした。と言ふのは、自分でも心が落ち着かないので、晝も夜も愛人と一緒にゐたからで御座います。で、その明くる晩は暮れるのを待ち兼ねて、又花園へ出懸けて行きました。乙女は私を待ち焦れて、苛々しながら、従妹のことを訊ねました。で、私は彼女に答へました。「あの方は亡くなりました。嚙りつきながら、従妹のことを訊ねました。で、私は彼女に答へました。「あの方は五日目です。で、シクルと聖典の誦讀をしてやりましたよ。死んでからも四晩経ちます、今日は五日目ですよ。」それを聞くと、彼女は大聲を擧げて泣きました。そして、申しました。「私はこの間貴方に、貴方があの方を殺したんだつて言ひませんでしたか。あの方の死なない間に、あの方のことを聞かせて下さつたら、私もあの方が私に對して下さつた御親切に酬いた筈でしたよ。あゝしてあの方が私のために盡くして下さらなかつたとしたら、私はこのやうに貴方にお目に懸かることは出来なかつた所ですものね。あの方があんな不幸にお遇ひなすつたために、何か貴方に災難が起りはせぬか、私はそれが心配ですよ。」——私は答へました。「あの方は死ぬ前に私を宥してくれましたよ。」それから私は母が私に話してくれたことを彼女に話して遣りました。それを聞くと、彼女は大きな聲で叫びました。「大神にかけてお願いしますがね、阿母さんの許へいらしたら、何卒その

阿母さんが預かつておいでのものは何んな物だか訊いて見て下さいな。』——『私の母が言ひましたがね。』と、私は二たび申しました。「お前の従妹は死に際にかう言つたよ。『貴方の子息が此頃始終出入りする處へいらつしやるやうでしたら、この二句を聞かせて上げるやうに言つて下さい、貞節は善なり、叛逆は悪なりとね。』——乙女はこの言葉を聞くと、二たび聲を擧げて叫びました。「神の恵みは（あ、神の御名は讃へられてあれよ）その方の上にあれ、その方は貴方を私から救つて下さいましたからね。と言ふのは、私は貴方の上に危害を加へようと考へてゐたのですよ。ですが、もうかうなつては貴方に何の迷惑も危害も加へはしませんよ。』私にはどうもこの言葉が合點が行きませんでした。で、彼女に糺して見ました。「貴方は私を何うしようと思つてゐたのです。お互にこれ程愛し合ふやうになつてゐるのに？」彼女は答へました。「貴方は今一生懸命に私のことを思つていらつしやる。でも、貴方は若いのですものね。まだ他人に詐されたことなぞおありにならないでせう。女の悪心や、女に諷の多いことも御存じないでせう。そりやあの方がまだ生きていらつしやるれば、貴方を庇つて下さいましたでせうよ。だつて、あの方は貴方の身を守る源泉であつたのですものね。そして、貴方を破滅から救つて下さつたのですものね。で、今私は貴方にかういふことを誓つて頂きますよ、若い女だらうが、お婆さんだらうが、何しろ貴方は女といふ女と口をきいても、返辭をしてもならないと言ふことを。お氣を附けなさいよ、本當にお氣を附けなさいよ、貴方はまだ女の偽りも悪

心も御存じないのですからね。貴方に合圖の説明をしてくれた方は死んでしまひましたわ。ですからそのお従妹御が死んでからは、貴方が何んな災難に罹つても、誰も救ひ手が無いだらうと、私はそれが心配でなりませんよ。お、貴方の伯父上の娘御のことを思ふと、私は本當に悲しい！ 生きておいでの間にお目に懸かれたら、私にして下さつた御親切に對しても十分お返しすることが出来たでせうにねえ！ 神の恵みは（あ、神の御名は讃へられてあれよ）彼女の上にあれ、あの方は飽くまで自分の秘密を包んで、自分の感じを外面に表さなかつたのですからね。そして、あの方がなければ、貴方は逆も私の許へいらつしやられなかつたのですものね。で、私一つ貴方にして頂きたいことがありますの。』——『何ですか。』と、私は申しました。彼女は答へました。「私をあの方のお墓所へ連れて行つて下さいな、お墓へお詣りをして、それに詩を彫りつけたいのですよ。』『それが神の御心であるなら——あ、神の御名は讃へられてあれよ——明日にでも。』と、私は答へました。で、その夜は彼女と一緒に明しました。彼女は一緒にゐる間、「あ、貴方の従妹が生きておいでうちに、私に話して下さればよかつたのに！」と、何遍も返らぬことを繰り返してゐました。それから私は彼女に訊ねました。「彼女の言つた——貞節は善なり、叛逆は悪なり——と言ふ言葉は一體何う言ふ意味なのですか。」が、彼女はそれに答へませんでした。で、その明るる朝、彼女は立ち上つて、黄金の幾片か入つてゐる金囊を取り上げながら、私に申

しました。「さあ、何卒私をお墓所へ案内して下さい。私はお墓にお詣りをして、詩を彫り附けたり、上屋根を拵へたり、あの方のために祈禱をしたりした上、なほ御回向のためにこの金貨を施しにしたう御座いますからね。」「畏承りました。」と、私は答へました。そして、先に立つて行くと、彼女は後から附いて参りました。そして、途々施物をしながら歩いて居りました。彼女は布施をする度に申しました。「これはアジーゼエの靈のためにする施しですよ。アジーゼエは死の盃を飲むまで、自分の祕密を包み隠して、苦しい戀を打明けなかつた人ですよ。」かやうに金囊の中のものを施し施して、一々アジーゼエの魂のためにと言ひながら、たうとうお墓に到着いたしました。その時、金囊の中は空虚になつて居りました。彼女はお墓を見上げて、自分の體軀を投げかけながら、おい／＼泣きました。それから先端の尖つた金具と小さな槌とを取り出して、石塔に小文字で次のやうな詩句を彫りつけました。――

七色のアネモネ咲ける花園の中に、誰のとも知らぬ墓の傍へを過ぎりて、

こは何人の墓なりやと問へば、土は答へぬ、うやく／＼しかれ、こはある戀人の休息の地なりと。

我は言ひぬ、神は御身を守りたまはんことを！ お、戀の犠牲よ、天國の最高位に御身を

宿らせたまはんことを。

あまねき創造物の中にも、戀人はいかばかり悲惨のものよ、その墓すら賤しき土くれに

埋めらるゝものを！

出來得べくんば、お、墓所よ、われ御身を花園にして、わが涙もて御身を灌がんに！

それから彼女はまた烈しく泣きました。そして、やつと立ち上りましたので、私も一緒に立ち上りました。で、私どもが二たび例の花園へ歸つてから、彼女は私に申しました。「大神にかけてお願ひしますがね、何卒私を見捨てないで下さいね。」私は答へました。「はい、畏承りました。」で、私は元通り彼女の許へ通つて居りました。彼女は私を親切に丁寧に款待してくれましたが、時々従妹のアジーゼエが私の母に申した例の二句を聞かせてくれと申しました。で、私は何度もそれを繰り返して聞かせました。かうして相變らず食べたたり飲んだり、彼女との會話を娛しんだり、度々柔かい衣裳を取り替へたりしてあるうちに、私はだん／＼丈夫になつて肥つて参りました。もう心配も悲しみも何處かへ行つてしまつて、従妹のことも忘れてしまつたので御座いますよ。私は全一年の間かうした快樂に耽つて居りました。が、明けて新年の初めに、私は風呂に這入りました。そして、薩張した心持ちになつて、綺麗な衣裳を身に着けながら、風呂を出て、酒を一杯

飲みました。そして、さまざまの香料を燻きしめた着物から發散する匂ひを嗅いで居りました。私の心は不幸や、災難で壓しつけられても、傷められもしてゐなかつたので御座います。夜になつて、例の乙女の許へ出懸けましたが、何しろ酔拂つてゐたので、何處を何う歩いたか自分でも分りませんでした。で、彼女の許へ行くつもりで、横道へ逸れてナキーブ街と言ふ横町へ這入り込んでしまひました。そして、ずん／＼その町を進んで行くうちに、見よ、向うから片手に蠟燭を點火して、片手に折り褶んだ手紙を持つたお婆さんが遣つて参りました。私はお婆さんの方へ歩み寄りました。すると、お婆さんは眼を泣き腫らしながら、私にかう申すので御座います。「お、わが子息よ、貴方は字が読めますか。」私は答へました。「え、讀めますよ、老いたる伯母御よ。」そこで彼女は、「ぢや、一つこの手紙を讀んで下さいな。」と言ひながら、私にその手紙を渡しました。で、私はそれを受け取つて、封を開きながら、中の文言を讀んで聞かせてやりました。そして、これは留守にしてある者が愛する者に對して挨拶をするために寄越したんだと教へてやりました。彼女はそれを聞くと無事な報知を喜んで、私のために祈禱を捧げながら、「何卒神様は、貴方が私の心配を除いて下さつたやうに、貴方の心配をも除いて下さらんことを！」それから彼女は手紙を持つて、二三歩行き掛けましたが、又引返して来て、私の手に接吻しながら申しました。「お、わが君よ、神様は——あ、神の御名は讀へられてあれよ——貴方に青春の樂みをお與へ下さいまして、貴方の名譽を汚すことな

ぞ御座いませぬやうに護りたまはむことを！ 何卒彼處の入口まで五六歩私と一緒においで下さいませんか。貴方に讀んで頂いた次第を衆皆に話したのですが、私の申すことを眞實にしてくれないのですよ。ですから、御一緒にいらしつて、門口で手紙を衆皆に讀んで聞かしてやつて下さいませ。そして、貴方のためにお祈りをいたしますから、それを受けて下さいませ。——で、私は申しました。「一體この手紙は誰から來たので御座いますか。」彼女は答へました。「お、わが子息よ、この手紙は私の子息から來たので御座いますよ。その子息は十年も家を留守にして居りましたね。と申すのは、商品を持つて旅行して居りますので、これまでずっと外國に出たきりで、何の音信もなかつたので御座いますよ。で、私どもは子息はもう死んでしまつて歸らないものと諦めて居りました。所へ、この手紙が來たのですよ。あれの妹が、あれの留守と言ふもの、毎日毎夜泣き通して居りますのでね、この手紙には、あれが健全で繁昌して暮らしてゐると書いてあるんだと言つて聞かせても、でんで私の言ふことなど信用しないのですよ。そして、この手紙を讀んでくれた人を此處へ連れて来て、中の文句を讀んで聞かして貰つて下さい。そしたら私も安心するだらうと、こんなことを申すので御座いますよ。お、わが子息よ、妹は何も彼も凶い方にはかり取つて心配してゐるので御座いますがね、誠に恐れ入りますが、帷幄の外に立つて、この手紙を讀んで、室内に居る妹に聞かしてやつて下さいませ。回教徒のために願ひを適へてやつた者は、その報酬に自分の心から

心配事を取り除いて貰へると言ひますが、それは今貴方のお身の上に申し上げることです。神の使徒は（あゝ神よ、彼を祝福し且つ救ひたまへ）かう仰有いましたからね。泣き悲しんでゐる者の心から、この世の憂苦の一つを取り去つてやつた者には、誰でも將來この世の憂苦の一つを神様がその心から取り去つて下さると。それから又かう言ひ傳へも御座いますよ。誰でも自分の同胞の心からこの世の憂苦の一つを取り去つてやる者には、神様が蘇生の日に七十二の憂苦をその心から取り去つて下さるとね。——で、私は答へました。「宜しう御座います。さあ御案内下さい。」

お婆さんはそこで私の先に立つて歩きました。私がその後を随つて行くと、直ちに銅を張りつけた、大きな戸口の前に着きました。彼女はその戸口の前に立ち停つて、波斯語で何やら嘯鳴りますと、中から一人の乙女が軽く小刻みな足取りで出て参りました。彼女の洋袴は膝切りに括し上げられて、兩脚はすつきりと見る人の眼や心を亂す程に美しう御座いました。恰度二本の雪花石膏の柱のやうで、それには又寶石を鑲めた踝環が捲いて御座いました。上衣の裾はたくし上げて腕で支へ、袖は二の腕から先が折り込んであるので、その白い手頭に二對の腕環の嵌めてあるのがよく見え、耳には眞珠の耳環を嵌め、頸には高價な頸飾りを着けて居りました。又頭には珍貴な寶石で飾つた、まだ新しいクローフィエを被つて居りました。それに下着の裾が洋袴の帶紐で括し上げてあつたので、その様子は恰度今まで何か立働きでもして居たやうに思はれました。で、私を見ると、彼女

は流暢な、その快さと言つたら今まで聞いたことのないやうな、素敵な辯舌で「お、わが母上よ、この方が手紙を讀む爲に來て下さつた方ですの？」と申しました。「あゝ左様ですよ。」と、お婆さんは答へました。すると、乙女は手を差伸べて私に手紙を渡しました。彼女と戸口との距離は半ロツド位で御座いました。で、私も手を伸べてその手紙を取らうと思つて、彼女の方へ近づきながら、戸口の中へ頭と肩とを突込みました。所が、その途端にお婆さんは、私がまだそれとも氣が附かないうちに自分の頭を私の背中に押付けて、私を前の方に押遣りました。で、私は手紙を持つたまま、四邊を見廻して見ると、何時の間にか家の中に——即ち玄關の内側に——這入つてゐるので御座いました。お婆さんは又電光のやうに、素早く家の中へ飛込んで、いきなりその戸をびつしやりと閉めてしまひました。乙女は私が玄關の内側に這入つたのを見ると、私の傍に寄り添ひながら、自分の胸に私を押付けました。そして、私が免れることの出来ないやうに、しつかり私の手を取つたまま、奥の方へ連れて行きました。又お婆さんは蠟燭を點けて先に立つて案内しながら、七つの中騎士達がゴツゴツの遊戯をやること出来る位廣う御座いました。彼女はそこに私を坐らせて「眼をお開けなさい。」と申しました。で、私はその通りに致しましたが、餘りひどい目に遇はされたので、眼が眩んで好くは見えませんでした。それでも強ひて心を落ち着けながら、よくよく見る

と、客間はいと美しい雪花石膏で組み立て、あつて、ありとある家具は座褥や敷物に到るまで、皆錦欄で出来て居りました。その外眞鍮の腰掛が二つに、眞珠や寶玉で飾つた赤金の臥榻が一つ御座いました。私、私のやうな王様にでなければ似合はしくないやうな立派なもので御座いました。

それから彼女は私に申しました。「お、アジーズよ、私には死と生と何方が宜しいので御座いますか。」私は答へました。「勿論そりや生です。」すると、彼女は申しました。「生の方がい、と仰有るなら、それぢや私と結婚なさい。」「貴方のやうな人と結婚するのは可厭ですよ。」と、私は答へました。所が、彼女はそれに答へて言ひました。「私と結婚なされば、あの老猶なデリーレエの娘の手から安全に免れることがお出来になるんですよ。」——「その老猶なデリーレエの娘とは誰のことですか。」と私は訊ねました。彼女は笑つて答へました。「一年と四箇月も一緒にいらつしやりながらあの方を御存じないなんてことがありませんか。大神が（その名は讀へられてあれよ）彼女を滅ぼしたまはむことを！ 眞個あの方ほど二心のある方はありませんからね。貴方の前にこれまで何人の男を殺してゐるでせう！ 随分苛いことをしてゐますわね！ だが、貴方は又何うして今まで一緒にいらして、殺されもせず、苛い目にも遇はされずに済んでいらしたのですか。」私には彼女の言葉がこの上もなく不思議に思はれたので、そこで彼女に訊ねました。「お、わが夫人よ、誰があの方のことを貴方に告げたのですか。」彼女は答へました。「時代がその時代の災厄を知つてゐるやうに、私は

あの方を知つてゐるんですよ。ですが、貴方はあの方に依つて何んな経験をなすつたか、残らず話して聞かして下さいな。貴方は何うして今までの方から無事で通つて來られたか、私はその所因が知りたいのですからね。」で、私は彼女や従妹のアジーズエからして、自分の身に起つた事柄を残らず聞かせました。すると、彼女は叫びました。「大神がその方の上に恵みを垂れたまはむことを！」彼女は従妹のアジーズエが死んだと聞いた時、涙を流して兩手を打つて申しました。「大神はその方が亡くなつたのに對して十分貴方にお酬い下さらむことを！ お、アジーズよ、あの老猶なデリーレエから貴方が無事免れて居られたのは、眞個その方のお蔭ですよ。でなかつたら、貴方は疾うに殺されてしまつた所ですよ。」それから又彼女は兩手を打つて申しました。「お、わが母上よ、そこにおいでのお方達を此處へお通し申して下さい。」すると、婆さんは法廷の證人どもを四人引き連れて出て來ました。そして、その手には四本の蠟燭を點火して持つて居りました。證人どもは這入つて來ると、私に挨拶をして、めいめいそこに坐りました。乙女は被衣を纏ひました。そして、證人の一人を指名して、結婚契約に於ける彼女の代人と致しました。で、彼等は契約の儀式を執り行ひました。そして、彼女は支度金の全部、即ち普通前金に渡されるものも、後金に受取るべきものも全部受取つたと、並びに白銀一萬片を私から借錢したことを自ら證言いたしました。それが済むと、證人どもは謝禮を買つて退出いたしました。

次の日私は外出したいと思ひました。が、彼女は笑ひながら傍へやつて来て、「風呂から出るのは這入るのと同じ事とお思ひなされるのですか。貴方は私を老獺なデリーレエの娘と同じやうに考へていらつしやるのでせうね？ そんなお考へは止めて下さいよ。貴方は聖典とスネエに依つて私の良人ぢや御座いませんか。酔つていらつしやるのなら、酔ひを醒まして、本氣になつて下さいな。貴方の今おいでのこの家はね、年に一日しか開いてゐないので御座いますよ。まあ表門の方へ行つて御覽なさい。」で、私はその言葉に従つて行つて見ましたが、成程門は閉つて釘附けになつて居りました。で、引き返して、その次第を彼女に告げました。すると、彼女は私に申しました。「お、アジーズよ、私どもは麵粉も、穀物も、果實も、安石梅も、砂糖も、肉も、羊も、家禽も、その外の食料も、皆五六年分貯へてあるのですよ。そして、門は昨宵から全一年間閉り切りですからね。一年経たない間は、貴方はこの家から外に一步もお出になる譯には参りませんよ。」これを聞いて、私は思はず叫びました。「あ、神の外には力も権力もない！」すると、彼女は笑ひました。私も亦一緒になつて笑ひました。で、彼女の命令通りになつて、私は一年の月日が経つ間彼女と一緒に引き籠つて居りました。そして、その間に彼女は男兒を一人擧げました。で、次の年の第一日に門の開く音がしたと思ふと、大勢の男がカークや砂糖や麵粉類を持つて這入つて來ました。私は出懸けたくありませんでした。所が、彼女は私に申しました。「夜までお待ちなさい。そして、貴方が這入つていらし

た時のやうに、お出懸けなさいまし。」で、私はその時間まで待つて、いざ出懸けようとしながら、何やら怖ろしさに、ぶる／＼顫へてゐると、彼女は又申しました。「大神にかけて、今夜この戸が閉らないうちに、屹度歸つて來ると誓ひをお立てにならないければ、私は貴方を戶外へ出しては上げませんよ。」そこで、私はその通りに約束いたしました。彼女はなほ劔と聖典とにかけた嚴しい誓言に依つて、又離縁の誓言に依つて、屹度歸つて來るやうに私に誓はせました。それから私は彼女の許を去つて、例の花園へ参りました。毎もの通りに、門は開け放して御座いました。で、私は心の中に、「俺は全一年間此處へ足踏みをしなかつた。かうして俺が遣つて來たのを誰も知る筈がないのに、毎ものやうに開け放してあるとは怪しからぬ。」と思ひながら腹を立てました。「乙女はやはり此處に居るのかしら？ 兎に角這入つて様子を見てから、阿母さんの許へ行くとしよう。」と思ひ定めました。その時はもう日の暮れ方でした。私が庭園へ這入つて、客間へ通ると、老獺なデリーレエの娘は膝に頭を垂れ、頬杖をして坐つて居りました。顔色は變つて、眼も窪んでゐました。で、私を見ると、「まあ御無事でしたか、神は讃められてあれよ。」と、大きな聲で叫びました。私は彼女を見ると羞しくなつて、頭を下げてゐましたが、直様彼女の傍に走せ寄つて、彼女に接吻しながら申しました。「今時分私の來る事が何うして分りましたか？ 彼女は答へました。「いゝえ、少しも知りませんでした。大神にかけて、この一年間と言ふもの私は些とも睡らな

つたのですよ。たゞ貴方を待ち焦れて、かうやつて毎晩坐つてゐました。私が新しい衣裳を一組貴方に差し上げて、貴方は必ず歸つて来ると私に約束して出て行かれたあの日のまんまで、私は貴方を待つてゐました。が、貴方は最初の晩もお歸りにならない。その次の晩もお歸りにならない。それから三晩目も、でも私は矢つ張り貴方を待ち續けてゐました。戀する女の心はこんなものですよ。さあ一年間も顔を見せなかつた所因を話して聞かして下さい。』そこで私はすっかり話しました。私が結婚したと聞くと、彼女の顔色は蒼白になりました。私は又、『今晚はかうして貴方の許へ来るには来たが、夜が明けぬ間に歸らなくちやならないのだ。』と申しました。すると、彼女は叫びました。『あの女は貴方と結婚して、そんな計略を設けて一年間も貴方を閉ぢ籠めて置いただけでもう十分だらうに、そんな離縁の誓ひまでさせて、夜が明けぬ間に歸つて来いなぞと言つて、阿母様や私に久し振りに會はせてもくれなかつたり、切めて一晩位一緒に過させてもくれなはいとは、随分ちやありませんか。私の方があの女より前に貴方を知つてゐるんだけど、これで若し貴方が一年間もあの女の許へ歸らないであらう、あの女は一體何うするでせうね？ あゝ、大神をしてアジーゼエの上に恵みあらしめたまへ。あの方は他の人が受けたこともないやうな苦しみを、誰にも堪へられないやうな辛抱をし遂げて、到頭貴方の壓迫の下に死んで行つたのですものね。貴方を私から保護してくれたのはあの方ですよ。私は貴方を押籠めて置いて、しまひに殺してしまふことも出来ただけけれど、大

丈夫歸つて来ると思つたから自由に出して上げたのですよ。』

かう言ひながら彼女は泣きました。そして、口惜しがつて、私を睨み附けました。私はその有様を見ると、脇腹の筋肉ががたく顫へて、相手が怖ろしくなりました。恰度火の上に置かれた豆のやうなもので御座いました。彼女はその時急に大聲で叫びました。すると、忽ち十人の女奴隷が出て来て私を床に投げ附けました。で、私が彼等の手に壓へ附けられた時、彼女は短刀を取り上げながら、立ち上つて申しました。『私は貴方を羊が殺されるやうに殺してやる！ これが貴方の従妹に振舞つた所業に對する最少の酬いですよ。』私は女奴隷どもの下に組み敷かれたまゝ、自分の頬が塵埃だらけになつて、相手が手に短刀を持つてゐるのを見ると、最早死は免れないものと覺悟しました。私は命だけは助けてくれと頼んで見ました。が、相手はそれに耳を傾けるどころか、ますます叫り立つて、女奴隷どもに、私の手を背後に縛り上げると吩咐けました。で、彼等は吩咐けられた通りにして、私を仰向けに寝かせた上、私の上に乘つかつて、私の頭を持ち上げました。それから二人が立ち上つて私の足の趾を壓へ、他の二人は脚の上に乗りました。さうして置いて、女主人公は他の二人と一緒に立上がりながら、私を打てと命じました。彼等は私が氣絶するまで打ち續けました。私の聲は絶えぬになりました。そして、正氣に返つた時、私は心の中に、こんな目に遇ふ位なら、いつか殺された方が優しだと思ひました。私はその時、従妹が、『神様があの女の

悪心から貴方を遠ざけたまはむことを！」と言つたその言葉を思ひ出しました。そして、聲が絶え入るまで、おい／＼泣きました。その時、彼女は短刀を磨ぎすまして、女奴隷どもに申しました。「其奴の咽喉許を披げろ。」所が、私は不圖神様のお力添へで、従妹が私に唱へると教へてくれた例の二句を想ひ出しました。そして、「貞節は善なり、反逆は悪なり。」と繰り返しました。彼女はそれを聞くと、大聲舉げて、「大神は御身の上に恵みを加へ給ふ、お、アジーゼエよ。あ、御身の若さが永久に保存されてゐたら！御身は生きてゐる間のみか、死んでまで、御身の従兄を保護してゐるんだよ。」と叫びました。それから私の方へ向つて「貴方はこの二句の功德で命拾が出來たんですよ。だが、私の怒りの記しだけは附けて上げなくちや。」と言ひながら、私に酷い傷を負はせました。私は氣を失つてしまひました。が、我に返つた時には、もう出血は停つて居りました。彼女は私に一杯の酒を飲ませて、それから私を足蹴にしました。

私は立ち上りはしたものの、初めは足が前へ出ませんでした。が、だん／＼少しづつ歩んで、漸く妻の家の戸口に着きました。戸口は開いて居りました。私はその中へ夢中になつて轉げ込みました。すると、妻が出て来て、私を抱き上げながら、廣間に連れて行きました。私はそこで深く睡り込んでしまひました。が、眼が醒めて見ると、私は例の花園の門口に横はつてゐるでは御座いませんか。

苦しい中から、私は立ち上つて、わが家へ歸りました。家に這入ると、母は私のことを思つて泣きながら、「お、わが子息よ、お前は一體何處にあるのだえ？あ、それが知れたら？」と叫んでゐるので御座いました。で、私は彼女の傍へ寄つて、彼女にわが身を投げ掛けました。母は私を見ると、私が病氣であることを覺りました。私の顔には黄色と黒みが混つて浮かんであつたので御座います。私は従妹のことを、彼女が親切にしてくれたことを憶ひ出しました。そして、彼女が私を愛してゐたことを今更のやうにつく／＼感じました。私は彼女のことを想つて泣きました。母も亦一緒になつて泣きました。そして、私に申しました。「お、わが子息よ、お前の阿父さんは亡くなつたのだよ。」それを聞くと、私は一層腹が立つて、氣が遠くなるまで泣きました。で、正氣に返ると、従妹が生前坐りつけた場所を見遣りながら、あまりの悲しさに、二たび氣絶するまで泣きました。私は夜半まで泣き止まないで、しく／＼して居りましたが、その時母が私に申しました。「阿父さんが亡くなられてからもう十日になるんだよ。」が、私はそれに答へました。「私は従妹のことより外には、何人のことも想つてゐるんぢやないんですよ。私の身に起つたことは當然の報いですからね。だつて、私は従妹があれほど私を愛してゐてくれたのに、打捨り放しにして置いたんですもの。」すると、彼女は訊きました。「ぢや、お前は一體何んな目に遇つたのだえ？」で、私は自分の身に振りかゝつた一伍一什を母の前に物語りました。すると、彼女はそれに答へて申し

ました。「さう言ふことがお前の身に起つて、しかも殺されずに済んだのは、本當に有難いことだ。神様は褒め讃へられてあれよ。」それから私が恢復するまで傷口の手當てをしてくれました。やがて私は元通りの元氣を取り返しました。すると、彼女は私に申しました。「さあ、お前の従妹が私に預けて行つたものをお前に出して上げるよ。それはお前の所有だからね。だが、あの娘は、お前があの娘のことを想ひ出して泣いてもくれず、又他の女に向けてゐた戀情を振り捨て、しまはないうちは、それを出して見せてくれるなど、固く私に念を押し行つたのだよ。だが、お前も今はもうさう言ふ氣持ちにおなりのやうだからね。」かう言ひながら、彼女は立ち上つて、匣を開けて、例の羚羊の繪を描いたリネンの布帛を取り出しました。それは元々、私が彼女にくれて遣つたもので御座いました。私はそれを取り上げました。見ると、その上には、私に對して酬いられない戀を唄つた詩句が書いてありました。又その中から落ちた紙片には慰藉と助言の言葉が認めてありました。

私はそれを讀んで、その意味を了解すると、又更に泣きました。母も同じやうに泣きました。私は飽かずそれを眺めて、夜になるまで泣いて居りました。かうして全一年の間過したので御座います。所が、その間に私の町の商賈達が——今この隊商のうちに私と一緒に來てゐる人達ですが——旅に出懸ける用意を始めました。で、母が私に、「お前も支度をして、あの人達と一緒に出懸けて見たら可いだらう。旅に出れば、お前のその悲しみを紛らすことも出来るだらうから、この隊商

が歸つて來るまで、一二年行つて來るが可からうよ。さうしたらお前の心も晴々するだらうからね。」と勧めてくれました。そして、飽くまでそれを勧めて止まぬので、私も商品の用意をして、かうして、あの人達と一緒に旅へ出るには出たのですが、まだ私の涙は乾き切らないので御座いますよ。私は驛々へ駐る毎に、このリネンの布帛を披げながら、この繪を見て、従妹のことを想つては、御覽の通り泣いてゐるので御座います。何しろあの女は一生懸命に私のことを想つて、私の不親切からたうとう死ぬやうな事になつたので御座いますからね。實際、あの女は私に善いことばかりしてくれましたのに、私はあの女に悪いこと許りして返しました。で、商賈達がこの旅行から歸る時には、私も一緒に歸りますが、恰度一年間家を明けたことになるので御座います。ですが、私の悲しみはだん／＼増すばかりで、樟腦の島と水晶城を通つて來たために、餘計にそれが増して來たので御座いますよ。

この島々は七つ御座いまして、王様はシャール・ゼマーン王と仰せられます。この王様にはツーニヤと言ふ姫君がおりなされました。聞く處によると、この姫は羚羊の繪模様を考案されたさうで、私の手許にゐるこの繪模様もその一つだと言ふことで御座います。私はこの噂を聞いた時、その姫君に會ひたくて堪らなくなりました。で、この隊商がその國へ入り込んだ時、澤山樹々の生えてゐる花園の近くへ出懸けて行つて、その邊をうろついて居りました。この花園の監督は年老つた老翁で

御座いました。で、私は彼に申しました。「お、老翁よ、この花園は何誰の所有ですかねえ。」彼は答へました。「王の姫君なるゾーニヤ姫のものですよ。私達は姫君の宮殿の下に居るんです。お前さんもこの花園が見たければ、私用門を開けて這入つて、お庭を拜見して、いろ／＼な花の香りを嗅いでおいでなさい。」で、私は彼に申しました。「姫君がお通りになるまでお庭に坐らして置いて下さいませんか、私は姫君を一目拜みたいのですがね。」老翁は答へました。「それは別段差支へないだらうよ。」で、私はそれを聞いた時、幾許かの金子を與へて、「何か食べる物を買つて来て下さい。」と申しました。彼は金子を受取ると、大いに喜んで、門を開けて私を入れて呉れました。二人はそれから奥深く進んで、景色の好い處へ陣取りました。彼はそこへ美味しい果實を持つて来てくれました。そして、「私が戻つて来るまで此處に坐つておいでなさい。」と申しました。そして、私を残して置いて行つてしまひました。少時経つと、彼は焼いた羊肉を提げて戻つて参りました。私どもは鱈腹それを食べました。が、私は心の中では早くその姫君を見たいものだ、そればかり考へてゐました。すると、見よ、門が開きました。それを見ると、彼は私に申しました。「さあ立つてお隠れなさい。」で、私は立ち上つて姿を隠しました。間もなく一人の黒奴の宦官が戸口から頭を出して、「老翁よ、誰かお前と一緒にゐるのかえ。」と申しました。彼は「いゝえ。」と答へました。「ぢや、門を閉めなさい。」と、宦官は申しました。で、老翁は花園の入口を閉めました。すると、見よ、

ゾーニヤ姫がそこに現はれました。私は一目彼女を見て月が地上に舞ひ下つたのではないかと思ひました。私の心は亂れ、渴ゑた者が水を望むやうに、姫が戀しくなりました。少時すると、彼女は戸口を閉めて行つてしまひました。それから私は花園を出て、迎も彼女に近寄ることは出来ないものと諦めながら、一人旅宿へ立ち歸りました。それから仲間が出發の準備を始めましたので、私も支度をして、一緒に貴方様の都へ遣つて参りました。そして、此處へ到着して、貴方様にお目に懸つたやうな次第で御座います。——これが私の身上話で御座います。どうぞ貴方様の上に平和が御座いますやうに！

ター・ジェル・ムルークとゾーニヤ姫の物語のつゞき

ター・ジェル・ムルークはこの話を聞いた時、ゾーニヤ姫に對する想ひに胸を掻き亂されました。それから馬に乗つて、アジーズと一緒に連れながら、父の都へ歸つて参りました。そこで彼に一軒家を與へて、必要の品をすべて調べてやりました。それから彼を一人残して置いて、自分は宮殿に歸りました。彼の頬には潸然として涙が流れました。つまり彼は話を聞いただけで、見て、一緒になつたと同じやうに感動させられたので御座います。で、こんな状態であるうちに、阿父さんが彼の許へ遣つて参りました。そして、彼の顔色が悪いのを見て、彼が心配と悲しみに惱まされてゐるのを知りま

した。そして、阿父さんは彼に向つて申しました。「お、わが子息よ、俺に事情を打ち明けて、何うしてそんなに顔色を悪くしてゐるのか聞かしてお呉れな。」で、彼はツニーヤ姫に就いて聞いたことを残らず阿父さんの前に物語りました。そして、たゞ口傳へに聞いただけで、見ぬ戀に陥つた次第を打ち明けました。それを聞くと、阿父さんは彼に申しました。「お、わが子息よ、その女の父は國王である。それに、その國は此處から大分隔つてもゐる。だから、そんな考へは棄て、阿母さんの御殿へ行きなさい。あの御殿には月のやうに美しい女奴隷が五百人も居るよ。その中に何れなりと氣に入つたのを連れて來なさい。若し氣に入つたのがなければ、ツニーヤ姫よりもつと美しい國王の娘をお前に配合はせて上げるからね。」が、彼はそれに答へました。「お、わが父上よ、私は他の女は欲しくないんです。私を見た羚羊の繪模様を描いたのはあの女の外にないのですからね。私は何うあつてもあの女が欲しいんです。それが出來なければ、沙漠へ逃げて行つて、あの女のことを想ひながら自殺してしまひますよ。」

そこで父の王は申しました。「少時辛抱しておいで、お、わが子息よ、一つその女の阿父さんの許へ使者を立て、娘を嫁に欲しいと言つて遣らう。俺がお前の阿母さんを貰ふ時に遣つたやうにしてな。そして、お前の望みは叶へてやるよ。で、萬一先方で同意しなければ、相手の國を騒がせて、前軍が向うへ乗り込んでも、後軍はまだ俺の手許に残つてゐる程の大軍を差し向けて遣らうわい。」それ

から彼は若者アジーズを召し寄せて申しました。「お、わが子息よ、お前はその道を知つてゐるかね。」「はい、存じて居ります。」と、彼は答へました。「では、一つ宰相と一緒に往つて貰ひたいものだ。」と、國王は申しました。アジーズはそれに答へました。「畏承りました、お、一代の王様よ。」で、國王は宰相を召し寄せて申しました。「お前の智慧を絞つて、子息の事件を旨く取計らつてくれよ。樟腦の島へ渡つて、國王の娘を嫁に貰つて來て貰ひたいのだがね。」「畏承りました。」と、宰相は答へました。一方ター・ジェル・ムルクは自分の居間に歸ると、一層心が亂れて、逆も我慢がして居られなくなりました。そして、氣を失つて倒れたまゝ、明くる朝まで正氣に返りませんでした。朝になると、父君がまた彼の許へ遣つて參りました。そして、彼の顔色が一層變つて、一層蒼醒めてゐるのを見ました。で、辛抱してゐるやうにわが子を勵ましなが、屹度配合はせてやるからと固く約束いたしました。

そこで國王は宰相とアジーズとに旅装を調へさせて、贈物を手渡ししました。彼等は日夜旅をつゞけて、行手に樟腦の島の見える處まで來た時、ある河岸の土手の上に足を駐めました。そして、一行から先觸れの使者を國王の許へ立て、近々到着の旨を知らせました。この使者を出してからまだ半日も経たぬうちに、彼等は一リーグの彼方に國王の侍従や貴族達が彼等を出迎へに進んで來るのを見ました。彼等は一行を出迎へて、國王の許まで案内して參りました。で、一行は國王の前に贈物を

差し出してから、四日の間宮殿に旅の疲れを休めました。五日目に、宰相は立つて國王の前に伺候しながら、使者の口上を述べて、自分達の遣つて来た主旨を言上いたしました。所が、國王は何と答へて可いか當惑してしまひました。と言ふのは、彼の娘は結婚を好まなかつたからで御座います。で、彼は時の間床に頭を垂れて居りました。それから漸く顔を上げて、一人の宦官に申し附けました。「姫君の許へ行つてな、今こゝでお前が聞いた通りのことを申し上げた上、この宰相殿の御來旨を傳へて来てくれ。」宦官は早速立つて行きました。そして、間もなく歸つて来て申しました。「おゝ一代の王よ、私はゾーニヤ姫の御前へ參つて、只今伺ひました通りを申し上げました。所が、姫は大層御立腹で、棒を取つて私に向ひながら、今にも私の頭を打ち据ゑようとなされました。で、私は這ふ這ふの體で逃げ歸つたので御座います。そして、私に仰有いますには、若しも父上が強つて私を結婚させようとなさるなら、私は結婚した男を殺してしまふぞと、かやうに御座います。」で父の國王は宰相とアジーズに向つて申しました。「何卒國王に御挨拶を申上げて下さい。そして、この事を傳へてな、俺の娘は結婚を望んでゐないといふことを宜しく申上げてくれよ。」で、仕方がないから、宰相は隨伴の者を連れて、不首尾の儘すごとくと立ち歸りました。そして幾日の旅行を續けた擧句、國王の前へ出て、事の次第を申上げました。國王はこれを聞くと、主なる役人どもを召し寄せ、直様軍勢を集めて出征するやうに申付けました。所が、宰相は國王に申しました。「それはお廢し

なされませ。と申すのは、何もあの國王が悪い譯では御座りませぬ。跳ねつけたのはあの娘で御座ります。その娘は此方の申出でを聞いた時、阿父様が強つて私を結婚させようとなさるなら、私は結婚した男を殺して、自分も後から死んでしまふと、かうまで申してゐるので御座いますからね。」國王は宰相のこの言葉を聞いて、子息のター・ジェル・ムルークのために心配しながら、かう申しました。「俺がその女の父と兵を交へて、娘を擒にすれば、その女は自殺してしまふだらうな。」そこで彼は子息のター・ジェル・ムルークに有の儘を包まふ打ち明けました。王子はそれを聞くと、父の王に申しました。「おゝ、わが父上よ、私はその女がなくては生きて居られませぬ。で、私はこれから行つて、何うにかしてその女と會見の出来るやうな手段を運らして見ます。縦令それがために死んでも厭ひませぬ。私にはこれより外に執る道が御座いませぬからね。」父の王は申しました。「何う言ふやうにして行く積りかね。」彼は答へました。「私は商賈の服裝をして行きますよ。」「お前が何うしてもさうすると言ふなら、」と、國王は答へました。「宰相とアジーズを一緒に連れて行くがいゝよ。」それから彼は財庫から金子を取り出して、黄金一萬片に相當する價格の商品を調へて遣りました。この手段には父の王も至極賛成なものでした。で、夜になると、ター・ジェル・ムルークはアジーズの家に行つて、其處で一緒に夜を明しました。が、ター・ジェル・ムルークの心はずつかり戀に囚はれてゐるので、何を食べても美味しくもなければ、寢ても寢附かれませんでした。さまざまな想ひ

にばかり追はれて、宛然その中に溺れて居りました。そして、愛人のことを想うては、涙を流して、おい／＼泣いて居りました。アジーズも亦、従妹の上を想ひ出して、一緒に泣いて居りました。かうして夜が明けるまで二人とも泣きつゞけて居りましたが、朝になるとター・ジェル・ムルークは立ち上つて、自分の阿母さんの許へ参りました。彼はもうすっかり旅装を調べて居りました。で、彼女はその所因を訊ねました。彼は事實をそのまゝ、彼女に物語りました。すると、彼女は黄金五萬片を彼に與へて、別れを告げました。彼はその儘彼女の許を出て参りましたが、その間彼女はわが子が無事であるやうに、又彼が愛の目的と一緒に居ることが出来るやうにと祈りつゞけて居ました。それから彼は阿父さんの許へ伺つて、出立の許可を乞ひました。國王は快くそれをお許しになつて、更に黄金五萬片を與へました。又彼のために、都の外廓に天幕を張れと命令を出されました。

で、大きな天幕が彼の爲に張られました。一行は二日間そこに滞在してから、いよいよ旅路に上りました。ター・ジェル・ムルークはアジーズを極めて打解けた態度で親切に働つてやりました。そして彼に申しました。「お、わが兄弟よ、私はこれからもうお前とは別れられないよ。」「私も亦御同様で。」と、アジーズはそれに答へました。「何卒貴方様の御足の下で死にたいと思つて居ります。ですが、お、わが兄弟よ、母のことを想ふと、私の心は悲しくなるので御座います。」そこでター・ジェル・ムルークは申しました。「私達が望みを達すれば、何事も好くなるんだよ。」所で、宰相

はター・ジェル・ムルークに力めて辛抱してあるやうに忠告しました。アジーズは又詩句を誦したり、昔語をしたりして彼を慰めました。かうして日夜旅を続けながら、二箇月の間途を急ぎました。ター・ジェル・ムルークは旅の長々しさに飽き／＼いたしました。そして、烈しい慾望と情熱と放心とは彌が上にも募りました。で、目指す都へ近づくと、彼は一方ならず喜んで、その心が、りや悲嘆もさらりと止まりました。

彼等は商賈の装ひをして都に入りました。王子も同様な服装をしてゐるので御座います。で、彼等は商人の宿として知られた場所に参りました。それは大きな商館で御座いました。ター・ジェル・ムルークはアジーズに申しました。「これが商人の宿かね。」アジーズは答へました。「左様で御座います。ですが、私が以前隊長と一緒に泊つたのとは違つて居ります。それよりは、この方が上等で御座います。」そこで、彼等は駱駝を休ませて、荷を卸したり、倉庫に商品を預けたりして、四日の間そこで休息しました。宰相はそれから自分達のために廣い家を借りようと言ひ出しました。二人はそれに賛成して、饗宴でも張られるやうな廣大な家を借り入れました。そして、彼等はそこに住居を定めました。宰相とアジーズとは、成すべき途を知らないで、たゞ途方に暮れてゐるター・ジェル・ムルークのために、何か計畫を立てようと頻りに研究をいたしました。宰相は、何うしても自分が店を開いて織物の市場で取引をするより外に方法がない思ひました。で、ター・ジェル・ムルークとアジ

ーズとに向つて申しました。「ねえ、何時までもかうしてゐたのでは、迎も望みは達しられませんよ。で、今不圖想ひ附いたことがあるんですがね、それが神様の思召しであれば、多分都合よく行くだらうと思ひますよ。」そこで彼等は答へました。「何なりと貴方が好いと思つたことをして下さい。祝福は年長者にあるものですからね。それにこの事件の解決に一身を委ねておいでで、貴方であつて見れば尙更さうで御座いますよ。ですから、想ひ附きの事がありましたら、何卒私どもに話して聞かせて下さい。」で、彼はター・ジェル・ムルークに向つて申しました。「私の意見と言ふのは、貴方の爲に上等な織物の市場に店を開くのです。そして、貴方が店に坐つて賣買をなさるので御座いますね。と言ふのは、上流の人達は言ふまでもなく、一般の人々も皆こんな織物を買ひに参るものですからね。で、貴方がそこに坐つておいでになれば、それが神の思召しであるなら——あ、神の御名は讃へられてあれよ——この事件は旨く運ぶだらうと思ひますよ。殊に貴方は綺麗な方でおいで、すからね。それからアーズを貴方の附人として、矢張り店に坐らして置いて、貴方のお手傳ひをさせるので御座いますよ。」ター・ジェル・ムルークはこれを聞くと、「成程それは上分別だ。」と申しました。そして、直ぐに商賈の服装を取り出して、身に着けながら、若い附人どもを随へて出懸けました。それから、その中の一人に黄金の一千片を與へて、店を構へるやうに申附けました。彼等は上等な織物の市場まで遣つて参りました。商賈どもはター・ジェル・ムルークを見ると、そ

の美しい人品に見惚れて、心を躍らせながら、こんなことを言ひ出しました。「リドワーンが樂園の門を開け放しのまま、打捨つて置いたので、この素晴らしく美しい青年が飛び出して来たのぢやないかね。」——又一人が申しました。「これは多分天使の一人かも知れないね。」で、一行は商賈達の中へ這入つて行つた時、市場の老翁の店は何れかと訊ねました。すると、商人どもが彼等を案内してくれました。で、彼等はその老翁の許へ参りました。一行が近づく、その老翁や居合せた商賈どもは立ち上つて、丁寧に彼等を迎へました。特に風采の優れた宰相に對して左様いたしました。と言ふのは、彼を年を取つた尊敬すべき長者と見たからで御座います。そして、彼がター・ジェル・ムルークとアーズを伴つてゐるのを見ると、この老翁は確かに二人の青年の父親に相違ないと思つたので御座います。宰相は彼等に申しました。「貴方がたの中で何誰が此市場の老翁なのですか。」「此人で御座います。」と、彼等は答へました。で、宰相がつくつくその人を見ると、いかにも眞面目な、尊敬すべき人柄の老人で、その周圍には召使や若者を隨へて居りました。市場の老翁は親しげな言葉で彼等に挨拶をしながら、非常に鄭重に待遇しました。そして、自分の傍に坐らせて、彼等に申しました。「何か私どもに遣して頂けるやうな御用がおありで御座いますか。」宰相は答へました。「左様です。私は御覽の通りの老人で、この二人の若者を持つて居ります。二人を連れて諸國を旅して参りましたが何處の都でも必ず一年間はそこに足を駐めて、若者達にその土地の見物をさせたり、その土地の人達

と親しく交はらせたりして来たので御座います。で、今度こちらの都に参りましたが、矢張り暫く滞在してゐようかと思ひます。それに就いては、一つ貴方にお願ひして、一番上等の店を一軒借して頂いて、二人にそこで商賣をさせようかと、かう思ふので御座います。左様すれば、二人が御當地の見物も出来すし、皆様方の御様子も分るし、賣買の道にも、又他の取引にも経験が積まれると言ふもので御座いますからね。」

そこで市場の老翁は答へました。「それは別に差支へ御座いませんよ。」そして、二人の青年を見遣りながら、大いに喜びました。それから立ち上つて、召使のやうに二人の前に立ちました。それから又出懸けて行つて、二人の爲に店の用意をいたしました。その店は市場の真中にありました。他にこれ程大きな店もなければ、これ程美しいのも御座いませんでした。眞個廣くて、綺麗に飾り立て、象牙と烏木の戸棚が附けて御座いました。老翁は宰相に（彼も亦商賣の姿をして居りました）鍵を渡して申しました。「神様が貴方のお二人の子息さん方に祝福を與へたまはむことを！」宰相は店の鍵を受取つてから、召使どもと一緒にその店へ参りました。そして、持つて来た商品や織物や珍貴な品物を悉くそこへ移すやうに召使どもに吩咐けました。これ等の品物は富の寶庫に値ひしてゐました。彼等はそれ等の品物を全部その店に移しました。そして、一同その夜を明かして、朝になると、宰相は二人の若者を浴場に連れて行きました。そこで三人は汗を洗ひ流して、思ふ存分の快を取つてから

家に歸りました。それから入浴の疲勞を癒すために一休息して、二たび食べたりの飲んだりしました。その夜は自分達の住家で愉快の限りを盡して過しました。明るる朝、睡眠から覺めると、一同沐浴をして、朝の祈禱を捧げてから、朝の飲料を飲みました。太陽が射して来て、市場や店が開くと、彼等は住家を出て、市場へ行つて自分達の店を開けました。召使どもは前々から綺麗に飾り立て、絹の敷物を敷き詰め、その真中に二枚の褥を敷いて置きました。それが一枚で黄金の百片もする程のもので御座いました。そして、その褥の上には王様のお敷きになるやうな毛皮に金で縁を取つたのを延べました。ター・ジェル・ムルークは一枚の褥の上に坐り、アジーズは他の一枚の上に坐りました。宰相は店の中央に陣取つて、召使どもをその前に立たせました。町の人々は彼等の噂を聞くと、そこへ群がつて来ました。彼等はその品物を賣りました。ター・ジェル・ムルークの噂は町中に擴がつて、その美しいといふ評判は火のやうに町中に燃え擴がりました。かうして町の人々に押し懸けられながら、彼等は數日間をつゞけました。その後宰相はター・ジェル・ムルークに向つては、自分の祕密を露はさないやうにと誡め、アジーズに向つては、よく彼を見張つてゐるやうに吩咐けて置いて、自分は一層自分達の利便になるやうな手段を講ずるために、住家へ引き取りました。その間ター・ジェル・ムルークとアジーズとは一緒に坐つて話しをして居りました。その時、前者は申しました。「若一すると、ゾーニヤ姫の許から誰かが来るかも知れないね。」

かやうにしてター・ジェル・ムルークは日夜を過しながら、少しも睡りませんでした。烈しい慾望に壓倒されて、日増しに瘦せて弱々しくなるばかりで、睡眠の快も取らねば、飲物や食物も口にしませんでした。けれども、彼は依然として満月のやうで御座いました。で、或る日彼が坐つてゐると、見よ、一人の老婆が二人の女奴隷を連れて遣つて参りました。そして、彼の方へ進み寄りながら、その店頭立ち停りました。彼の優雅かな人品や、綺麗な可愛らしい容貌を見て、その美に見惚れながら、彼女は申しました。「貴方を創りたまひし神の完全性は讃へられてあれよ。貴方を全人類に對する誘惑物として創りたまひし神の完全性を讃へられてあれよ。」——彼女は彼から眼を離さないで、二たび申しました。「これは人間ではありませんね、氣高い天使に相違ありませんよ。」それから一層近寄つて、彼に挨拶をいたしました。彼もその挨拶を返して、立つて出迎へながら、相手の顔を見てにっこり笑ひました。彼はアジーズの合圖でかやうにいたしましたので御座います。それから自分の傍に老婆を坐らせて、彼女が疲れを休めてゐる間一生懸命に彼女を煽いでやりました。彼女は申しました。「お、わが子息よ！ お、凡ての全き性質と爛雅さとを具へたまふ君よ。貴方はこの國のお方ですか。」——ター・ジェル・ムルークは流暢で優しい。人を惹きつける聲で答へました。「大神にかけてお、わが夫人よ、私はこれまで一度もこの國へ這入つたことが御座いませんでした。たゞ見物して娛しみたい許りに、この國に住居を求めたので御座います。」すると、彼女は丁寧な歓迎の言葉を述べ

て申しました。「何んな品物をお持ちで御座いますか。何か美しいものを見せて下さいな。美しい方は美しい物でなければお持ちなさらないものですからね。」ター・ジェル・ムルークはそれを聞いて、胸が躍りました。が、彼にはその意味が能く分りませんでした。すると、アジーズが彼に合圖をいたしました。で、彼は彼女に申しました。「私は王様や王様のお姫様方にでなければ向かないやうな品なら、お望み通りの物を何でも持つて居ります。一體何誰の物をお求めになるので御座いますか。それに依つて適當の品をお目に掛けませう。」——彼はかう言つて訊ねて見て、相手の返辭に依つて、彼女の言葉の意味を悟らうとしたので御座います。彼女は答へました。「私はシャー・ゼマーン王の姫君なるゾーニヤ姫に向くやうな品が欲しいので御座いますよ。」ター・ジェル・ムルークは戀人の名を聞いて、飛び立つばかりに喜びました。そして、アジーズに申しました。「お前の手許にある一番立派な品物を此處へ持つておいでなさい。」すると、アジーズは一つの包みを彼に渡しました。そして、彼女の前でそれを解きました。ター・ジェル・ムルークは彼女に申しました。「あのお方には何れが宜しい御座いますか、何卒この中からお選び下さい。それは私の外には誰も持つてゐないやうな品で御座いますからね。」老婆は黄金の一千片にも値ひするやうな品を選びました。そして申しました。「これは何程ですか。」彼は申しました。「こんな詰らない物の爲に、何で貴方のやうなお方と賣買が出来ませう？ 貴方と知り合ひにして下さつた神は讃へられてあれよ。」——すると、お婆さんは叫びまし

た。「貴方のお美しい顔に對して、私は夜明けの主の御保護を祈りますよ、眞個貴方のお顔はお美しい！ それに又なされることその通りで御座いますからね。貴方を御自分の所有にしておいでの方に喜びあれ、その方が貴方と同じやうに美しく恵まれておいでの女でしたら、尙更さうですよ。」これを聞くと、ター・ジェル・ムルークは轉げる許りに笑ひました。そして、心の中に思ひました。「あゝこの意地悪婆さんを通じて、わが慾望を遂げしめたまふお方よ。」それから彼女は彼に申しました。「おわが子息よ、貴方は何といふお名前ですの？」彼は答へました。「ター・ジェル・ムルークと申します。」すると、彼女は答へました。「これは王家の名前ぢやありませんか。でも、貴方は商賈の服装をしていらつしやいますね。」で、アジーズは答へました。「家の人達が大變この方を可愛がつて、大切にしていらつしやる餘りに、かう言ふ名をお命けになつたので御座いますよ。」老婆は答へました。「成程仰有る通りで御座いませうね。たとひ貴方の魅力に心を亂される者が何人あつても、神様は貴方を嫉む者の悪心からお護り下さいますやうに！」

それから彼女はその反物を持つて歸つて行きました。彼女は青年の美しさ、愛らしさ、しとやかな姿にすつかり氣を奪はれてしまつたので御座います。で、彼女はター・ニヤ姫の許へ戻つて行つて、彼女に申しました。「お、わが姫君よ、私は貴方に美しい反物を買つて参りました。」——「見せて御覽。」と、姫は申しました。で、彼女は答へました。「お、わが姫君よ、これで御座います。披げて

御覽なさいませ。」姫はそれを見て彼女に申しました。「お、わが乳母よ、本當にこれは綺麗な布地だね。私達の都では今までこんなのを見たことがないね！」——「お、わが姫君よ。」と、老婆は答へました。「これを賣つてゐる男の美しさと言つたら、これどころぢやないので御座いますよ。リドワンが樂園を開け放しにした儘閉めるのを忘れたので、この布地を賣る男がその門から出て來たのかと思ふやうで御座いました。あの方が貴方と御一緒においでしたら、さぞ好いでせうよ。何しろあの方を見ては誰でも心を動かされますからね。見物のためにこんな布地を持つて、この都へ來たのださうで御座いますよ。」——老婆がさう言ふのを聞いて、ター・ニヤ姫は笑ひながら申しました。「大神がお前をお苦しめになるよ、本當に厭らしいお婆さんだこと！ お前そんな下らないことを言つて、氣が狂つたんぢやないのかえ。」彼女はそれから附け加へて申しました。「よく檢めて見たいから、この布地を私にお呉れな。」で、老婆はそれを彼女に渡しました。彼女は改めてそれを見ました。所が僅の尺しかないのに、値は非常なもので御座いました。彼女はその美しさに見惚れました。實際、彼女も生れてからまだこんな物を見たことがないので御座いました。その時老婆は彼女に申しました。「お、わが姫君よ、貴方もこの布地の持主を御覽になつたら、屹度世界中で一番綺麗な男だと仰有いますこととせうよ。」すると、ター・ニヤ姫は彼女に申しました。「その方に何かかうしたいと言ふやうな望みがあるか訊いて御覽かい。私達に仰有れば、それを叶へて上げることも出来るだらうにね。」老

婆は頭を振つて、「大神が貴方の聰明を護りたまはむことを！ 大神にかけて、あの方にも希望はありますよ。だつて、希望のない人が、この世に御座いませうか。——」では、その方の許へ行つておいで。」と、ツニーヤ姫は申しました。「そして、その方に御挨拶をして、わざ／＼この都へおいで下さつたことを有難く思つてゐます。就いては、何かお望みのことが御座いましたら、頭と眼にかけて、私どもの手で叶へて進ませうと、かう言つて來るんだよ。」

で、老婆は直様、ター・ジェル・ムルクの許へ引き返しました。彼は彼女を見ると、喜びに胸が躍るのを覺えました。そして、立ち上つて出迎へながら、彼女の手を取つて、自分の傍に坐らせました。で、彼女は坐つて一息吐くと、ツニーヤ姫の言葉をその儘彼に傳へました。それを聞くと、彼は無上の喜びに満たされました。彼の胸は豁けました。そして、心の中に、「俺の望みも達せられたわい。」と思ひました。彼はそれから老婆に向つて申しました。「では、私の手紙を姫君の許へ持參して御返事を頂いて來て下さいな。」彼女は答へました。「宜しう御座いますとも。」で、その返辭を聞くと、彼はアジーズに向つて申しました。「インキ壺と紙と眞鍮のペンを取つて下さい。」アジーズはそれ等の品を彼に渡しました。そこで、彼は次のやうな詩句を認めました。——

お、わが願ひの的なる人よ、われは離れある惱みの堪へ難さを述べて、君に文をば參ら

すなり。

君に知らせん、第一には、わが心の熱情を、第二には、わが慾望と切なる思慕の情とを。

第三には、わが玉の緒の絶えんとして耐へ難きを、第四には、わが戀の烈しさのみ身に殘れるを。

われを問ふ、第五に、君を相見るの日は何日なりやと、第六に、われ等の結合の日は何日なりやと。

彼はそれからその下に書き加へました。「この手紙は思慕と期待との牢獄に身を投じたる慾望の囚虜より差し上ぐるものなり。彼に取りては、假令幻影になりとも、その望みの目的物と會見するにあらざれば、到底自由の身となるを得ず、彼は戀人と離れ居る辛き苦しみを忍び居れば。」——筆を下に置くと、涙は瀧津瀨のやうに流れました。彼は次のやうな二句を書き添へました。——

われは流るゝ涙ながらに、君にしたゝめ參らするなり。その間も眼より落つる涙は絶ゆる暇なし。

さりながら、われはわが主の恩寵に望みを失はず。何日かわれ等の結合の日の來るべきを

思へば。

それから彼は手紙を褶んで、封をして、それを老婆に渡しながらかきました。「これをゾーニヤ姫に渡しして下さい。」彼女は、「畏承まりました。」と答へました。で、彼は老婆に一千片の黄金を興へて、「これは私からの贈物として取つて置いて下さい。」と申しました。老婆はそれを受取つて、彼のために祈禱を捧げながら出て行きました。

彼女はすん／＼歩いて、ゾーニヤ姫の許まで参りました。ゾーニヤ姫は老婆を見ると申しました。

「お、わが乳母よ、あの方は私達に何んな事をしてくれとお言ひだえ？」——「お、わが姫君。」と彼女は答へました。「あの方は手紙を私に托されました。尤も、何が書いて御座いますか、私は存じませんがね。」かう言ひながら、彼女にその手紙を渡しました。で、ゾーニヤ姫はそれを受取つて讀んで見ました。そして、その文句の意味が分ると、大きな聲で叫びました。「その商賈は何處から来たのだえ？ 私と手紙の往復をしたいなんで、一體何を望んであるんだらうね？」かう言つて、自分の顔をびし／＼打ちながら、「神様さへ（その名は讀ふべきかな！）恐れなければ、其奴をその店頭で磔刑にしてやるんだがね！」と叫びました。老婆は吃驚して、彼女に申しました。「その手紙には貴方のお心を亂すやうなことが書いてあるので御座いますか。何か不自由なことを訴へても御座い

ますか、それとも布地の代價を呉れとでも申すので御座いますか。」——「お前に禍あれ！」と、彼女は答へました。「そんなことは書いてないよ。戀だの、愛だのと、厭らしいことが書いてあるだけさ。これは皆お前の指金だよ。でなければ、この男が何うしてこんな文句が使へるものかね。」——「お、わが姫君よ。」と、老婆は答へました。「貴方はこの立派な宮殿にお住居でいらつしやいますもの、誰だつて貴方のお傍へ近づくことは出来ませんわ。空を飛んでる鳥だつて近寄ることは出来ませんよ。大神は貴方を非難や譴責からお護り下さいます！ 犬が吼えた位で何もお怖がりになることは御座いますまい。私はその手紙に何んなことが書いてあるか存じませんが、何卒私がそれを持つて来たとお腹立ちのないやうに願ひます。でも、御返事はお書きにならなくてはなりませんまいかと思ひますわ。そして、殺してしまふと脅しつけて、以後こんな輕薄な言葉を使はないやうに書いてお遣りなさいませ。さうすれば、これからは慎んで、二度と再びそんなことはいたさないでせうからね。」——ゾーニヤ姫は申しました。「でも、返事を遣ると、餘計に先方から執拗くされやしないかと、それが心配だね。」ところが、老婆は、それに答へました。「脅しつけられて、罰を蒙むると知れば、何んな男でも今の行跡を改めませうよ。」で、彼女は申しました。「インキ壺と紙と眞鍮のペンを持つておいで。」で、侍女どもが、それ等の品を取揃へて持つて参つた時、彼女は次の詩句を認めました。

戀と苦しみ、不眠、忘我の情熱と心遣ひとを装へる者よ、
お、惑へる者よ、汝は月に會見を求むるか、誰が月に望みを達しられやうぞ？
われは忠告す、汝の慾望を捨てよ、自ら制せよと。汝は危き淵に臨み居れば。
汝にして、再びかゝる呆言を繰返さば、われは汝にいと酷しき罰を加へむ。
凝へし血潮より人類を創り給ひし神にかけて、太陽と月とに光を與へ給ひし神にかけて、
汝の申出でを再び繰返すならば、われは正しく汝を木の幹の上に磔刑にせむ。

それから、彼女は手紙を巻きをさめて、老婆に手渡ししながら申しました。「これをその男に渡し
て、これからは、あんな言葉をお慎しみなさいと言つておいで。」彼女は答へました。「はい畏承りま
した。」

彼女は手紙を持つたま、悦び勇んで自宅に歸つて、一夜を明かしました。そして、明くる朝ター
ジェル・ムルークの店に行きました。ター・ジェル・ムルークは彼女の来るを待つておりました。で、
彼女を見ると、いきなり喜んで飛び上りました。そして、彼女が自分の傍近く来た時、立ち上つて相
手を迎へながら、自分の傍に坐らせました。彼女は手紙を取り出して、「何卒中を讀んで下さい。」
と言ひながら、彼に渡しました。それから又相手に申しました。「ゾーニヤ姫は貴方のお手紙を見て

大層御立腹でしたよ。ですが、私が旨く御機嫌を取つて、冗談を言つて笑はせてしまつたので、あ
の方も貴方が可哀想になつて、この御返事を下さつたのですよ。」ター・ジェル・ムルークはそれに對
して、彼女にお禮を申しました。そして、一千片の黄金を彼女に與へるやうにアジーズに吩咐けなが
ら、その手紙を開けて見て、その意味を了解しました。彼は烈しく泣きました。老婆も彼に對する同
情の念に動かされて、その泣き聲と訴へる言葉とを聞くと、自分も悲しくなりました。彼女は彼に申
しました。「お、わが子息よ、何か知らぬが、その手紙には貴方を泣かせるやうなことが書いてある
ので御座いますか。」彼は答へました。「あの女は私を殺すの、磔刑にするのと脅して、あの女に文
通することを禁じてゐるんですよ。ですが、あの女の許へ手紙を遣らない位なら、私は死んだ方が
優しですわい。ですから、この手紙に返事を書いて、あの女の好きなやうに何うなりともして貰ひま
せうよ。」——「貴方の若さにかけて、」と、老婆はそれに答へました。「私は自分の生命を賭けても、
貴方のお望みが叶ふやうに、貴方の胸の中の想ひが成就するやうに計らひませう。」すると、ター・ジ
エル・ムルークは申しました。「貴方のして下さることには、屹度お禮をいたしますよ、何事も貴方次
第で極まるのですからね。何故と言ふに、貴方は色々な事件の斡旋に慣れておいでだし、計略もお上
手だし、何んな六かしいことでも貴方に取つては易しいのですからね。そして、神様は何事も旨く行
くやうにして下さいませうよ。」かう言ひながら、彼は紙を取つて、次の詩句を認めました。——

彼女はわれを殺さむと脅せり。あはれ、わが嘆きよ。殺さるゝことは、われに取りていと易し。死は定められたれば。戀する者に楽しみを妨げ、それに壓迫を加ふるなら、いつそ生き長らへんよりは、死ぬが優れり。

大神にかけて、頼りなき戀人を訪ひ玉へ、われは君の奴隷にして、しかも囚れの身なり。

お、わが姫よ、わが情熱を憐れみ玉へ、戀するものは何人なりとも赦さるゝと言ふにあらずや。

かう書いて、彼は苦しげな溜息を吐きながら、泣きました。老婆も共に憐れを催して泣きました。それから彼女は彼から手紙を受取つて申しました。「まあ元氣を出して、愉快にしていらつしやいな、屹度貴方のお望みを叶へて上げますからね。」

それから、彼女は立ち上つて、火の上に乗つてゐるやうな相手を残して置いたまゝ、ツーニヤ姫の許へ参りました。見ると、姫はなほター・ジェル・ムルークが前に寄越した手紙で腹を立てながら、蒼白な顔色をして居りました。彼女は姫に第二の手紙渡しました。それを見ると、彼女の憤怒は一層募りました。そして、老婆に申しました。「だから、私が前にそんなことをしたら相手は尙更執拗する

だらうと言つたのぢやないか。」——「貴方にさう執心するなんて、一體何といふ畜生なんでせうね。」と老婆は言ひました。ツーニヤ姫は答へました。「お前又行つてかうお言ひ、二度と再びあの方の許へ手紙を書かうものなら、即座に首を刎ねられてしまふぞつて。」所が、老婆は申しました。「何卒それを手紙に書いて下さいまし、それを私が持つて参りましたら、一層相手が怖がりませうからね。」で、彼女は紙を取つて、次の詩句を認めました。——

お、汝、不幸の到る徑路に無頓着なる者よ、望みの結合を遂げ得ぬ者よ。

お、惑へる者よ、汝エス・スハーに到着し得ると考ふるや、輝ける月にさへ行き着き得ぬに。

汝よくも大膽に二人の結合を望むに到りしよ、わが投箭の如き姿を抱擁せむと想ひ到りしよ。白髪にならむ程の不幸の日に、われより襲はれむことを恐れて、汝のその空計を棄て去れよ。

この手紙を褶んで、彼女はそれを老婆に渡しました。老婆はそれを受け取つて、ター・ジェル・ムルークの許へ持つて参りました。彼女の姿を見ると、彼は立ち上つて申しました。「神よ、貴方のおいで下さつた祝福を私から奪ひたまふな！」老婆は申しました。「これが貴方の手紙に對する御

返事ですよ。』彼はそれを受け取つて読みました。そして、おい／＼泣きながら申しました。『あゝ、何卒たつた今誰か私を殺して呉れ、ば可い。このやうな苦しい目に遭はされる位なら、いつそ殺された方が餘程楽だ。』それからベンとインキ壺と紙とを取寄せて、次の二句を認めました。――

おゝわが希望の人よ、さは頑固に残酷に振舞ひ玉ふな、欲望に溺れし戀人を訪ひ玉へや。
われをこの壓迫に耐へて生くる者と思ひ玉ふな、わが魂はわが戀人を失ふと共にこの世を離れ行くものを。

彼はその手紙を巻收めて老婆に渡しながら申しました。『私は貴方を無駄に疲れさせはしませんよ。』そして、再びアジーズに吩咐けて、一千片の黄金を老婆に與へながら申しました。『おゝ、わが母上よ、此手紙で本當に一緒になれるか、それともすつかり離れてしまふか、どつちかには是非極めてしまひたいものです。』――『おゝわが、子息よ。』と、彼女は答へました。『大神にかけて、私は貴方に幸福が来るやうにと、そのみ願つて居りますよ。何卒あの方が貴方と御一緒になるやうにね。貴方は輝いてゐる月で、あの方は上りかけた太陽ですものね。貴方がたお二人を御一緒にする事が出来なければ、私はもう一生好いことは御座いませんよ。私は九十歳といふこの年齢になるまで

策略や手管を運らしてばかり日を送つて居りました。ですもの、いかなる掟に背いたとて、お二方を一緒にせず置くものですか。』

それから彼に別れを告げながら、十分彼を慰めて置いて、彼女は立ち去りました。そして、ツーニヤ姫の許へ参りました。彼から受取つた手紙は自分の髪の毛の中に隠して置いたので御座います。そして、自分の女主人の前に坐ると、いきなり頭を掻き抓りながら、『おゝ姫君よ、私の髪を梳いて下さいませぬか。暫らく風呂に参りませんからね。』と申しました。で、ツーニヤ姫は袖を脇まで捲り上げて、老婆の髪の毛を解き始めました。すると、例の手紙が頭の中から落ちました。ツーニヤ姫はそれを見て、『この紙は何だえ？』と申しました。老婆は答へました。『ぢや、屹度私があの商人の店に坐つてゐるうちに、その紙が私の頭に引つかつたので御座いませうよ。何卒私に下さいまし、持つて行つて、あの人に返して遣りますから。』が、ツーニヤ姫はそれを開いて読んで見ました。そして、その意味が分ると、聲を擧げて叫びました。『これはお前の詭計に違ひない。お前がこれまで私を育て、呉れたのでなければ、私は今お前を苛い目に遭はせてやるところだよ。神様があの商人を使つて私をお苦しめになるんだね。だが、今までその男から受けた侮辱は皆お前のせみだよ。一體何處の國から来た男なんだらうね？ 私に對してこんな圖迂々々しい眞似の出来る男は他にありやしないよ。眞個こんなことが他所へ漏れたら大變よ。身内の者でも同格の家柄の者でもない男だけに、

尙更面倒だよ。』すると、老婆は彼女に向つて申しました。『いゝえ、誰だつてこの事に就いて、一言だつて口出しをする者は御座いますまい、貴方のお力と、お父上様の御威光があるんですもの。ですから、その男に御返事をお與んなすつたとて別に悪いことは御座いませぬよ。』——『お、わが乳母よ。』とゾーニヤ姫は答へました。『これは悪魔だよ、こんな物の言ひ方をして、帝王の権力を恐れないなんてね。本當にこの男のこぢや困つてしまつたわね。殺してしまへと命令を出せば、餘り正しくないことになるだらうし、この儘許して置けば、いよく増長して附上るだらうしね。』——『ぢや、その男にお手紙をお書き下さい。』と、老婆は直に答へました。『さうしたら屹度慎しませうから。』で、彼女は紙とインキ壺とペンを持つて来るやうに吩咐けて、次の句を彼にと書きました。——

幾たび叱り止むるも、底知れぬ無智は汝を煽すと見ゆ。汝を差止むるために、わが手幾度詩句を書くことぞ？

禁ぜらるゝ毎に、汝はその熱心を増して行く、われはたゞ汝にその心事を秘めよと言ふばかりなるに。

さらば汝よ、汝の戀を秘めて、最早外に表すな。外に表すとも、われは汝に目をくれざるべし。

再び前日の言葉を繰り返しなば、死の鳥は汝の運命を鳴き渡るべし。

汝はやがて死に襲はれて、汝の休憩所は地の下となるべし。

汝はおのが家族を悲しみのうちに残すべし、お、惑へる者よ、戀の劍が汝の逃れむとするを阻む時に。

かやうに書き認めて、手紙を巻き收めると、彼女はそれを老婆に渡しました。老婆はそれを受取つて、ター・ジェル・ムルクの許へ持つて行つて渡しました。彼はそれを讀んで見て、相手の心の頑固なるを思ひ知ると共に、逆も接近する道のないのを悟つて、宰相にかくと訴へながら、その思慮深い忠告を乞ひました。すると宰相は答へました。『他に執るべき途はありませんね。矢つ張りもう一度貴方が手紙をお書きになつて、何とか先方から應答があるやうになさるのが一番宜しう御座いますよ。』そこで彼は申しました。『お、わが兄弟よ、お、アジーズよ、お前さんの知慧を振つて、一つ代筆をしてくれないか。』で、アジーズは紙片を取上げて、次のやうな詩句を書き認めました。——

お、わが主よ、五人の聖者に依りてわれを救ひたまへ、われを苦しむる女の上にわが悩みを移さしめたまへ。

主はわれが苛責の焰に惱み、戀人のわれを虐げ、われに憐みを掛けぬことを知り玉へば、われは苦悶の中にも、いかに長く女を優しく戀ひ慕ふことぞ！ さるに、何日まで女はわが惱みの上に暴力を振ふならむ！
われは果て知られぬ憂悶の中に目的もなくさまよひ、おゝわが主よ、われを助くる人を見出す能はず。

アジーズは手紙を巻き收めて、ター・ジェル・ムルークに渡しました。彼はそれを讀んで見て、非常に氣に入りました。で、それを老婆に渡しました。

彼女はそれを受取つて、ゾーニヤ姫の許へ持つて参りました。姫はそれを讀んで、その意味を了解すると、忽ち非常に立腹して、大きな聲で嘸鳴りました。「こんな事が起つたのも皆この忌しい老婆のお蔭だよ。」そして、女奴隷や宦官を呼び附けて申渡しました。「この奸智に長けた婆を捕まへて、お前方の上草履で打つてお遣り。」——で、一同老婆の上に乗し掛つて、相手が氣絶するまで上草履で打ちのめしました。そして、老婆が正氣になると、ゾーニヤ姫は彼女に申しました。「おゝ、この悪性婆よ、神様（その名は讚へられてあれよ）を恐れなければ、私は疾くにお前を殺してしまつたんだよ。」又召使の者どもに向つて、「もつとく打つてお遣り。」と吩咐けました。彼等は又打つてく、

たうとう又氣絶させてしまひました。それから姫は、戸の外に彼女を抛り出してしまへと吩咐けました。で、彼等は老婆を俯伏せにして、顔の上に引き摺つたまゝ、戸の外におつぼり出しました。

老婆は正氣づくると、立ち上つて、一足歩いては休み、一足歩いては休みして、わが家へ歸つて來ました。そして、明るる朝になるのを待つて、立ち上つて、ター・ジェル・ムルークの許へ参りました。そして、自分の出遭つた事柄を委しく物語りました。ター・ジェル・ムルークはその話を聞いて大いに當惑しながら申しました。「おゝ、わが老婆よ、えらい目にお遭ひなされて、本當にお氣の毒で御座いました。併し何事も運命に依つて起るのですからね。」彼女は答へました。「まあ元氣よく愉快にしていらつしやい。私は貴方をおの方にお會はせしないうちは、私を打つて苛い目に遭はせたあの根性の悪いお方の許へ貴方をお連れ申さないうちは、何うしたつてこの骨折は止めませんからね。」ター・ジェル・ムルークは申しました。「何う言ふ所因であの方は男嫌ひなのですか、それを打明けて下さいまし。」彼女は申しました。「それは或夢を御覽なされてからのことで御座いますよ。」——
『で、その夢と言ふのは何んな夢ですか。』と、彼は訊ねました。彼女はそれに答へました。「ある晩あの方が寝ていらつしやいますとね、鳥さしが地面に羅網を張つて、その周圍に麥を撒き散らしながら自分はその近くに様子を見てゐるのを御覽なすつたのですよ。その近くへ來る鳥は一羽でもその羅網に掛らないのはないのですつて。すると、その鳥の中に、雌、雄の鳩がゐましてね。見てゐると、

雄鳩の脚が網に引つかつて、しきりに藻掻いてゐる。それを見て、他の鳥どもは吃驚して、ぼつと皆飛び散つてしまつたのですよ。が、その伴侶の鳩はすぐ引返して来て、雄鳩の上をぐるぐる飛び廻りながら、羅網の上へ降りて、鳥さしが迂濶してゐる間に、雄鳩の脚が引つかつてゐる網の目を嘴で啄つき破つて、雄鳩の脚を引き出して遣りました。そして、一緒に飛んで行つてしまつたのです。それから鳥さしは又羅網を工合よく直して、少し離れた所に番をしてゐました。少時すると又澤山の鳥が降りて来て、今度は先刻の雌鳩が網に引つかつたのですよ。で、他の鳥は吃驚して、ぼつと飛び散つてしまつたのですが、雄鳩も一緒に遁げてしまつて、自分の仲間を助けに戻つては來なかつたと言ふのです。で、鳥さしが来て、その雌鳩を捕まへて殺してしまつたのです。ゾーニヤ姫は夢に覺されて眼を覺ますと、何に限らず雄といふものは皆このやうに善に缺けてゐるものだ。人間も男は女に對して一般に善良でないといふのは仰有つたのですよ。——老婆がその夢物語を終つた時、ター・ジェル・ムルークは彼女に申しました。「お、わが老母よ、假令それがために死んでも可いが、一目あの方を見たいものだね。何とか工夫して、あの方に會へるやうに計らつて下さいよ。」——彼女は申しました。「それでは、あの方の御殿の傍に花園がありますね、姫はその花園へ月一回づつ保養にお出懸けになるのですよ、毎でも忍びの門からお這入りになつて、十日間彼處に逗留していらしやるのですがね、恰度今彼處へお出懸けになる時期になつてゐますよ。で、いざお出懸けと言ふ時に、

貴方の許へ知らせに來ますから、彼處に行つてお會ひなさいまし。よく氣を附けて、花園を離れないやうになさいよ。貴方の美しい御様子を御覽なされたら、姫も多分貴方に心を奪はれておしまひなさることです。一緒におなりなさるには、何うしても戀が一番有力な手段ですからね。」

彼は答へました。「いや、それはよく承知しました。」——で、彼は立ち上つて、アジーズと一緒に店を出ながら、老婆を自分達の住居へ連れて來ました。そして、これが自分達の住居だと教へました。それからター・ジェル・ムルークはアジーズに向つて申しました。「お、アジーズよ、わが兄弟よ、私はこれから先もう店を持つてゐる必要がない。店を開いて置くだけの目的は達せられたのだからね。店にある品物ごと悉皆お前さんに上げませう。何しろお前さんは私と一緒にかうやつて遙遙故國を離れて來てくれたんだからね。」で、アジーズは彼の贈物を有難く頂戴して、一緒に會話をつづけました。ター・ジェル・ムルークはアジーズに彼の冒険談を求めました。で、アジーズは自分が會つたことをいろ／＼彼に話して聞かせました。それから二人は宰相に向つて、ター・ジェル・ムルークの目的を話して、何うしたら可いかと相談いたしました。彼は答へました。「一同で花園へ行かうぢやありませんか。」で、三人は各自一番立派な着物を着て、三人は從者を従へながら、花園へ出懸けました。花園には多くの樹々が茂り合つて、小さな流れが幾つも流れて居りました。彼等は門に園守が坐つてゐるのを見ました。彼等は彼に挨拶をしました。彼はそれに答禮しました。で、宰相は

黄金百片を彼に渡しながら申しました。「何卒この金子をお納め下さい。そして、何か食べる物を私達に買つて来て下さいませんか。御覽の通り私どもは他國の者で、何か面白い目をさして遣りたいと思つて、かうやつて子息達を連れてゐるのですよ。」園守はその金子を受取つて申しました。「何卒中へお這入りになつてゆつくり御覽下さい。この花園はすつかり貴方の所有で御座いますからね。何か召上る物を私が持つて歸りますまで、ここに坐つていらつしやい。」それから彼は市場に出懸けて行きました。宰相とター・ジェル・ムルークとアジーズとは園守が市場へ出懸けた後で花園へ這入りしました。間もなく園守は羊の灸いたのを提げて来て、彼等の前に並べました。で、彼等はそれを食べた後で、手を洗ひました。そして、一緒に四方八方の會話に移りました。その時宰相は申しました。「この花園に就いて伺ひますがね、これは貴方の所有で御座いますか、それとも借りておいでなので御座いますか。」老翁は答へました。「私の所有ぢや御座いませんよ、王様の姫君なるゾーニヤ姫の所有で御座いますよ。」——「では、一箇月どの位の給料を貰つておいで、すか。」と、宰相は二たび訊ねました。「たゞの黄金一片だけですよ。」と、彼は答へました。それから宰相は花園を一わたり眺め廻しながら、高いが、併し古びた假屋が立つてゐるのに氣が附きました。で、彼は申しました。「お、老翁よ、私はこゝへ後で貴方が私どもを懐ひ出して下さるやうな、好い記念になることをして置きたいと思ひますがね。」——「好いこととは何んなことをなさりたいのです？」と、老翁は訊ねまし

た。宰相は申しました。「まづこの三百片の黄金を納めて置いて下さい。」園守は黄金と聞いて、かう答へました。「お、旦那様、何なりとお好きなやうになさいまし。」そして、その金子を受取りました。宰相は彼に申しました。「それが神様（その名は讚へられてあれよ）の思召しであるなら、此處へ一つの善いことをして置きますやうよ。」

それから一同老翁の許を去つて、自分達の棲家へ歸りました。そして、その夜を明かしました。さて明くる朝宰相は、左官と繪師と上手な鋳屋とを連れて來させて、彼等に必要な道具を整へて遣りながら、例の花園へ案内しました。そして、彼等にその假屋を胡粉で塗つて、さまざまの繪で裝飾するやうに命じました。それから金と群青の色とを用意させて、繪師に向つて、「廣間の奥の突き當りに鳥さしが羅網を張つて置くと、雄鳩がそれに引つかつて、たうとうそれに捲込まれてしまつた所を描いて下さい。」と申しました。で、繪師が壁の一部分にその繪を仕上げた時、宰相は、「今度は一方の隅に、前と同じやうにして、羅網に掛つた雌鳩を描いて、鳥刺がそれを捕まへて、頸に小刀を突き刺した所を描いて貰ひたい。それから又もう一方の隅には、大きな猛鳥がその雄鳩を掴まへて、爪を鳩に突き込んでゐる所を描いて貰ひたい。」と申しました。繪師は命ぜられた通りに致しました。で、彼が宰相の吩咐けた通りに仕上げた時、一同園守に暇を告げて自分達の棲家へ戻つて參りました。彼等は一緒に坐つて會話をして居りました。ター・ジェル・ムルークはアジーズに向つて申しまし

た。「お、わが兄弟よ、何か詩句を誦して下さい。さうしたら氣が晴れて、くさくした物思ひも消えれば、胸に燃えてゐる焰も鎮まるだらうからね。」で、アジーズはいかにも快い音調で、次の詩句を唄ひました。――

イブン・シーナーは斷言すらく、戀病を癒す藥は快き音樂を聞くか、

その戀人に似たる伴侶を求むるか、果物や酒や花園に快を盡くすかにあり。

さりながらわれはその醫藥を他に求めぬ。運命と不慮の出來事とはわれに助けを與へぬ。

しかもわれは戀の死病なることを知りぬ。イブン・シーナーの醫藥も終に甲斐ぞなき。

その間老婆は自分の家に閉ぢ籠つて居りました。ゾーニヤ姫は例の花園へ氣晴らしに出懸けたくなりました。が、姫は今まで老婆を連れずに一人で出懸けたことが御座いませんでした。で、使を遣つて老婆を呼び寄せながら、頻りに御機嫌を取つて、かう申しました。「あの花園へ行つて、樹木だの果實だのを見て氣晴しをしたり、いろくな花を見て胸を透かしたりしたいのだよ。」老婆は答へました。「畏承りました。ですが、それには第一に自宅へ戻りまして、着物を着換へて參つて、それからお件をいたしたう御座います。」――「ぢや、行つておいで。」と、ゾーニヤ姫はそれに答へました。「で

も、早く歸つて来ておくれよ。」老婆は姫の許を去つて、ター・ジェル・ムルークの許へ參りました。そして、彼に申しました。「さあお支度をなさい。一番立派な着物をお召しになつて、花園へいらつしやいよ。そして、園守の許へいらしつて挨拶をして、何處かに身を隠していらつしやい。」彼は答へました。「畏承りました。」なほ二人はいろく合圖の打合せをした上、老婆はゾーニヤ姫の許へ立ち歸りました。で、彼女が去つてしまふと、宰相は立ち上つて、黄金の五千片も値ひするやうな、王様の衣裳としても最も壯麗なものをター・ジェル・ムルークの身に着けさせて寶石を鑲めた黄金の帯を締めさせながら、一緒に花園へ出掛けました。門へ着いて見ると、園守はそこに坐つて居りました。彼はター・ジェル・ムルークを見ると、足の上に立ち上りながら、恭々しく彼を迎へました。そして、門を開きながら申しました。「何卒お這入りになつて、御自由にお休み下さい。」所が、園守はこの日王の姫君が此處へお成りになるとは知らなかつたので御座います。ター・ジェル・ムルークは園内へ這入つて、少時待つて居りますと、何處からともなくざわ／＼と物音が聞えて來ました。「はて、何だらう？」と思ふ間もなく、宦官や女奴隷どもが忍びの門から這入つて參りました。園守は彼等の姿を見ると、慌て、ター・ジェル・ムルークの許へ飛んで來て、彼等の來たことを告げて申しました。「お、わが君よ、何うしたら宜しう御座いますか？ 王様の姫君なるゾーニヤ姫がおいでになつたので御座いますよ。」彼はそれに答へました。「なに、貴方には何の咎めも罹りませんよ。私は園内の

何處かに身を隠してゐませうからね。』で、園守は、『何卒十分氣を付けて、成るだけ分らないやうに身を隠して下さいまし。』と頼んで置いて行つてしまひました。

さて、王の姫君は女奴隷どもと老婆とを随へて花園に這入りました。老婆はひとり心の中に、『宦官が一緒にゐては、目的は達しられないな。』と思ひました。で、姫君に向つてさう申しました。『お、わが姫君よ、私は今貴方のお心をのんびりさせるやうなことを想ひ着いたので、それを申し上げたいので御座いますかね。』ゾーニヤ姫は申しました。『何か知らんが、言つて御覽な。』で、老婆は申しました。『お、わが姫君よ、只今のところ、この宦官どもに別段御用は御座いますまい。それに、あの者どもがお傍に隨いて居りますうちは、貴方も何となく御窮屈で御座いませう。少時引退つてゐるやうに仰せ附けられて下さいませ。』——『本當にお前の言ふ通りだね。』と言ひながら、ゾーニヤ姫は彼等を退らせました。そして、ぶら／＼散歩してゐる間に、ター・ジェル・ムルクは彼女を見附けて、その美しさ、可愛らしさに見惚れました。が、姫の方では少しもそれと知りませんでした。彼は彼女を見る度毎に、その言はん方なき美しさに打たれて氣絶いたしました。その間に老婆は旨く話を持ち懸けながら、姫を假屋の方へ導いて參りました。宰相が繪を描かせて置いた假屋で御座います。で、その假屋に這入りながら、ゾーニヤ姫は繪に眼を留めました。見ると、澤山の鳥と鳥刺と鳩が描いて御座いました。で、彼女は聲を擧げて申しました。『あ、神の完全性は讃へられてあれよ。これ

こそ本當に私の夢で見たことがそのまゝ、表現されてゐるのだよ。』で、彼女はつく／＼不思議の感に打たれながら、群つてゐる鳥だの、鳥刺だの、羅網だのを眺めて居りました。そして、また申しました。『お、わが乳母よ、私はいつも男といふものを非難して嫌つてゐたがね。でも御覽、あの鳥刺を。雌鳩を殺したのは彼奴なんだね。そして、雄鳩は一旦逃げるには逃げたが、雌鳩を助けてやらうと思つて戻つて來たさうにしてゐるんだよ。それが猛い鳥に出遭して、捕まへられてしまつたんだね。』所が、老婆はそれが聞えぬやうな顔をして、他の話に紛らしながら、たうとうター・ジェル・ムルクの隠れてゐる場所の方へと近寄つて參りました。そして、假屋の窓の下を歩いていらつしやいと、彼に合圖をいたしました。ゾーニヤ姫はそこに立ち駐つて、不圖傍を見遣りながら、彼を見附けました。そして、彼の顔の美しさ、容姿の嫺雅さに眼を着けながら、乳母に申しました。『お、わが乳母よ、この美しい若者は何處からおいでなのだい？』老婆は答へました。『私は一向に存じませぬが、多分偉い王様の息子さんでも御座いませうよ。あの通りに美しく、愛らしいお方で御座いますものね。』ゾーニヤ姫は彼に見惚れて恍惚としてしまひました。今まで彼女に絡つてゐた符呪は解けて、彼女の理性は男の美しさ、愛らしさ、嫺雅さに壓倒されてしまひました。そして、彼女は烈しい戀に陥りました。で、彼女は老婆に申しました。『お、わが乳母よ、眞個あの若い方はお美しいわね。』老婆は答へました。『仰有る通りで御座いますよ、お、わが姫君よ。』かう言ひながら、彼女は

王の子息に自分の棲家へ歸つてゐるやうに合圖をいたしました。愛の炎は彼の胸の中に燃え立つて、忘我と心の亂れとはいよいよ募るばかりで御座いました。が、彼は歩を返して、園守に暇を告げながら、老婆の言葉に逆らはないやうに、自分の棲家へ戻りました。そして、宰相とアジーズとに老婆が立ち去れと合圖をした旨を告げました。彼等は二人とも辛抱してゐるやうに彼を勵ましなから、彼に申しました。「貴方のお歸りになつた方が都合の好いやうな、何か心に目的がなかつたら、あの婆さんがそんなことを貴方に合圖する筈はありませんからね。」

さてゾーニヤ姫の方へ立ち戻つてお話しをすると、姫はすつかり戀の捕虜となつて、我を忘れて茫然として居りました。しかも、心はいよいよ亂れるばかりで御座います。で、彼女は老婆に向つて申しました。「お前の力を借りなければ、何うしてあの若い方と會へるか、私には見當が附かないよ。」老婆は大聲で叫びました。「私は呪はれたる悪魔から遁れて、神様に隠れ家を求めます！ 貴方は男など何とも思つてでは御座いませんでした。それなのに何うしてあの若者が戀しいからと言つて、そんなに氣を揉んでおいでなされるので御座いますか。でも、大神にかけて、貴方のお若さに對しては、あの方より外に似合の方は御座いませんよ。」——「お、わが乳母よ。」と、ゾーニヤ姫は答へました。「何うかあの人に會はせてお呉れよ。黄金一千片と、同じ價値の着物をお前に上げるからね。若しもお前が私を助けて、あの人と會はれるやうに計らつてお呉れでなければ、私は所詮死んでしまふ

外ないよ。」で、老婆は答へました。「まあ御殿へお歸りなさいませ。何うにかしてお二人を會はせるや、に工夫をして見ませう。お二人のためなら、私は生命を差出しても構ひませんからね。」ゾーニヤ姫はそこで御殿に歸りました。一方老婆はター・ジェル・ムルークの許へ參りました。彼はその姿を見ると立ち上つて、丁寧に彼女を迎へながら、自分の側に坐らせました。彼女は彼に申しました。「計略が巧く圖に中りましたよ。」かう言ひながら、彼女は自分と姫との間に起つた一伍一什を彼に語つて聞かせました。彼は彼女に申しました。「では、何日會はれるでせうね？」彼女は答へました。「まあ明日でせうね。」彼は彼女に黄金一千片と同じ價格の衣裳とを與へました。彼女はそれを受取つて、その場を立ち去りました。そして、直ぐにゾーニヤ姫の許へ參りました。姫は待ち兼ねて、「お、わが乳母よ、私の戀しいお方から何んな消息を持つて来ておくれたえ？」と訊ねました。「やうやくあの方のお住居を見附けましてね。」と、彼女はそれに答へました。「明日は此處へあの方をお連れ申しますよ。」これを聞くと、ゾーニヤ姫は一方ならず喜んで、彼女は一千片の黄金とそれと同じ價格の衣裳とを與へました。彼女はそれを受取つて我が家へ立ち戻りました。で、その夜が過ぎて、明るる朝になると、老婆は又ター・ジェル・ムルークの許へ參りました。そして、彼に女の服裝をさせながら、彼に申しました。「私の後から隨いていらつしやい、幾分身體を左右に振りながら歩くやうになさいよ。決して早足で歩いては不可ませんね。それから又誰が貴方に

言葉をかけても知らん顔していらつしやいよ。」かやうに言ひ聞かせて、彼女は先に立つて出懸けました。彼はその後から女の服装をして随って行きました。彼女は途々も彼にびく／＼しないやうに、御殿の中では何ういふ風に振舞つたらいゝか、こま／＼と言つて聞かせました。で、御殿の入口に着くまで、彼は彼女の後に随って参りました。彼女は門の中に這入りました。彼も續いて後から這入りました。そして、玄關から控へ部屋へと幾つも／＼通り抜けて、恰度七つ玄關を通り過ぎました。その七つ目の玄關で、彼女はター・ジェル・ムルークに申しました。「心を確り持つていらつしやいよ。私

私が大きな聲で貴方に、「お、女奴隷よ、お這入り！」と言ひましたらね、愚圖々々しゐてないで、急いで向うの控へ部屋に這入つて、左の方を御覽なさい、入口が七つある廣間がありますからね。その入口を五つ數へて、六つ目の處へお這入りなさい、そこに貴方の戀の目的物がおいでなさいますよ。」—「それで貴方は何處へおいでなさるんです？」と、ター・ジェル・ムルークは訊ねました。彼女は答へました。「私は何處へも行く處がないのですよ。ですが、まあ宦官の長とでも話して、貴方のお歸りを待つことにしませうよ。」それから彼女はなほも進んで行くので、彼も後から躑いて行きました。すると、宦官の長が立つてゐる戸口の處へ参りました。彼は老婆の後から躑いて来る女奴隷の服装をしたター・ジェル・ムルークに眼を着けました。そして、彼女に訊ねました。「貴方のお伴れになつたこの女奴隷は何用で來たのですか。」彼女は彼に答へました。「ゾーニヤ姫はこの娘

が何でも器用にするとお聞きになつて、買ひたいと仰有るんですよ。」が、宦官はそれに答へました。「私は女奴隷だらうが、他の人だらうが、そんな事は知らない。だが、王様が私にお命じになつた通りに、一度私が検めてからでなければ、誰でもこゝを這入らせることは出来ないのですよ。」それを聞くと、老婆は怒つたやうな振りをして、彼に申しました。「私は今まで貴方を物の解つた、禮に正しい人とはばかり思つてゐました。ですが、急にさうでなくなつたのなら、姫君にこのことを申し上げて、姫君の女奴隷を這入らせなかつたとお話しますよ。」それから彼女は大きな聲でター・ジェル・ムルークを喚んで、彼に申しました。「女奴隷よ、お這入り！」で、彼は彼女が吩咐けた通りに、直様控室に這入りました。宦官は黙つてしまつて、何とも申しませんでした。ター・ジェル・ムルークはそれから五つ數へて、六つ目の戸口に這入りました。見ると、ゾーニヤ姫は彼の來るのを待つて立つて居りました。

彼女は彼を見るや否や、すぐにそれが戀人であることを知つて、自分の胸に相手を押し付けました。彼も亦同じやうに相手を抱き締めました。間もなく老婆も這入つて來て、とかうの言ひ草を拵へて、女奴隷どもを引き退らせました。その後でゾーニヤ姫は彼女に申しました。「お前は入口の番をしておいで。」そして、自分はター・ジェル・ムルークと二人切りになつて、無邪氣な戲言にその夜を明かしました。次の朝、彼女は老婆とター・ジェル・ムルークを一室へ閉め込んで置いて、自分は他の

部屋に移つて、平素の通りにそこに坐つてゐました。すると、女奴隷どもが彼女の前へ参りました。で、彼女は彼等の用事を取計らつて、それから彼等と一緒に會話をしてゐましたが、やがて彼等に申しました。「もう退つても可いよ。私は一人でゆつくりしたいのだからね。」で、彼等は彼女の前を退きました。彼女はそれから食物を調べて、ター・ジェル・ムルークと老婆の許へ戻つて参りました。かうして全一箇月の間同じやうな日を送つて居りました。

所が、宰相とアジーズとはター・ジェル・ムルークが姫の御殿へ行つたきり、ちつとも歸つて來ないので、これは正しく殺されてしまつて、永久に歸つて來ないものと決めてしまひました。アジーズは宰相に向つて申しました。「お、わが父上よ、貴方は何うなさいますか。」宰相は答へました。「お、わが子息よ、これは容易ならぬことが起りました。父上の許へこの由を報告しなければ、怠慢の廉を以て屹度お咎めになるだらうよ。」で、彼等はすぐに支度をしてエル・アー・デル・カドラーとエル・アム・デーインに向けて、スレイマーン・シャー王の王宮へと旅立ちました。そして、日夜山を越え、谷を踰えして、漸くスレイマーン・シャー王の御前に出ました。彼等は王子の身に起つた出來事を仔細に言上して、國王の姫の御殿へ行つた限り、何の消息も聞かない由を申上げました。それを聞くと、國王は蘇生の日が彼を驚かしたかのやうに仰天いたしました。彼の悲しみは非常なもので、即刻全領土中に戦争の布令を出すやうに命じました。それから都の外側に軍隊を召集して、天幕を張ら

せ、自分は假屋のうちにあつて、全國の軍隊が上つて來るのを待ちました。人民どもは皆この國王が正義に富んで慈愛深いのを愛してゐました。で、われもくと軍勢の中に加はつて出て参りました。で、彼は自分の子息なるター・ジェル・ムルークを取り戻さうと思つて、眼のとゞく限りは地上を被ふ程の大軍を率ゐて出發いたしました。

所で、一方ター・ジェル・ムルークとゾーニヤ姫とは、毎日に互ひの戀しさ慕はしさが募るばかりで、夢のうちに約半年を過しました。ター・ジェル・ムルークの戀と心の亂れと恍惚とは益々烈しくなつて、たうとう彼女に自分の心の中を打ち明けました。「お、わが心の戀人よ、私はかうして貴方と一緒に居れば居る程、心の亂れと喜悅と欲望とは募るばかりですよ。と言ふのは、私はまだ自分の本望を達した譯ではないのですからね。」すると、彼女は申しました。「何がお望みなのですか、お、わが眼の光よ、わが心の喜悅よ。」彼は答へました。「私は自分の本當の身の上を貴方に明したのですよ。私は實は商人ぢやないのです、好う御座いますか、私は國王です、いや國王の子です。私の父の名はスレイマーン・シャー大王と申しまして、前に貴方を私の嫁に呉れと言つて、宰相を貴方のお父上の許へ使節に寄越したあの王ですよ。所が、あの時貴方はその話を聞いて承諾して下さらなかつたのですね。」それから彼は自分の物語を始めから終ひまで彼女に語つて聞かせました。そして、それに附け加へて申しました。「私はこれから父の王の許へ戻つた上、改めて貴方のお父上へ使

節を寄越して、貴方と結婚の出来るやうに計らつて貰ひたいのですよ。さうすれば、安心して暮らせますからね。——彼女はこの物語を聞いて一方ならず喜びました。恰度自分の望み通りで御座いましたから。で、その夜は二人ともその決心で臥みました。

所が、何うした廻り合せか、その夜に限つて、二人とも何時になく睡氣に深く襲はれて、日が上るまで起きませんでした。シャー・ゼマーン王はその時國內の貴族どもを前に控へさせて、玉座に就いて居られました。すると、鍛冶の長が手に丸い手匣を捧げて御前に伺候いたしました。彼は王の座近く進み出て、その手匣を開けました。取り出したのは紅玉だの、青玉だの、この世の王の迎も贖ひ得られぬやうな、黄金の十萬片も値ひする寶玉が納めてある優美な小さな箱で御座いました。王はこれを見て、その美しさに見惚れて居りました。彼は宦官の長——前に述べたあの宦官の長です——に向つて、「お、カーフルよ、この小箱を持つて、ゾーニヤ姫の許へ行つておいで。」と命ぜられました。で、宦官はそれを取つて、姫のお部屋まで参りました。所が、その扉が閉まつて、老婆はその闕の前に睡つて居りました。それを見ると、彼は大きな聲で、「今時分まで睡てゐるのか。」と、嗚り附きました。老婆はその聲を聞くと、吃驚して眼を覺ましました。そして、怖ろしさに、「今鍵を持つて来るまで待つて下さい。」と言つたまふ、そこを遁げ出してしまひました。宦官は老婆が仰天して遁げ出した様子を見て、不審に思ひながら、自分で戸を振り開けて、室内に這入つて見ました。する

と、ゾーニヤ姫とター・ジェル・ムルークと一緒に寢て居りました。それを見ると、彼も當惑して、その儘王の御前へ引き返さうかと思案してゐるうちに、ゾーニヤ姫が眼を覺まして、自分の傍に宦官が立つてゐるのを見附けました。はつと驚いて、顔色が眞青になつてしまひました。そして、相手に申しました。「お、カーフルよ、神様の祕して置いて下さつたことは、お前も祕して置いてお呉れ。」が、彼はそれに答へました。「私は王様の前に何事もお隠し申して置くことは出来ません。」そして、戸をびつしやり閉め切つたまふ、國王の許へ歸つて参りました。國王は彼を御覽になつて、「あの匣を姫に渡して来たかい。」とお訊ねになりました。宦官は答へました。「匣はこれに御座います。何卒お受取り下さいませ。私は貴方様の前に何事もお隠し申して置くことが出来ませんから、わざと申し上げますが、ゾーニヤ姫は若い美しい男と一つ部屋の中に寢ておいで、御座います。私は只今それを見て参りました。國王はそれを聞いて、『では、早速二人を自分の前に引き連れて来い。』と仰せになりました。で二人は國王の面前に引き出されました。王は彼等に向つて、『お前達は何をしてゐたのだ?』とお訊ねになりました。そして、非常に御立腹になつて、短劍の柄に手を懸けながら、あはやター・ジェル・ムルークを刺し殺さうといたされました。所が、ゾーニヤ姫は自分の體軀を男の上に投げ掛けて、父の王に申しました。「何卒私を先に殺して下さい。」王はまづ姫を叱りつけて、その部屋へ連れ歸るやうにお吩咐けになりました。それからター・ジェル・ムルークの方へ向つて申さ

れました。「汝に禍あれ！お前は何處から来たのだ？お前の父は誰だ？よくも俺の娘に對してそんな大それた真似が出来たな。」——「お、國王よ。」と、ター・ジェル・ムルークは答へました。「若しも私を死に致されるならば、貴方は破滅に陥りますぞ。そして、貴方を初めとして、貴方の領土の臣下どもは後で悔いても返らぬことになりませぬ。好う御座いますか。」——「と言ふのは、何うしたと言ふのだ？」と、國王はお訊ねになりました。彼はそれに答へました。「私はスレーマーン・シヤールの子ですよ。父が彼の配下の騎士や歩兵を引き連れて、城下へ押し寄せて来た時のことを考へて御覽なさい。」シヤール・ゼマーン王はこの言葉を聞いて、では兎に角彼を死刑にすることは一時見合せて、彼の言ふことが眞實か何うか見究めるまで入牢させて置かうと考へました。が、彼の宰相は申しました。「お、一代の國王よ、私は御忠告申し上げます。一刻も早くこの憎むべき若者を御處罰なされた方が宜しう御座います。王の姫君に對して大それた事をいたして居るので御座いますから。」で、彼は死刑執行官に命じて、「此奴の首を刎ねよ、此奴は叛逆人だからな。」と仰せられました。で、執行官は彼を捕へて、堅く縛り上げながら、手を上げて貴族達に向つて、異存はなきや否やと、一度ならず二度まで合圖をいたしました。かうして幾分でもなるべく處刑を遅らせたいと思つたからで御座います。國王はそれを御覽になつて、「何時までさうやつてゐるんだ？まだやつてゐるなら、お前の首を先に刎ねてしまふぞ。」と嘯鳴りつけられました。

執行官も仕方がないので、腋の下が見える程高く手を振り上げながら、いよ／＼彼の首を打ち落さうといたしました。その時、が／＼と物騒がしい音が聞えて、人民どもは皆その店を閉ぢてしまひました。で、王様は執行官に向つて、「一寸待て。」と仰有いました。そして、人を遣はして、何事の起つたのかを調べさせました。使者は間もなく歸つて来て、國王に向つて申しました。「只今、逆捲く怒濤のやうな吼り聲を立て、大軍が押寄せて参りました。馬は天に向つて嘶いて居ります。大地はそのために顛へて居ります。何處から参つたものか、私にはとんと分りませぬ。」國王は愕いて色を失ひ、玉座から下り落ちむばかりに顛へ上りました。それから宰相に向つて申しました。「その大軍に對してわが軍隊は出動しないのか。」その言葉が終るか終らぬうちに、侍従が押し寄せて来た國王の使者を伴つて這入つて参りました。その使者の中にはター・ジェル・ムルークと一緒に来た宰相が加はつて居りました。彼はまづ國王に挨拶をいたしました。國王は立ち上つて彼を迎へながら、自分の座近く召して、その來由を訊ねました。で、宰相は進んで王に近づきながら申しました。「只今御領内に馬を駐めた國王は、これまで世にあつたやうな國王でもなければ又昔からあつたやうな帝王でも御座いませぬぞ。」——「さう言ふお方は、一體何誰ですか。」と、國王は訊ねました。宰相はそれに答へました。「正義と平和の君にして、その寛仁大度の名聲は普く隊商の間に知れ渡りたるエル・アデル・カドラー及びエル・アムデーイン及びイスバハン山脈の君スレイマーン・シヤール帝王で

正義と公平を愛し、暴虐と壓政を憎みたまふお方で御座いますぞ。で、わが君が貴方に仰せられますには、わが君の子息が貴方の御領内なる都の中に居られます。彼はわが君の心の生ける魂で、又その喜悅であります。で彼が無事に居りますれば、それは固より望むところで、貴方に感謝し、貴方を讃美いたされませう。が、萬一御領内に居らず、その身に何か凶事が起つたとすれば、貴方の身は破滅、貴方の領地は立ち所に失はれてしまふことを御承知下さい。そして、貴方の國は渡り鳥が鳴き叫ぶ荒野となつてしまひませう。これが私のお傳へ申す使者の言葉で御座います。平和よ、君の上にあれ！」シャー・ゼマーン王は使節のこの言葉を聞くと、心中に不安を感じて、自分の國土が心配になり出しました。で、國中の諸侯、宰相、侍従、軍人どもをお召しになりました。そして、彼等が御前へ出た時、彼等に申し渡されました。「汝等は禍なる哉！直様その青年を探し出せ！」——所が、その青年は執行官の劍の下に居るので御座います。が、彼は今まで受けた恐怖と心痛のために、すつかり容子が變つてみました。が、その時宰相は不圖側を見て、國王の子が血潮に染んだ皮の敷物の上に坐つてゐるのを見附けました。そして、彼と知るや、いきなり立ち上つて、彼の上に身を投げ懸けました。他の使者どもも同じやうに致しました。そして、彼の繩目を解いて、その手や足に接吻いたしました。すると、ター・ジェル・ムルークは兩眼を開いて、宰相や自分の伴侶のアジーズを見ると、嬉しさの餘りに氣を失つて、その場に倒れてしまひました。

シャー・ゼマーン王はこの場の仕儀に當惑して、さては大軍の押し寄せたのはこの青年のためであつたかと、今更のやうに心配し始めました。彼は立ち上つて、ター・ジェル・ムルークの方に歩み寄りながら、その手に接吻して、眼に涙を溜めて申しました。「お、わが子息よ、腹を立てないで下さい。悪い事をした者を恨まないで下さい。何卒俺の白髪を憐れと思つて、俺の領土を潰すやうなことをしないで下さい。」ター・ジェル・ムルークは又彼の方に近寄つて、その手に接吻しながら申しました。「貴方に何の咎も御座いませんよ、貴方は私の父上と敬ふべきお方ですもの。何卒わが戀人ツニーヤ姫の上に凶い事の起らぬやうに氣を付けて下さいませ。」——「お、わが君よ。」と、國王は申しました。「姫のことを心配なさるな、姫の上にはたゞ幸福があるばかりですから。」彼はなほ自分の辯解を續けました。それからスレイマーン・シャー王の宰相の機嫌を取つて、今見た一伍一什は王に祕して置いて貰ふやうに、多額の金を與へることを約束いたしました。それから大官どもに命じて、ター・ジェル・ムルークを浴場に案内して、一番好い王服を纏はせた上、すぐに又こゝへ連れて來させるやうにしました。彼等はその通りにいたしました。まづ浴場へ案内して、シャー・ゼマーン王が彼にとて定めた一襲ねの服を彼に被せて、再び接見の間へ連れ戻りました。それを見ると、國王並びに國中の諸侯は皆立ち上つて彼を迎へました。そして、彼等は皆、彼の側に侍立しました。ター・ジェル・ムルークは下に坐りながら、父王の宰相やアジーズと一緒に今まで自分の身に起つたことに就い